20号横穴墓

1．立地、調査前の状況

20号横穴墓は横穴墓群の中央付近に位置し、ほぼ西方に開口する横穴墓である。斜面の上方、標高33ｍ付近に設けられている。全長は約11.5ｍで、主軸はＮ－56.5°－Ｅにとる。10数年前に土砂採掘が行われ、玄室の天井部が陥没し発見されたものであり、本横穴墓群の発見の契機ともなったものである。その後は地主の理解により保存策として開口部分には上屋が設けられていた。調査時には玄室内の遺物や流入土砂は除去されており、玄室そのものの保存状況は比較的良好であった。なお、墓道は完全に埋没しており地表での確認はできなかった。調査は玄室内の清掃に続き、墓道プランの確認と同埋土の検討、閉塞施設の調査、撤去を行った。

2．規模、構造

1）墓道、羨門部

a）規模、構造　墓道は全長8.10ｍ、羨門付近で上部幅1.90ｍ、底面幅1.17ｍを、墓道入口で上部幅1.1ｍ、底面幅1.0ｍを測る。壁高は最奥部の羨門付近で約1.80ｍを測る。墓道の床面はほぼ平らで羨門に向って約10°の傾斜で上る。なお、墓道入口から約８ｍ羨門に寄った位置まで墓道幅が狭くなり、その後羨門部に広がり逆台形を呈している。この部分の中央には玄室からの排水溝が約1.2ｍ掘られており、その溝の端部付近が床面上でゆるい段となっている。排水溝には人頭大の河原円礫を６個蓋石として使用している。墓道の最奥部は70～80°の傾斜をもつ壁となり、側壁とほぼ直角に接している。側壁の傾斜は下部で60～70°であり、上部で風化のためにややゆるくなっている。

羨門の入口部分は崩壊が激しく旧状を大きく損っている。断続的に残っている部分から復元すると、羨門を囲んで５～８㎝の深さに逆Ｕ字形の額縁状の掘りこみを設け、二重門構えにしている。外側の高さは約70㎝、幅は下端で約90㎝、上端で約70㎝を測る。その内側に高さ約70㎝、幅約45～50㎝の羨門が穿たれている。

閉塞施設は額縁状の掘りこみを覆うように構築されている。なお、後述する墓道内埋土の観察から、この施設は追葬の過程で上部を一度取り除き、再構築していることが明らかになった。まず、排水溝の蓋石の上に同様の人頭大の河原円礫を５～６個置いているが、これは初葬時の閉塞の残存部である。次にこの円礫の上に３枚の安山岩の板石を置き、立てかけるように羨門を塞いでいる。さらにこれを固定するように埋め戻しの過程で数個の河原円礫を板石の回りに配置している。羨門を覆う板石のうち羨門に直接接する２枚には片面に赤色顔料が多量に塗布されている。塗布された面は１枚が羨門側を、１枚が墓道側を向いていた。

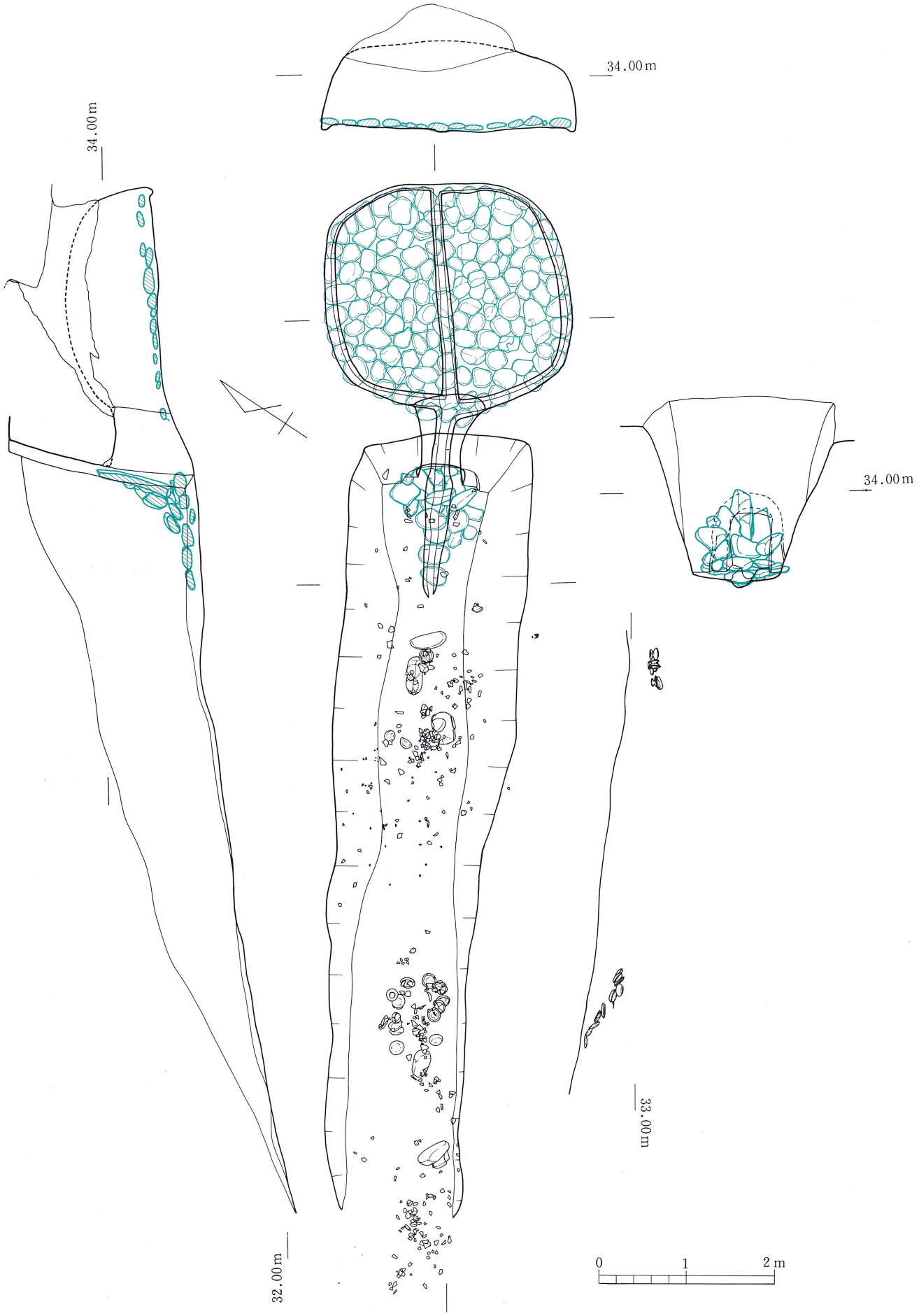
b）墓道内埋土　墓道内の堆積土壌はその性状から、比較的明瞭な層区分が可能であり、全体で12層群34層に分層した。以下、堆積順に説明する。

第１層群（Ⅷd層）は、横穴墓形成以前の旧表土である。

第２層群（Ⅷc層）は、墓道形成直後に床面に堆積した基盤層の二次堆積物であり、20～40㎝の層厚がある。羨門から約4.5ｍの位置まで標高約33ｍでほぼ水平な面を造っており、人為的な整地層の可能性がある。本層の上面に遺物Ｅ群がある。

第３層群（Ⅷb層）は、下位層群に類似した性状を示し、同層を覆って堆積している。上部はやや暗色があり炭化物片を含み、腐植土が混入している。全体によくしまっているが、本層群中位に特に固い面があり、何らかの遺構面と推定される。本層群を初葬時の墓道内埋土と推定している。

第４層群（Ⅶb～d層）は、羨門から約５～７ｍの範囲に20～30°の傾斜をもち堆積している。本層群はさらに４層に細分され下位から(1)炭化木を含む焼土層、(2)基盤層の二次堆積物、(3)焼土、炭化物片層、(4)基盤層の二次堆積物の順にそれぞれレンズ状に堆積している。(1)層の炭化木は放射状に配列され(2)層に密閉された状態で出土した。(2)層上面には須恵器の配列状態をよく残す遺物Ｂ群がある。なお、堆積状態と遺物Ｂ群の配列状態から祭祀行為の一部が復元できた。詳細は考察編の中で触れるが、堆積状態から次のような本層群形成の工程が予測



第109図　20号横穴墓平・断面図

される。

まず、第２・３層群の墓道東側斜面を約30°の傾斜に浅い窪みをもたせ掘り削っている。その上に約50×70㎝の範囲で枝材を寄せ木の状態にし、火が焚かれる。これらが完全に燃え尽きないうちに基盤層の二次堆積物で覆われる。この堆積物は最大20㎝の厚さであり、上面が再び約30°の傾斜に整地される。その斜面に遺物Ｂ群を配列し据え置く。さらにこの遺物Ｂ群の東側前面に東西約75㎝、南北80㎝以上の浅い掘方を設け、その中で再び火が焚かれる。これは約40×60㎝の範囲に焼土、炭化物層を形成し、東端で⑴層と重なっている。この層の上面に閉塞石と同様の河原円礫が据え置かれている。最後にこれらの遺物Ｂ群と焼土、炭化物層などは基盤層の二次堆積物に覆われている。なお、遺物の配列状態のみだれや接合破片や炭化物片が斜面下位にまで分布していることから、本層が形成以後斜面下位に向って少なからず動いた（流出した）可能性がある。

第５層群（Ⅵe・f層）は、羨門から約７～10ｍの範囲に約20°の傾斜で堆積している。本層群は20～30㎝の層厚をもち、下部は風化の少ない基盤層の二次堆積物からなり、上部は基盤層起源の小礫を多く含む腐植土混入の風化土層である。本層中には遺物Ｅ群が分布する。

第６層群（Ⅵc・Ⅶa・Ⅷa層）は、羨門から4.5ｍの範囲に水平から約10°の傾斜で堆積している。本層群は第３層群を切って標高33.3ｍ付近で閉塞施設に達している。さらに３層に細分される。最下層の⑴層は風化の少ない基盤層の二次堆積物からなり、踏み固められたように固く締まっている。⑵層も同様の性状を示すが、炭化物片や腐植土などを混えてややよごれている。本層中に遺物Ｃ群が分布している。以上の⑴⑵層は墓道内埋土中に掘られた浅い皿上の掘方内に堆積している。⑶層はこれらの遺構と閉塞施設の下半部を覆い堆積する。本層中、閉塞から約３ｍ付近に遺物Ｄ群が分布している。本層は全体に比較的締っているが特に上面が固く締っている。層厚は最大30㎝を測る。本層群は閉塞施設の下半部を覆う人為的堆積物と連続し、同時に遺物Ｃ・Ｄ群を覆っている。こうしたことから埋葬に関わる埋土の可能性が高い。

第７層群（Ⅵa・b層）は、羨門から約1.5ｍの位置から約7.0ｍの範囲に第４・６層群を覆い堆積している。本層群は大きく二分される。下部は風化土層であり、腐植土の形成により下位の層群を侵食している。遺物Ｄ群は本層に含まれるが、遺物Ｄ群中の横瓶の下面まで腐植を受けていることから、これらは本来第６層群直上に据え置かれていた可能性が高い。また、遺物Ｄ群を覆う腐植土の形成やその接合資料が斜面下位に広がっていることからこの面（第７層群下部）が一定期間腐植や風化流出を受ける状況にあったこと、すなわち地表をなしていたことを示している。本層群の上部は自然流入土のローム質土が堆積している。

第８層群（Ⅴa～i層）は、羨門部と閉塞施設上部を覆って堆積している暗～黒褐色土とローム質土の互層からなる埋土であり、固く締っている。本層群は羨門部から約３ｍの範囲に閉塞施設上部に向って斜めに穿たれた掘方を覆っている。この掘方は平面形をつかみ得ていないが、床面に段落ちを持ちながら羨門部へ下る前庭部状をなしていたと推定される。本層群中には土器片が小量検出された。本層群はその堆積状態から最後に閉塞施設を閉じた後の人為的な埋土と考えられる。

第９層群（Ⅳa・b層）は、羨門から約１ｍの位置から約５ｍの範囲に堆積している。本層群は大きく二分される。下部はクロボク質の土壌であり、腐植土の形成により下位層群が侵食されている。上部はローム質土である。本層群は自然作用による風化流入土であり、下部に須恵器片など少量の遺物が分布している。

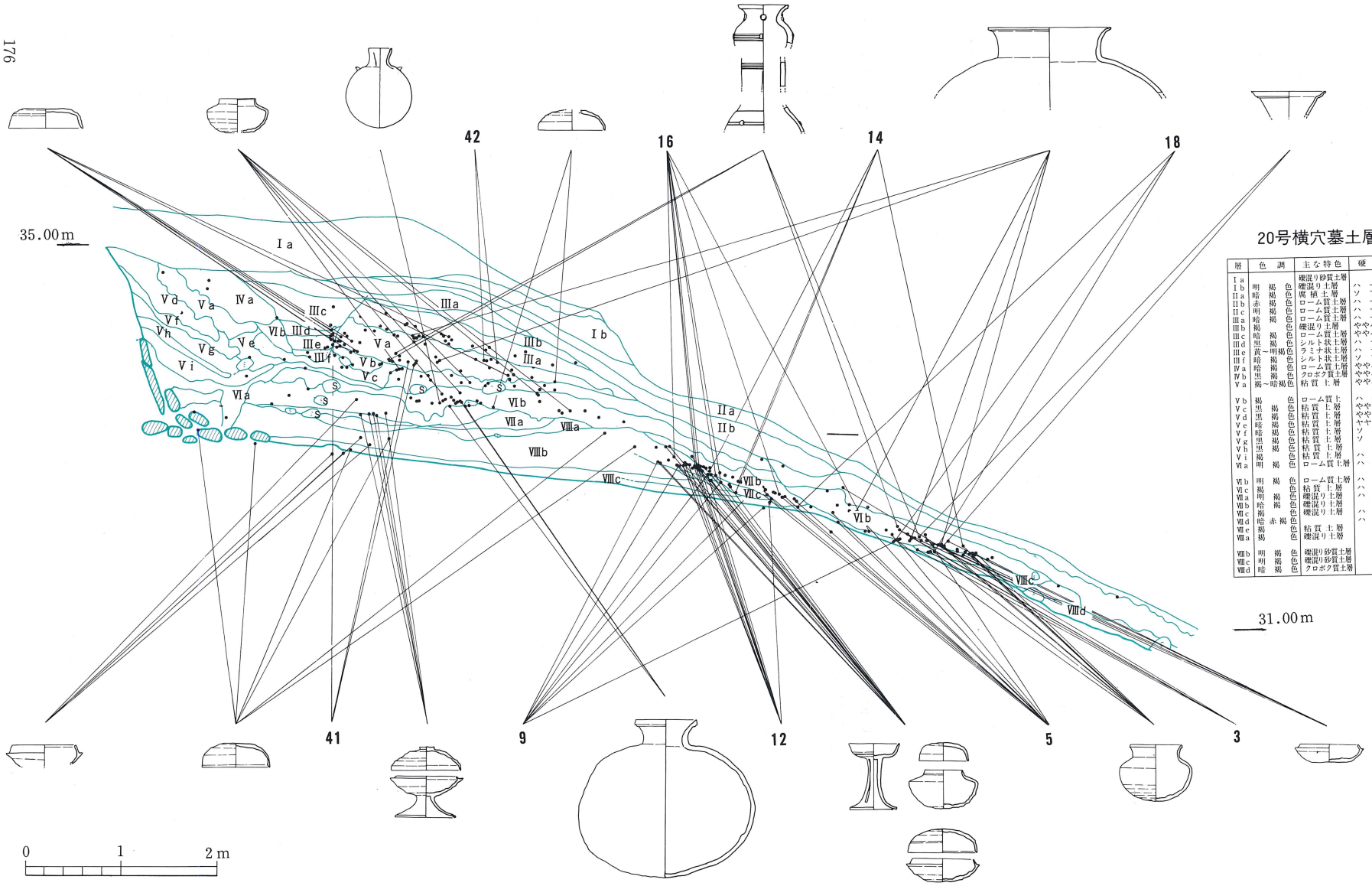
第10層群（Ⅲ層）は、中世（14世紀以降）の溝の覆土とそれに関連する堆積物である。

第11層群（Ⅱ層）は、1968年頃の、造成以前の旧地表である。

第12層群（Ⅰ層）は、1968年頃から始められた付近の造成に伴う堆積物である。本層群の上面が現地表である。

２）羨道、玄室

羨道は長さ0.76ｍ、幅0.48ｍ、高さ0.79ｍ前後であり、羨門幅、玄門はほぼ同規模である。玄室は長さ2.48ｍ、裾部幅2.80ｍ、奥壁幅2.81ｍのやや胴張り気味の隅丸方形を呈し、床面には幅約10㎝の排水溝が設けられている。なお、羨道部分は二次的な攪乱によって明瞭ではない。床面はほぼ平坦であり、玄室全体に人頭大の河原石を敷きつめている。この敷石の構築は中央の排水溝の上から左右に拡げるように行っている。天井はドーム形を呈し



20号横穴墓土層観察表

層	色調	主な特色	硬さ	評価・解釈
Ⅰa		礫混り砂質土層		1層は造成土
Ⅰb	明暗赤明暗褐褐色色色

ており、床面からの高さは中央付近で推定0.99ｍ前後であり、玄室と羨道の天井での境界は段で設けられている。

３．遺物の出土状態

１）玄室内

玄室内からは調査前に須恵器、鉄製馬具等が発見され、地主の方によって保管されていた。その後数回の清掃が行われたというが、遺物の発見や保管は記憶されていない。今次の発掘調査によって、主に敷石間から新たな遺物の出土があった。これらを合せて見ると、須恵器：有蓋高坏１（第116図182）、提瓶１（第116図189）、鉄器：馬具２、鏃１、刀子１、不明鉄器１、耳環：銅芯金箔２、玉類：ガラス製丸玉１、同小玉43、滑石製臼玉84、人骨片少量である。このうち出土位置の判明しているものは鉄器が羨道部に近い東側と、中央部西よりの敷石間であり、耳環１点の東側側壁に近い奥部の敷石上である。この他は敷石間埋土の水洗作業中に検出したものであり、出土位置は明確でない。なお、人骨片は微細な破片であり、その形質的な特徴は不明である。

２）墓道内

墓道内の遺物の出土層位については、墓道内埋土の項で示した。ここでは遺物の出土状況について述べる。

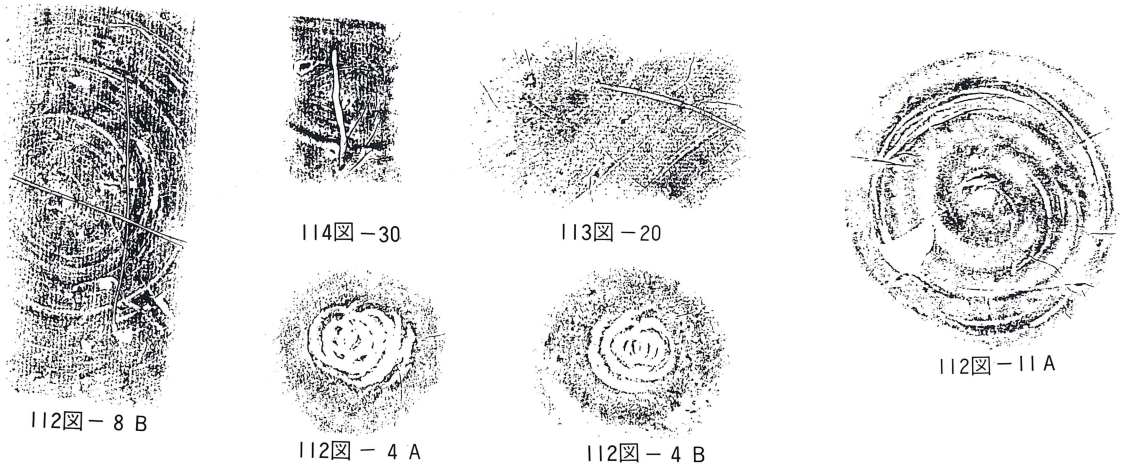
Ａ群は墓道床面に近い0.7×2.0ｍの範囲に破砕散布状態で検出した。須恵器坏蓋１、坏身１からなる。坏身底部には焼成前穿孔があり、さらに破砕はまず底部を穿孔した後に行われたとみられる。また、坏蓋・身の破片の割面には不規則な小剝離や摩滅痕が認められる。

Ｂ群は羨門から約5.5ｍ離れた墓道内埋土中に配列埋置状態で検出された。それは須恵器坏セット９（第112図２～９、12）、無蓋高坏１（第112図17）、有蓋壺１（第112図11）の計20個体からなる。検出時の状態と埋土の観察から次のような配列状況が復元された。まず、墓道内の埋土上面に盛土によって墓道外に面した約30°の傾斜面を造る。その傾斜面を利用し、雛壇状に須恵器を配列している。配列は斜面中央に空間を設け、円形に並べている。左壁側に坏セット５が、右壁側に坏セット３、有蓋壺１が一部重なりつつ配置され、さらに中央最下段に無蓋高坏１が配置されている。高坏は脚部が割れ、倒れて出土したが、本来は正置していたと推定される。埋土の観察の項で触れたが、この配列の前後の段階に火を焚いている。配列後にその前面で焚火を行い、その後に閉塞石と同様の大きな河原円礫を据え置いている。円礫には火を受けた痕跡はない。この円礫の周辺と配列須恵器前面の墓道内には須恵器の破片が集中的に分布していた。その構成は坏蓋11（第112図16・18・第114図35）、坏身８（第112図10・13・14）、高坏１（第114図41）、瑞１（第112図15）、坩１（第113図19）、広口壺１（第113図20）、甕２（第113図21・22）、器台１（第114図34）の計26個体からなる。このうち坏蓋と坏身のうち２組は焼成時のセットと考えられる。これらは型式的に３時期の遺物からなり、検出面が現地表から浅い位置にあることから、後世の遺物が混入している可能性が強い。

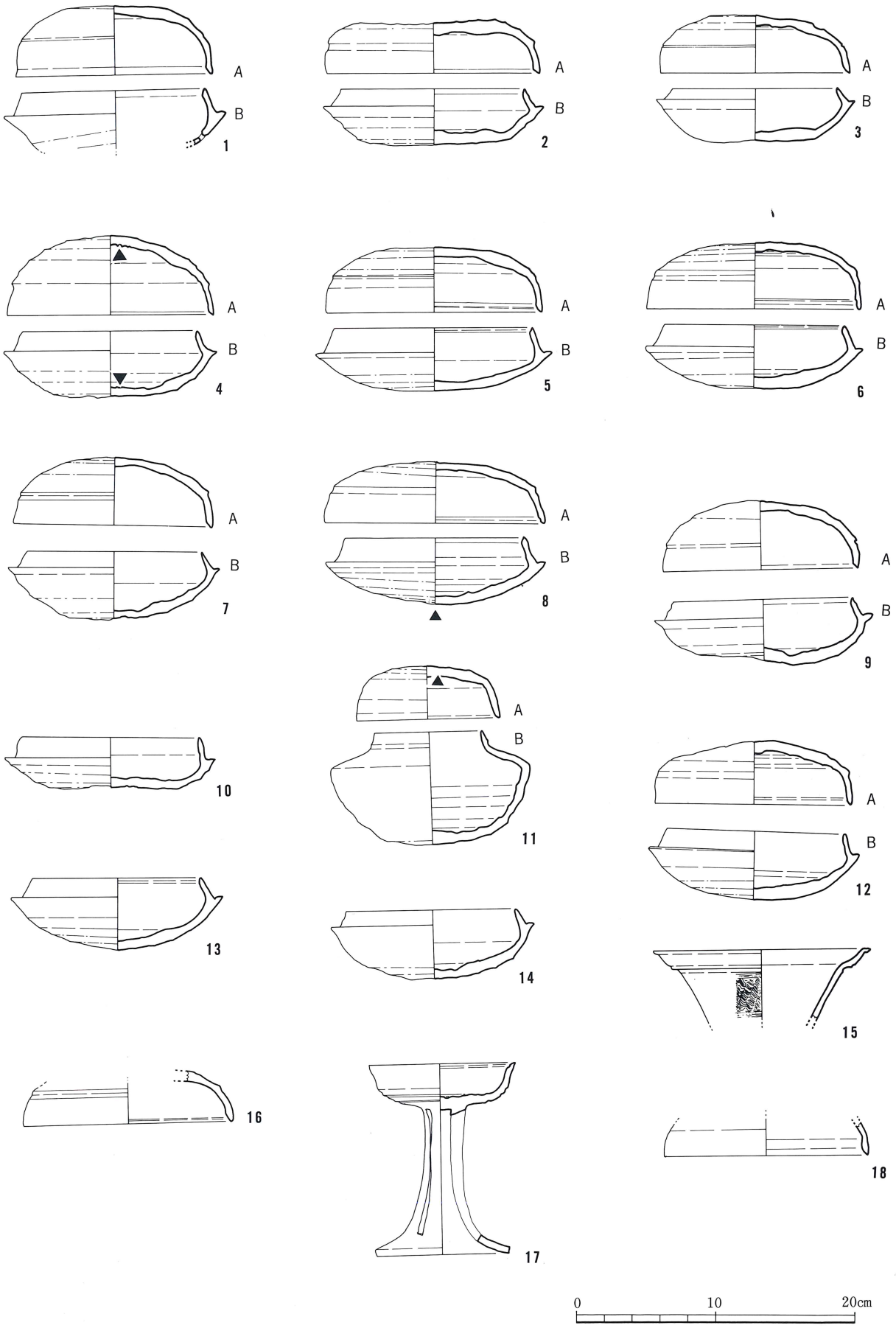
Ｃ・Ｄ群は羨門部から約３ｍ離れた墓道内埋土中に埋置状態で検出された。これらは調査過程では別群として把握していたが、有蓋高坏のセット関係や埋土の検討から一連の遺物群であると判断した。埋置はＣ群を最初に、続いてＤ群の順に行っている。これらは須恵器坏蓋２、有蓋高坏６セット（第113図23～29）、横瓶１（第114図43）、提瓶１（第114図30）の計16個体からなる。まず、墓道内に長さ約2.8ｍ、幅約0.8ｍ、深さ約0.2ｍの掘方を設け、平坦に埋土が形成される。Ｃ群はその上に配列状態で埋置された須恵器類と大きな河原円礫である。またこの遺構の北側に接して径約15㎝の柱穴が検出されたが性格は不明である。その配列はまず、やや平坦な円礫を掘方中央部に据え置き、その円礫の北端上面に有蓋高坏１セットの坏部と蓋部を何れも内面を上向きに重ねて置く。その円礫の東側に有蓋高坏１セットを同様に内面上向きに重ね据え置き、それに接して有蓋高坏の坏部２点と蓋部１点を置いている。この内、坏部１点が横倒しの状態であり、他の２点は内面を上向きにしている。こうした須恵器の配置の後、一定量の土砂で須恵器が僅かに覆われる高さまで掘方ともども埋めている。この上に20×40㎝程度の大きな円礫２個と10×20㎝程度の亜角礫５個を集中させ置いている。次に、Ｄ群はこれらの南側の埋土上に配置された須恵器類である。墓道中央部に横瓶１点を正置し、その西側に有蓋高坏の坏部１点、蓋部２点を内面を上向きに置き、やや離れた西側壁に接して提瓶１点を倒置している。これらは提瓶を除いて全て破

砕している。破砕は後に土圧など上部からの圧力で発生したと見られ、本来は完形であったと推定される。横瓶内からは破砕時に混入したと推定される径15cm程度の亜角礫が検出された。このＤ群を覆う第７層群は腐植土であり；腐植土の形成は横瓶の下部にまで達する。Ｄ群に一定の盛土が存在したとしても僅かな層厚であったと推定される。なお、このＤ群埋置の同一面の北側と閉塞部前面約0.5m付近に炭化物の集中的分布が認められたが、何れもその地点で火を焚いた確証はつかめなかった。

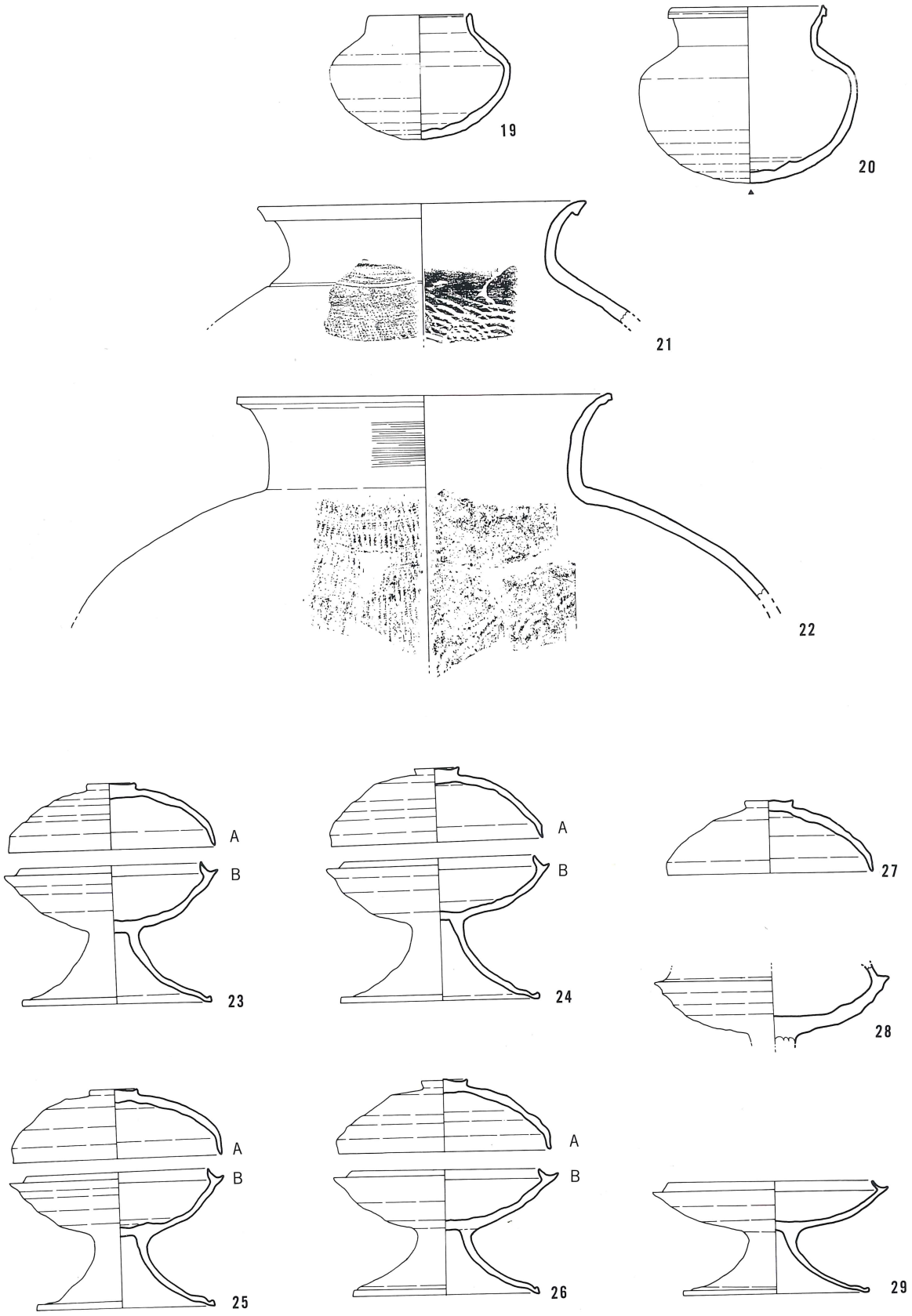
なお、墓道内からは以上に挙げた遺物の他に、各層群に混入したあり方で須恵器片、土師器片などが出土した。その中で第８・９層群には比較的まとまった遺物の出土があった。しかし、本遺構に直接伴うものか、伴うとしたらどの遺物群や遺構面に関係するかは判断し難い。それらは須恵器坏蓋３（第114図32、35）、坏身４（第114図37、40）、高坏３（第114図38、39）、坩１（第114図42）の計12個体がある。その他に弥生後期と推定される高坏軸部１（第114図33）も出土している。(吉留秀敏)



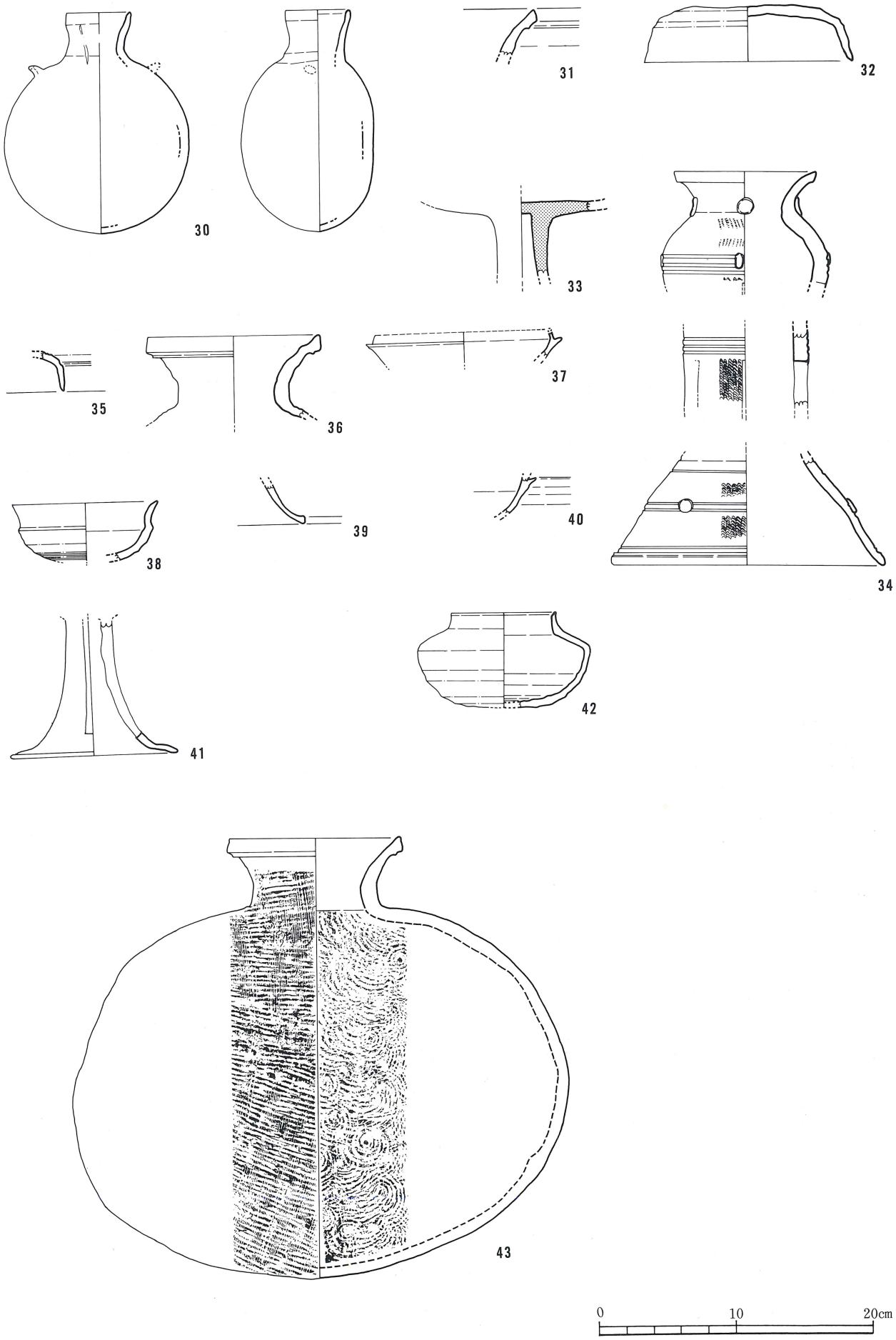
第111図　20号横穴墓出土土器ヘラ記号



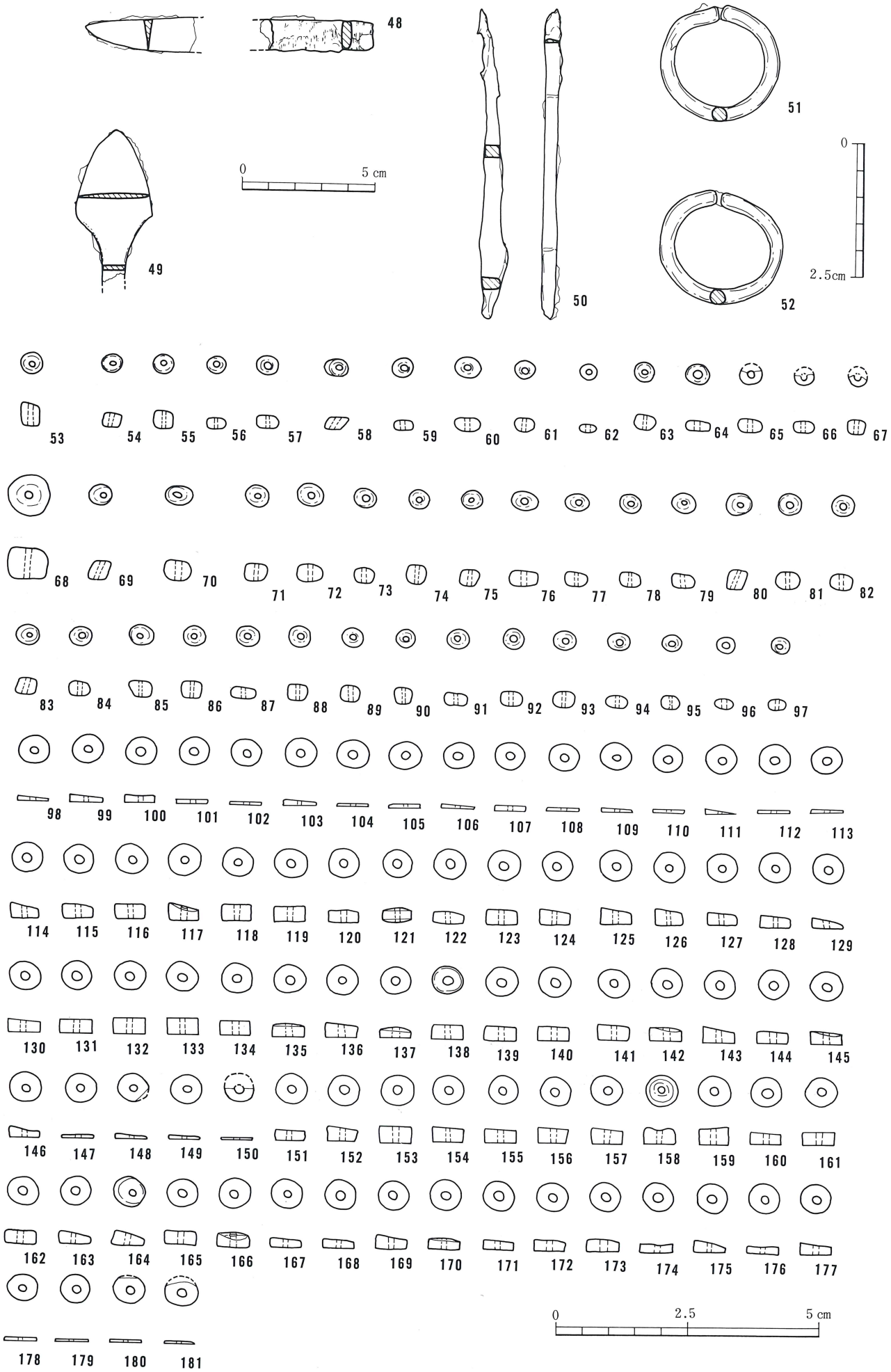
第112図　20号横穴墓出土遺物実測図(1)



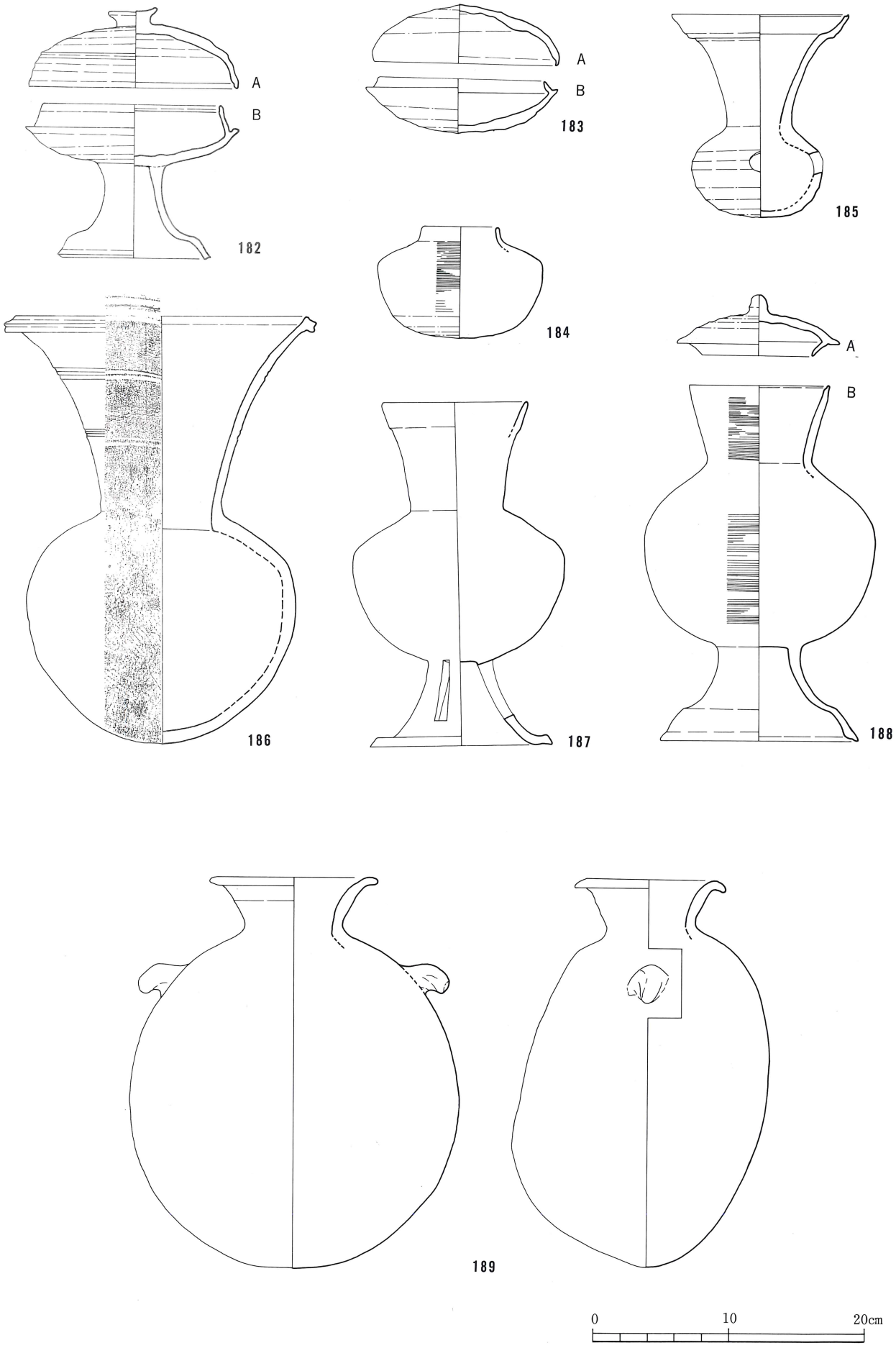
第113図　20号横穴墓出土 遺物実測図(2)



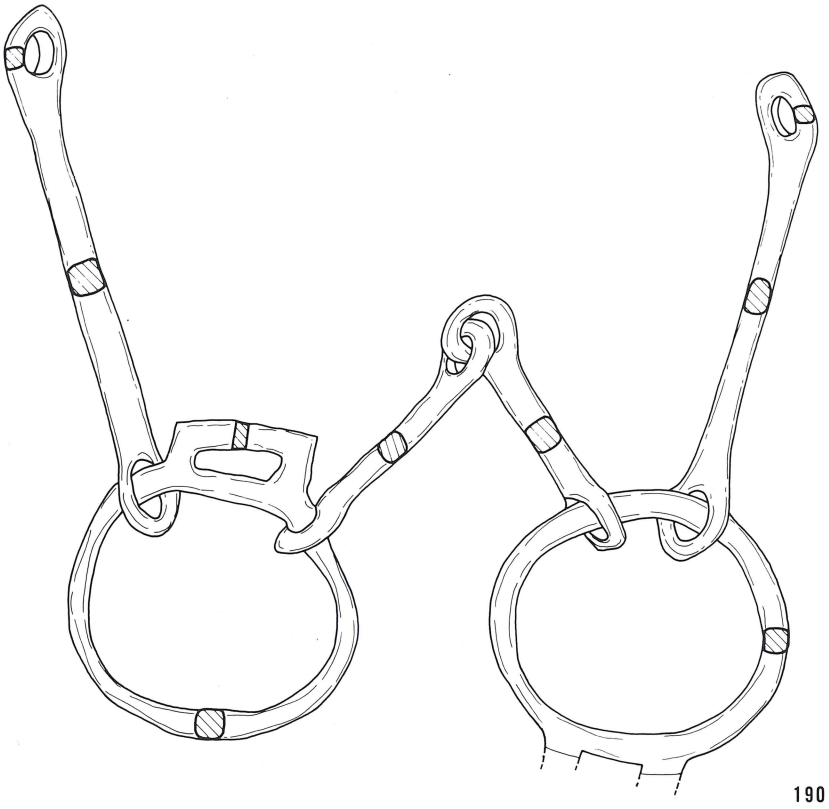
第114図　20号横穴墓出土遺物実測図(3)

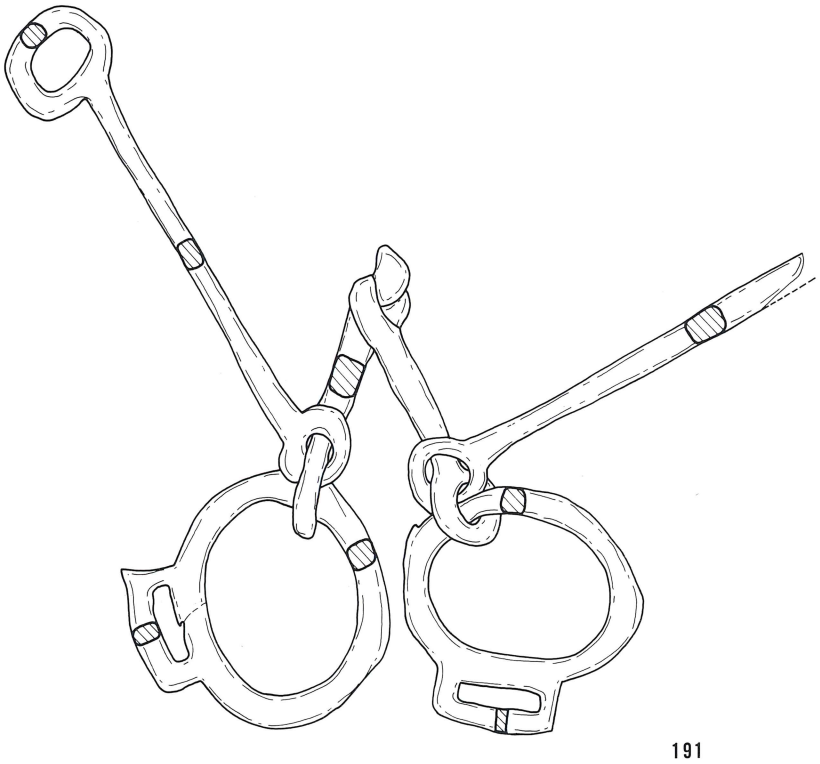


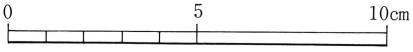
第115図　20号横穴墓出土遺物実測図(4)



第116図　20号横穴墓出土遺物実測図(5)







第117図　20号横穴墓出土遺物実測図(6)

第38表　20号横穴墓出土土器観察表

（単位：cm）

番号	器種	法量 ・口径 ・器高 ・胴部最大径	形態の特色	技法の特色 内面	外面	色調	胎土	焼成	備考	ヘラ記号の有無
1—A	坏蓋	・13.9 ・5 ・—	口縁部は、ほぼ垂直に下り、端部は、わずかに外反し、内傾する面を有す。外面には稜がはっきりとみとめられる。天井部は、やや高く平らである。	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	灰色 青灰色	2㎜以下の石英粒を含む	やや良 堅緻		
1—B	坏身	・12.9 ・4.3 ・15.7	たちあがりは、やや内傾してのび、端部は肥厚し丸い。受部は、ほぼ水平にのび、肥厚し丸い。外面受部に重ね焼きの痕跡あり。	回転ナデ	回転ナデ	灰色	精緻	やや良	底部欠損	
2—A	坏蓋	・15.2 ・3.5 ・—	口縁部は、ほぼ垂直に下り、端部は厚く、内傾する面をなす。天井部は、平らである。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	青灰色	1～5㎜の砂粒を含む	良好		
2—B	坏身	・13 ・4 ・15.6	たちあがりは、内傾してのび、端部は、内傾する面をなし、沈線をめぐらす。受部は、ほぼ水平にのび丸い。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	青灰色	1㎜程の石英粒を含む	良好		
3—A	坏蓋	・13.5 ・4.2 ・—	口縁部は、ほぼ垂直に下り、端部はうすく、わずかに外反する。外面体部には、うすい沈線をめぐらす。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	赤灰色 黄灰色	1～7㎜大の砂粒を多量に含む	良好 やや軟質		
3—B	坏身	・11.9 ・3.6 ・13.9	たちあがりは、内傾してのび、端部は丸い。受部は上外方にのび、丸い。内面はたちあがりと胴部の境に明瞭な沈線をめぐらす。	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	赤褐色 やや黄味をおびた赤褐色	1～2㎜大の砂粒を多量に含む	良好		
4—A	坏蓋	・14.8 ・5.1 ・—	口縁部はやや外反しながらのび、端部は、内傾する面をなす。稜はわずかにみとめらる。	回転ナデ 同心円タタキ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	青灰色	1～3㎜の砂粒を多量に含む	良好		
4—B	坏身	・12.2 ・4.5 ・15.2	たちあがりは、内傾してのび、端部は丸い。受部はほぼ水平にのび、端部は丸い。底部はやや平らである。	回転ナデ 同心円タタキ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	青灰色	1～3㎜前後の砂粒を含む	良好		
5—A	坏蓋	・15.2 ・4.4 ・—	口縁部は、わずかに外反しながらのび、端部は、沈線をめぐらし、丸い。稜はわずかにみとめられる。	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	灰色	1～2㎜の砂粒を含む	良好 堅緻		
5—B	坏身	・13.4 ・4.3 ・16.1	たちあがりは、内傾してのび、端部は、内傾する面に沈線をめぐらす。受部はほぼ水平にのび丸い。	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	灰色	1～2㎜の砂粒を含む	良好		
6—A	坏蓋	・15 ・2 ・4.8	口縁部は、ほぼ垂直に下り内面に沈線をめぐらす（凹面をなす）。外面に、丸みをおびた稜がみとめられる。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	青灰色	1～3㎜大の石英粒を多量に含む	良好 堅緻		
6—B	坏身	・12.8 ・4.5 ・15.5	たちあがりは、内傾してのび、端部は内傾し、沈線をめぐらす。受部はほぼ水平にのび、端部は丸い。	回転ナデ 調整ナデ たちあがり部分に指オサエ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	青灰色	1～3㎜大の石英粒を多量に含む	良好 堅緻		

番号	器種	法量 ・口径 ・器高 ・胴部最大径	形態の特色	技法の特色 内面	外面	色調	胎土	焼成	備考	ヘラ記号の有無
7—A	坏蓋	・14.4 ・4.8 ・—	口縁部は、やや外反しながらのび、端部は、内傾する段をなす。外面は丸みをおびた稜がある。	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	青灰色	1～3㎜の砂粒を多量に含む	良好		
7—B	坏身	・12.7 ・4.8 ・15.2	たちあがりは、内傾してのび、端部は丸い。受部はほぼ水平にのび、端部は丸い。底部はやや深く丸みをおびる。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	灰色	1㎜以上の石英粒を含む	良好 堅緻		
8—A	坏蓋	・15.7 ・4.4 ・—	口縁部は、やや外反しながらのび、端部は丸く内面にはっきりした沈線をなす。天井部は低く平らである。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	灰色	1～2㎜の砂粒を含む	良好 堅緻		
8—B	坏身	・12.8 ・4.7 ・15.7	たちあがりは、内傾してのび、端部は内傾する段を有す。受部はほぼ、水平にのび端部は丸い。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	灰色	1～2㎜の砂粒を含む	良好		外面底部「X」
9—A	坏蓋	・14 ・4.9 ・—	口縁部は、ほぼ直下に下り、端部は、内傾する段を有す。外面には、はっきりとした稜が、みられる。天井部は高く、丸みをおびる。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	灰色	1～5㎜の石英粒を含む	良好 堅緻		
9—B	坏身	・12.8 ・4.4 ・15.4	たちあがりは、内傾してのび、端部はわずかに外反し丸い。受部は、水平にのび丸い。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	灰色	2㎜以上の石英粒を含む	良好		
10	坏身	・12.7 ・1.4 ・15	たちあがりはほぼ直立してのび端部は丸い。 受部は垂直にのび端部はとがる。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	灰色 灰白色	3㎜程の砂粒を含む	良好		
11—A	坩蓋	・10.2 ・3.9 ・—	口縁部は、わずかに外反しながらのび、端部内面は、わずかに、段をなす。天井部は、やや高く丸みをおびる。	回転ナデ 同心円タタキ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	青灰色	1～3㎜大の砂粒を含む 精緻	良好 堅緻		
11—B	短頸壺	・8 ・8.3 ・13.9	口頸部は短く内傾してのび、端部は丸い。胴部と口縁部の間は、うすい沈線がある。	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	青灰色	1～3㎜大の石粒を含む	良好		
12—A	坏蓋	・14 ・4.5 ・—	口縁部は、ほぼ垂直に下り端部は丸く、内面に1本の沈線がある。外面には、わずかに稜がみとめられる。天井部は平らである。	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	淡灰～ 黒灰色	1㎜以下の砂粒を含む	良好		
12—B	坏身	・12.9 ・4.8 ・15.1	たちあがりは、内傾してのび、端部は丸い。 受部は、やや上外方にのび、端部は丸い。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	灰褐色	1～2㎜の砂粒を多量に含む	良好		
13—A	坏身	・12.8 ・4.7 ・15.5	たちあがりは、内傾してのび、端部は内傾する面をなす。受部は、ほぼ水平にのび、端部は丸い。底部は浅く平らである。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	灰色	1㎜以上の石英粒を含む	良好		
14	坏身	・12 ・5 ・14.5	たちあがりは、内傾してのび、端部は丸い。受部は、ほぼ水平にのび、わずかに肥厚する。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	青灰色	1～3㎜の砂粒を多量に含む	良好		

番号	器種	法量 ・口径 ・器高 ・胴部最大径	形態の特色	技法の特色 内面	外面	色調	胎土	焼成	備考	ヘラ記号の有無
15	瓹	・14.8 ・5＋α ・—	口頸部は、上外方にのび、端部付近で、外方へ屈曲し、さらに上外方にのびる。端部は内傾する平面をなす。	回転ナデ	回転ナデ 波状文	青灰色	1㎜前後の砂粒を含む	良好		
16	坏蓋	・15 ・3 ・—	口縁部は、外反しながらのび端部は丸く、うすい沈線をめぐらす。稜はうすくみとめられる。	回転ナデ	回転ナデ	灰褐色	1㎜前後の砂粒を多量に含む	良好		
17	高坏	・10.4 ・13.8 ・—	口縁部は、外反しながらのび、さらに上外方にのび端部は、うすい凹面をなす。坏部外面には、2本の沈線がある。脚部は長く、下外方にのび、端部は面をなす。長方形スカシ窓が、三方向にある。	回転ナデ	回転ナデ	淡灰褐色	1㎜程の砂粒を含む	良好		
18	坏蓋	・14.6 ・2.8 ・—	口縁部は、ほぼ直下にのび、端部は内傾するゆるい面をなす。	ナデ	ナデ	青灰色	精緻	良好		
19	短頸壺	・6.8 ・8.4 ・12	口頸部は、短く、ほぼ直立しながらのび、端部は内傾する凹面をなす。胴部の最大径は、ほぼ中央部にある。底部は、ややとがりぎみである。	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	灰褐色	精緻	良好 堅緻		
20	壺	・10 ・12 ・14.6	口頸部は、わずかに外反しながらのび、端部はかえり、外面に凸面をなす。胴部の最大径は、上方にあり、底部は、丸みをおびる。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	黄灰色	1㎜前後の砂粒を含む	良好		外面底部「Ⅰ」
21	壺	・22 ・8.6＋α ・—	口頸部は、外反しながらのび、端部は面をなし、下方で段をなす。	回転ナデ 同心円タタキ	回転ナデ 平行タタキの後回転カキ目	青灰色 赤茶灰色	0.5㎜大の砂粒を含む 精緻	やや良好		
22	壺	・25.4 ・16＋α ・—	口頸部は、ほぼ、直立しながらのび、端部付近で外反し端部は、面をなす。面の下部が肥厚し凹面をなす。	回転ナデ 同心円タタキ後磨り消し	回転ナデ 回転カキ目 平行タタキ	青灰色	石英粒を含む 精緻	良好 堅緻		
23－A	坏蓋	・13.7 ・4.4 ・—	口縁部は、ほぼ、垂直に下り、端部は丸い。 外面頂部にツマミがある。	回転ナデ	回転ナデ	淡灰褐色	1㎜以下の砂粒を多量に含む	良好		
23－B	有蓋高坏	・12.1 ・9.4 ・14.2	たちあがりは、内傾してのび、端部はとがる。受部は、上外方にのび、端部はとがる。脚部は下外方にのび、端部は垂直な平面をなす。	ナデ	ナデ	淡灰褐色	1㎜以下の砂粒を多量に含む	良好		
24－A	坏蓋	・14 ・5 ・—	口縁部は、ほぼ、垂直にのび、端部は細く丸い。外面頂部にツマミを有す。	回転ナデ	回転ナデ 回転カキ目	淡灰色	細かい砂粒を多量に含む	良好		
24－B	有蓋高坏	・12.8 ・9.6 ・14.8	たちあがりは、内傾してのび、端部は丸い。受部は上外方にのび、端部はややとがる。脚部は下外方にのび、端部は垂直な面をなす。	回転ナデ	回転ナデ	淡灰色	細かい砂粒を多量に含む	良好		

番号	器種	法量 ・口径 ・器高 ・胴部最大径	形態の特色	技法の特色 内面	外面	色調	胎土	焼成	備考	ヘラ記号の有無
25－A	坏蓋	・13.7 ・4.6 ・－	口縁部は、ほぼ垂直にのび、端部は丸い。外面、天井部にツマミがつく。天井部は、丸みをおびる。	ナデ	ナデ	灰白色	精緻	不良		
25－B	有蓋高坏	・12 ・9.1 ・14.4	たちあがりは、内傾してのび端部はとがる。受部は上外方にのび、端部はとがる。脚部は、下外方にのび、端部でかえり丸い。	ナデ	ナデ	淡灰褐色	細かい砂粒を含む	良好		
26－A	坏蓋	・14 ・4.9 ・－	口縁部は垂直に下り端部は丸い。外面天井部はツマミがつく。天井部はやや高く、丸みをおびる。	回転ナデ 回転カキ目	回転ナデ	灰白色 灰色	1㎜以下の砂粒を多量に含む	不良		
26－B	有蓋高坏	・12.4 ・8.4 ・14.9	たちあがりは短く内傾してのび、端部は丸い。 受部は上外方にのび、端部は丸い。脚部は下外方にのび、端部は屈曲し面をなす。	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	灰白色 灰色	1～2㎜の砂粒を含む	やや不良		
27	坏蓋	・13.8 ・4.9 ・－	口縁部はほぼ直下に下り端部はとがる。外面天井部には、ツマミがつく。天井部はやや高く丸みをおびる。	回転ナデ	櫛描文 ナデ	灰白色 淡褐色	2㎜以下の砂粒を含む	やや不良		
28	有蓋高坏	・4.8＋α ・－ ・16	たちあがりは、内傾してのび、端部は、欠損しているため不明。受部は、水平にのび端部はとがる。	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ ナデ	灰色	1～2㎜の石英粒を含む	良好 堅緻		
29	有蓋高坏	・13.8 ・7.5 ・15.5	たちあがりは内傾してのび、端部は丸い。受部は上外方にのび端部はとがる。脚部は、下外方にのび、端部は屈曲し面をなす。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色	細かい砂粒を含む	良好		
30	提瓶	・4.6 ・16.4 ・13.6	口頸部は上外方にのび、端部付近でやや内湾し丸い。肩部にはツノ状の把手があるが、一方は欠損している。胴部は、円形を呈す。	回転ナデ	回転ナデ 回転カキ目	青灰色	1㎜の砂粒を多量に含む	良好		外面頸部「I」
31	甕	・－ ・－ ・－	口縁部は、外反しながらのび肥厚し、段をなす。	ナデ	ナデ	青灰色	精緻	良好		
32	坏蓋	・15.6 ・4 ・－	口縁部は、わずかに外反しながらのび、端部は丸い。外面には、稜がうすくみられる。天井部は低く平らである。	回転ナデ 回転ヘラケズリの後ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	灰色	1～2㎜の石英粒を含む	良好		
33	高坏	・－ ・－ ・－	坏部の口縁部と脚部を欠く。坏部底面は平ら。	ナデ	ナデ	淡黄褐色	2㎜弱の細砂粒を含む	良好	土師器	
34	筒形器台	・10.5 ・25.9＋α ・12.5	口頸部は、外反しながらのび、端部は面をなす。 頸部、体部最大径、脚部裾部の3ケ所に浮文がつく。体部は丸みをおび、脚部は下方に垂直にのび、裾部は外反する。体部、脚部に3条の沈線、裾部に2条の沈線とその上方に1本の沈線あり。	ナデ	ナデ ハケ状原体の刺突文 櫛描波状文	青灰色	精緻	良好		

番号	器種	法量 ・口径 ・器高 ・胴部最大径	形態の特色	技法の特色 内面	外面	色調	胎土	焼成	備考	ヘラ記号の有無
35	坏蓋	・－ ・－ ・－	口縁部は、ほぼ直下にのび、端部は丸い。 外面には、稜がみられる。	ナデ	ナデ 回転ヘラケズリ	灰白色	精緻	良好		
36	壺	・13 ・6＋α ・－	口縁部は、外反しながらのび、端部は面をなし、その下部に、突帯をなす。	回転ナデ 同心円タタキ	回転ナデ 平行タタキ	灰色	精緻	良好 堅緻		
37	坏身	・－ ・2＋α ・14.4	受部は、ほぼ水平にのび、端部は丸い。	ナデ	ナデ	青灰色	精緻	良好 堅緻		
38	高坏	・10.4 ・4.4 ・－	口縁部は、外反しながらのび、端部は丸い。 外面には、稜がみられる。	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ 回転カキ目	青灰色 赤茶灰色	1㎜前後の白色砂粒を少量含む	良好		
39	高坏	・－ ・－ ・－	脚部の端部付近のみ下外方にのび、端部は面をなす。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色	精緻	良好		
40	坏身	・－ ・－ ・－	受部は、上外方にのび、端部は丸い。	ナデ	ナデ	青灰色	精緻	良好		
41	高坏	・12.4 （脚底部） ・9.6＋α ・－	脚部は、下外方にのび、端部は丸い。 長方形のスカシ窓あり。	ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	青灰色	精緻	良好 堅緻	脚部	
42	短頸壺	・7.6 ・7＋α ・12.6	口頸部はほぼ、短く直立しながらのび、端部は、内傾する面をなす。胴部最大径は、上方にある。底部は平ら。	回転ナデ	回転ナデ 回転カキ目 回転ヘラケズリ	灰色	1～2㎜の細砂粒を含む	良好 堅緻		
43	横瓶	・12.8 ・32.4 ・36.8	口頸部は、外反しながらのび、端部は面をなしその下方に、凹面をなす。胴部は、だ円形を呈す。	回転ナデ 同心円のタタキ	回転ナデ タタキを施したあと回転カキ目	明青灰色 青灰色	1～3㎜の白色砂粒をやや多量に含む	良好 堅緻		
182－A	坏蓋	・15.4 ・5.7 ・－	口縁部は、外反しながらのび、端部は、内傾する段を有す。天井部は、やや高く丸みをおび、外面頂部にツマミがつく。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	灰色	1㎜大の砂粒を含む	良好 堅緻	幣旗氏所蔵	
182－B	有蓋高坏	・13 ・11.2 ・15.6	坏部のたちあがりは、内傾してのび、端部は、内傾する段を有す。受部は、上外方にのび、端部は丸い。脚部は下外方にのび、端部付近でさらに外反し端部はシャープな面をなす。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	灰色	1～3㎜大の石英粒を含む	良好 堅緻	幣旗氏所蔵	
183－A	坏蓋	・13.2 ・4.3 ・－	口縁部は、外反しながらのび、端部は丸く内傾する段を有す。天井部は高く、丸みをおびる。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	黒灰色	1㎜前後の石英粒を多量に含む	良好 堅緻	外面に黒色の自然釉付着	
183－B	坏身	・12.0 ・4.0 ・13.9	たちあがりは、内傾してのび、端部は丸い。 受部はわずかに、上外方にのび端部は丸い。底部は浅く丸みをおびる。	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	黒灰色	1～3㎜の石英粒を少量含む	良好 堅緻	重ね焼きの痕跡あり	

番号	器種	法量 ・口径 ・器高 ・胴部最大径	形態の特色	技法の特色 内面	外面	色調	胎土	焼成	備考	ヘラ記号の有無
184	短頸壺	・5.6 ・8.2 ・12	口頸部は短く、内傾してのび、端部は丸い。 胴部最大径は上方にあり、底部は丸みをおびる。	回転ナデ	回転ナデ 回転カキ目 回転ヘラケズリ	青灰色	精緻	良好 堅緻	重ね焼きの痕跡あり	
185	甕	・13 ・15 ・9.6	口頸部は、外反しながらのび、端部付近でさらに外反し、端部は、内傾する凹面をなす。胴部は、だ円形を呈し、底部は平ら。胴部中央部に穿孔あり。	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	灰褐色	2～3㎜の砂粒を含む	良好 堅緻	重ね焼きの痕跡あり	
186	長頸壺	・21.4 ・30.8 ・19.8	口頸部は、外反しながらのび、端部は面をなし、その上に凸面をなす。外面に2条の沈線が、2ケ所にある。胴部は円形を呈し、底部はとがり気味。	回転ナデ 同心円タタキ	回転ナデ 波状文 回転カキ目 後タタキ	青灰色	精緻	良好 堅緻	自然釉が付着している	
187	脚付長頸壺	・10.6 ・25.2 ・15.6	口頸部は、外反しながらのび、端部は丸い。胴部の最大径は上方にある。脚部は下外方にのび、端部は面をなす。長方形スカシ窓が3方向にある。	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ後回転ナデ	青灰色 暗青灰色	精緻	良好 堅緻	自然釉が付着している	
188—A	脚付壺蓋	・8 ・4.5 ・11.9	口縁部は、下内方にのび端部は丸い。受部は水平にのび、端部は丸い。天井部は、やや高く、外面頂部にツマミがつく。	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	暗青灰色 青灰色	0.5～3㎜の白色砂粒をやや多量に含む	良好 堅緻	弊旗氏所蔵	
188—B	脚付壺	・10.2 ・25.6 ・16.9	口頸部は、外反しながらのび、端部はわずかに内傾する面を有す。胴部は、だ円形を呈し、脚部は下外方にのび、端部付近で、さらに屈曲し、端部は、内傾する面を有す。	回転ナデ	回転ナデ 回転カキ目	青灰色 暗青灰色	0.5～3㎜の白色砂粒を多量に含む	良好 堅緻	弊旗氏所蔵	
189	提瓶	・12.4 ・24.4 ・28.6	口頸部は、外反しながらのび、端部はさらに外反し、丸い。胴部は、だ円形を呈し、外面両肩に、ツノ状の把手がつく。	回転ナデ	回転ナデ 回転カキ目	青灰色 明青灰色	精緻	良好 堅緻	弊旗氏所蔵	

第39表　20号横穴墓出土鉄器観察表

（単位：cm）

番号	器種	全長	頭部長（刀部）	刃幅	頸幅	刃部厚	頸厚	備考
48	刀子	8.5以上	4.1以上	1.1		0.2		木質残存
49	鉄鏃	5.5以上	3.3	2.8	0.8	0.15	0.2	
50	不明鉄器	11.6						
191	馬具							轡
192	同上							同上

第40表　20号横穴墓出土耳環計測表

(単位：mm, g)

No	作　り	外　径	断面径	重　量	備　考
51	銅地　金張	13.5×12	3×3	3.15	表面剝落腐食
52	〃　金張	〃	〃	〃	〃

第41表　20号横穴墓出土玉類計測表

(単位：mm, g)

番　号	種　類	材　質	色　調	直　径	短　径	孔　径	重　量	備　考
53	小玉	ガラス	藍	5	3	2	0.1	
54	〃	〃	〃	5	3	1.5		
55	〃	〃	〃	5	2	1.5		
56	〃	〃	〃	5	2	2		
57	〃	〃	〃	4	3.5	1.5		
58	〃	〃	〃	4	3	1.5		
59	〃	〃	〃	4	3	1.5		
60	〃	〃	〃	5	4	1.5		
61	〃	〃	〃	5	3	1.5		
62	〃	〃	〃	4	3.5	1		
63	〃	〃	〃	4	2.5	1		
64	〃	〃	〃	5	3	1		
65	〃	〃	〃	5	3	1		
66	〃	〃	〃	5.5	4	1		
67	〃	〃	〃	5	3.5	1		
68	丸玉	〃	〃	8	7	2	0.6	
69	小玉	〃	〃	5	3	1		
70	〃	〃	〃	5	4	2		
71	〃	〃	〃	6	3.5	2		
72	〃	〃	〃	4.5	3	1		
73	〃	〃	〃	5	3	1		
74	〃	〃	〃	4	3	1		
75	〃	〃	〃	5	2.5	1		
76	〃	〃	〃	5	3	1		
77	〃	〃	〃	5	3	1		
78	〃	〃	〃	5	4	1		
79	〃	〃	〃	5	3	1		
80	〃	〃	〃	4.5	3	1		
81	〃	〃	〃	4.5	3	1		
82	〃	〃	〃	5.5	3	1		
83	〃	〃	〃	5	3	1		
78	〃	〃	〃	4.5	4	1		
85	〃	〃	〃	4	3	1		
86	〃	〃	〃	5	4	1		
87	〃	〃	〃	5	4.5	1		
88	〃	〃	〃	5	3	1		
89	〃	〃	〃	5	3.5	1		
90	〃	〃	〃	5	3.5	1		
91	〃	〃	〃	4	3	1		
92	〃	〃	淡青	5	3.5	1		
93	〃	〃	〃	5	3	1		
94	〃	〃	淡青	4	3	1		

番号	種類	材質	色調	直径	短径	孔径	重量	備考
95	小玉	ガラス	淡青	4.5	2	1		
96	〃	〃	黄	4	〃	〃		
97	〃	〃	〃	〃	〃	〃		
98	臼玉	滑石	銀鼠	6	3～2	2	0.2	
99	〃	〃	〃	〃	〃	〃		
100	〃	〃	〃	〃	3	〃		
101	〃	〃	〃	〃	3～2	〃		
102	〃	〃	〃	〃	3	〃		
103	〃	〃	〃	〃	〃	〃		
104	〃	〃	〃	〃	2	〃		
105	〃	〃	〃	〃	3	〃		
106	〃	〃	〃	〃	2.5	〃		
107	〃	〃	〃	〃	3	〃		
108	〃	〃	〃	〃	3～2	〃		
109	〃	〃	〃	〃	〃	〃		
110	〃	〃	〃	〃	〃	〃		
111	〃	〃	〃	〃	2.5	〃		
112	〃	〃	〃	〃	2	〃		
113	〃	〃	〃	〃	2～1	〃		
114	〃	〃	〃	〃	〃	〃		
115	〃	〃	〃	〃	0.5	〃		
116	〃	〃	〃	〃	1	〃		
117	〃	〃	〃	〃	1～0.5	〃		
118	〃	〃	〃	〃	0.5	〃		
119	〃	〃	〃	〃	2	〃		
120	〃	〃	〃	〃	3～2	〃		
121	〃	〃	〃	〃	3	〃		
122	〃	〃	〃	〃	〃	〃		
123	〃	〃	〃	〃	2.5	〃		
124	〃	〃	〃	〃	3	〃		
125	〃	〃	〃	〃	3～2	〃		
126	〃	〃	〃	〃	3	〃		
127	〃	〃	〃	〃	〃	〃		
128	〃	〃	〃	〃	2.5～2	〃		
129	〃	〃	〃	〃	2.5	〃		
130	〃	〃	〃	〃	2.5～2	〃		
131	〃	〃	〃	〃	2.5	〃		
132	〃	〃	〃	〃	3	〃		
133	〃	〃	〃	〃	〃	〃		
134	〃	〃	〃	〃	〃	〃		
135	〃	〃	〃	〃	2.5	〃		
136	〃	〃	〃	〃	3～2	〃		
137	〃	〃	〃	〃	2～1	〃		
138	〃	〃	〃	〃	2.5	〃		
139	〃	〃	〃	〃	〃	〃		
140	〃	〃	〃	〃	〃	〃		
141	〃	〃	〃	〃	〃	〃		

番号	種類	材質	色調	直径	短径	孔径	重量	備考
142	臼玉	滑石	銀鼠	6	2.5	2		
143	〃	〃	〃	〃	3～2	〃		
144	〃	〃	〃	〃	2	〃		
145	〃	〃	〃	〃	〃	〃		
146	〃	〃	〃	〃	〃	〃		
147	〃	〃	〃	〃	2～1	〃		
148	〃	〃	〃	〃	2.5～1	〃		
149	〃	〃	〃	〃	2.5	〃		
150	〃	〃	〃	〃	〃	〃		
151	〃	〃	〃	〃	1.5	〃		
152	〃	〃	〃	〃	〃	〃		
153	〃	〃	〃	〃	2.5～2	〃		
154	〃	〃	〃	〃	2	〃		
155	〃	〃	〃	〃	〃	〃		
156	〃	〃	〃	〃	〃	〃		
157	〃	〃	〃	〃	〃	〃		
158	〃	〃	〃	〃	1.5	〃		
159	〃	〃	〃	〃	2.5～1	〃		
160	〃	〃	〃	〃	1.5	〃		
161	〃	〃	〃	〃	2～1.5	〃		
162	〃	〃	〃	〃	1～0.5	〃		
163	〃	〃	〃	〃	1.5～1	〃		
164	〃	〃	〃	〃	1.5	〃		
165	〃	〃	〃	〃	1	〃		
166	〃	〃	〃	〃	0.5	〃		
167	〃	〃	〃	〃	1～0.5	〃		
168	〃	〃	〃	〃	0.5	〃		
169	〃	〃	〃	〃	1	2	0.1	
170	〃	〃	〃	〃	1～0.5	〃		
171	〃	〃	〃	〃	1	〃		
172	〃	〃	〃	〃	0.5	〃		
173	〃	〃	〃	〃	1～0.5	〃		
174	〃	〃	〃	〃	0.5	〃		
175	〃	〃	〃	〃	1～0.1	〃		
176	〃	〃	〃	〃	0.5	〃		
177	〃	〃	〃	〃	〃	〃		
178	〃	〃	〃	〃	〃	〃		
179	〃	〃	〃	〃	0.3	〃		
180	〃	〃	〃	6	0.3	2		
181	〃	〃	〃	〃	〃	〃		

21号横穴墓

1．立地、調査前の状況

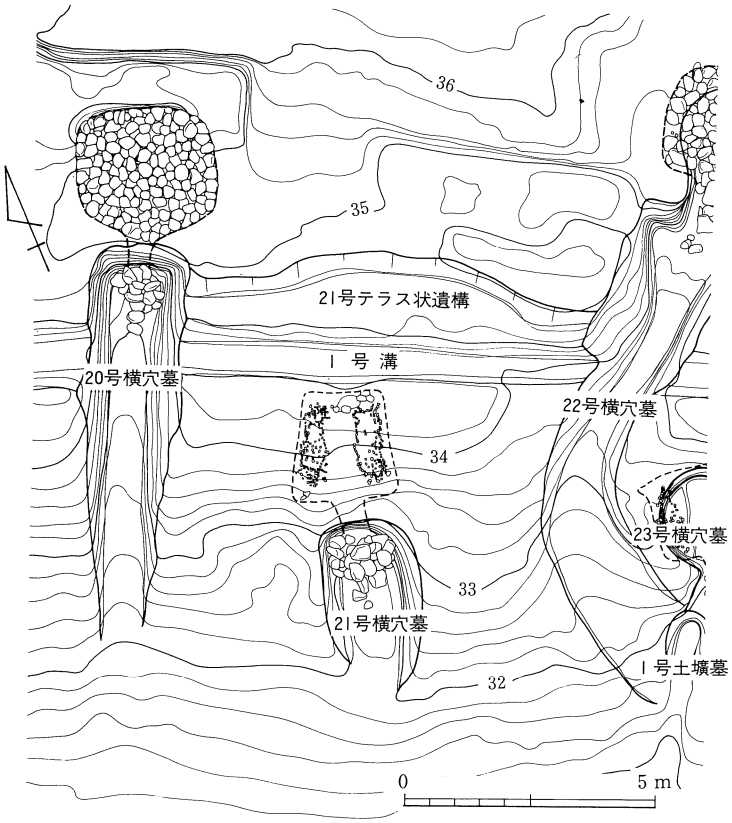
21号は横穴墓群のほぼ中央に位置する斜面にあり、南西方向に開口する。テラス状の遺構を有する横穴墓である。開口部付近の標高は約31ｍである。主軸をＮ－67.5°－Ｅにとる。全長は約6.7ｍを測り、その保存状態は良好であった。調査前には前庭部に横穴墓の存在を示すような落ち込みなどは認められなかった。調査は上部のテラス状遺構と前庭部の供献土器群の検出作業を進めつつ、順次前庭部プランの確認、同埋土の検討、閉塞施設の調査、撤去を行った。閉塞施設の除去後、埋葬人骨の遺存が確認されたため、九州大学医学部第二解剖学教室室員の参加協力の上で玄室内の調査を実施した。

2．規模、構造

1）前庭部、羨門部

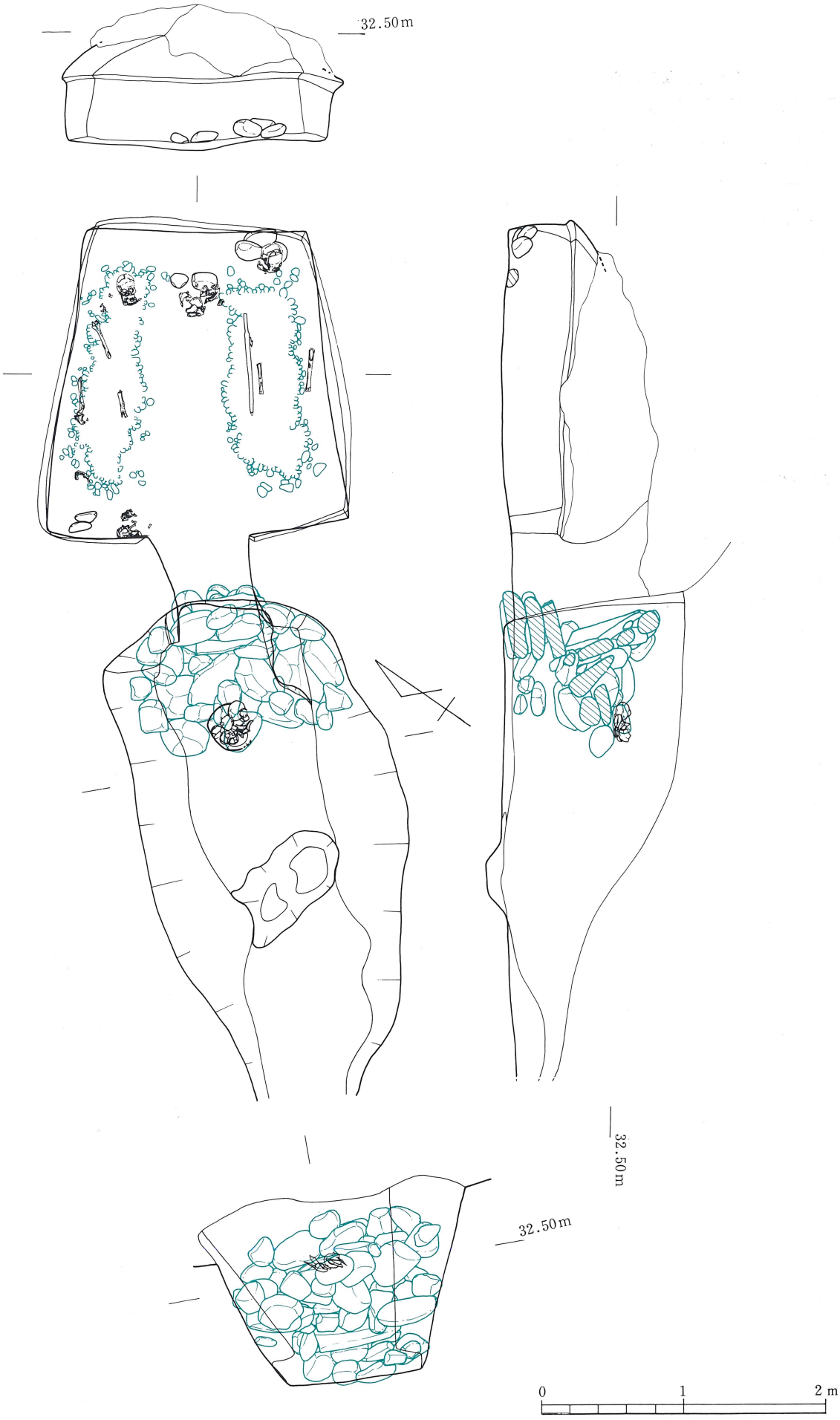
a）規模、構造　前庭部は長さ約3.7ｍ、幅約1.9ｍであり、中央部分が広がる不整形を呈している。この形態は数回の追葬時の掘削によるものと判断された。なお、前庭部検出時に前庭部埋土上面において、掘方を伴う土師器・須恵器の一括埋置土器群と直径30㎝を越える大石を検出した。大石は最終埋葬時の掘方の立ち上がり付近にあり、何らかの標石として使用された可能性がある。前庭部床面は中央部分に地山包含の礫除去とみられる穴があるが、ほぼ平坦である。床面の標高は約30.75ｍである。羨門から約２ｍ離れた地点から外方に２～３°の傾斜でゆるく上る。前庭部横断面は逆台形を呈する。側壁の傾斜は両者に差異があり、西側壁が60～75°、東側壁が70～85°を測る。羨門部壁の傾斜は約80°を測る。

羨門部は一部の天井部分と側壁部分が崩壊しているが、比較的旧状を保っている。床面と天井部は玄室にむかって下降し、羨門部壁のほぼ中央に設けられている。羨門部は高さ約0.9ｍ、幅約0.6ｍである。



第118図　21号横穴墓テラス平面図

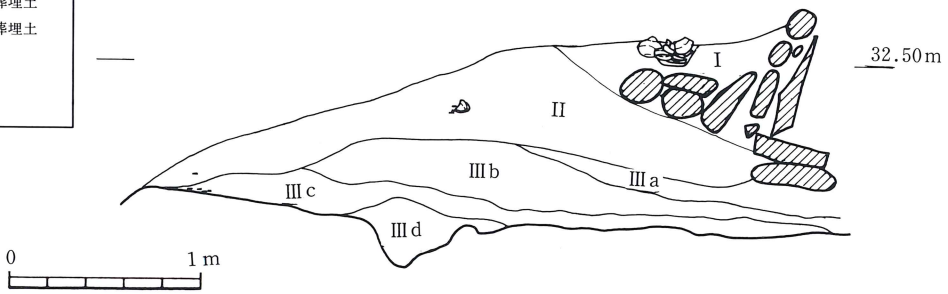
閉塞施設は板石と河原円礫を使用し、入念に構築されている。なお、閉塞は最終埋葬時のものとそれ以前のものに二分され、最終のものは前庭部内埋土Ⅱ層上面に、それ以前のものは同Ⅲａ層上面に設けられている。Ⅲａ層上面の閉塞は羨門前面から羨門部にかけて残存している。まず、この部分に羨道部に向って下降する掘方を設け、その床面を覆うように長さ約40㎝、幅約20㎝、厚さ10㎝程度の４個の石を置き２、３個の石で固定している。また、その前面に数個の石を配置している。掘方の床面には赤色顔料の散布が認められた。Ⅱ層上面の閉塞と配石は次の４工程に分けられる。第１工程はまず、羨道部直下を掘削し、先のⅢａ層上面の閉塞石を露出させ、その上に円礫と板石を置き平坦にしている。その円礫の直下には直径７㎝程度の赤色顔料の塊がある。第２工程としては先の板石を根石とし、幅約80㎝、高さ約60㎝、厚さ約10㎝の板石で羨門を塞ぐ。板石と羨門壁の



第119図　21号横穴墓平・断面図

21号横穴墓土層観察表

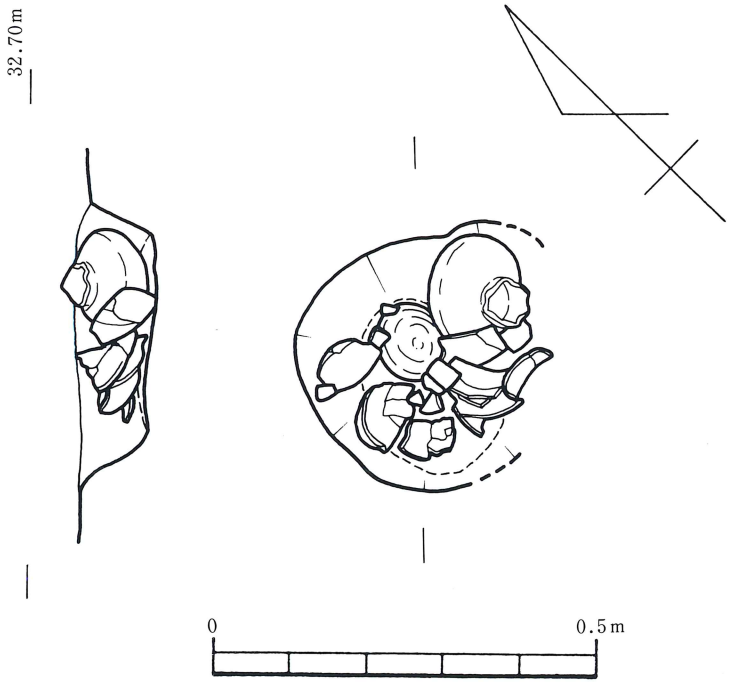
層	色調	主な特色	性状	評価・解釈
Ⅰ	茶褐色	粘質土	地山の礫を多く含む。	Ⅰは最終埋葬埋土
Ⅱ	茶褐色	粘質土	地山の礫を多く含む。	Ⅱは追葬埋土
Ⅲa	黄褐色	粘質土	ハード	Ⅲは初葬埋土
Ⅲb	黄褐色	粘質土	ハード	
Ⅲc	黄褐色	粘質土	ハード	
Ⅲd	黄褐色	粘質土	ハード	



第120図　21号横穴墓縦断土層及び遺物垂直分布図

間は直径10～20cm程度の円礫と青色粘土で目張りを行う。第３工程はその板石を固定するように長さ約50cm、幅、厚さ20cm前後の円礫４個を板石前面に据え、さらに直径20cm前後の円礫で板石全体を丁寧に覆う。第４工程として長さ40cm以下、厚さ20cm以下の円礫で閉塞全体を乱雑に覆っている。その後埋土によって最終掘方全体が埋められている。以上の閉塞において注意されることは、（１）第１工程の板石は上面に、第２工程の板石は内面に厚く赤色顔料が塗布されており、玄室内に顔料塗布面を向けることは最終埋葬時にも貫撤されている。（２）使用された円礫の表面には形態と方向性の異なる傷が数種類あるものがあり、閉塞施設の再構築を示すものとみられた。

b）前庭部内埋土　前庭部内埋土は６層に区分された。このうち下部の２層（Ⅲｃ・ｄ層）は新鮮な地山の二次堆積物であり、横穴墓構築時の形成と推定された。Ⅲｂ層は上面が固くしまり、赤色顔料が散布していた。羨門に向って約10°の傾斜で下降する。Ⅲａ層も同様に上面が固くしまり、一部に赤色顔料が散布し、羨門に向って約10～15°の傾斜で下降する。Ⅱ層はやや汚れた地山の二次堆積物であり、その上面は約30°の傾斜で羨門に向って下降する。本層の上面は固くしまり、青色粘土が分布していた。本層上面に最終の閉塞施設が設けられていた。Ⅰ層はやや汚れた地山の二次堆積物であり、軟質である。特に閉塞内まで土砂が充塡されず、空間があいている。以上の閉塞と埋土の状態から、最低でも３回から４回の埋葬が予測された。



第121図　21号横穴墓前庭部遺物出土状態

２）羨道、玄室

羨道部から玄室南側には閉

塞施設からの流入土と天井の崩落土が入り、埋没していた。羨道部は羨門部から30cmまではすぼまり、さらに玄室に向って拡がっている。幅は中央部で0.55m、羨門部床面で0.72m、玄門部床面で0.72m、長さ0.67～0.73mを測る。床面は約5°の傾斜で玄室に向って下降する。高さは天井部の崩落のために不明であるが約0.9mと推定される。玄室は妻入り、奥壁にすぼまる略台形を呈する。長さ2.03～2.16m、幅1.56～2.15mを測る。天井部は崩落のために明確ではないが、基本的にはドーム形を呈している。しかし、各隅部では僅かに稜線が形成され、四柱造り状となっている。天井部と側壁の間に庇状の段が設けられている。段は羨道部の上部を除く全周にみられ、幅は2～6cm程度である。壁面の高さは40～45cmであり、天井の高さは約0.8mと推定される。床面は標高31.70～31.75mである。床面には5cm前後の埋土を玄室全面に行い、さらに玄室両側に側壁に接して礫床を設けている。左右の礫床ともに直径5cm以下の小円礫を主体に敷き詰めている。右側の礫床は長さ約1.5m、幅0.5～0.6mを測り、左側の礫床は長さ約0.65m、幅0.4～0.6mを測る。右側礫床の奥壁側には長さ20cm前後、幅15cm前後の円礫3個を使用した石枕が設けてある。また、礫床の間の中央部分の奥壁側にも同様の円礫2個を用いた石枕がある。さらに両礫床の羨門側には長さ10～15cm程度の円礫が数個ずつあり、これも石枕の可能性がある。

3）テラス状遺構

本横穴墓羨門壁頂部の斜面上に階段状の地山整形が認められた。地山整形は羨門壁から約5.3mの位置に立ち上がりがあり、斜面上方に弧状を呈している。この部分での標高は約34.7mである。平坦面の拡がりは横穴墓の主軸の直行方向に7m以上は認められた。テラス部分には中世の溝状遺構（1号溝）やその他の攪乱が多く保存状態は悪い。墳丘の存在の有無は不明である。（吉留秀敏）

3．遺物の出土状態

1）玄室内

a）埋葬人骨　玄室の左右に礫床が設けられ、右側に1体、左側に2体、中央の通路上に1体の、計4体が葬られていた。1号人骨は、玄室右礫床上の被葬者で、奥壁に接して置かれた塊石3個より成る石枕に頭をのせる。熟年の男性で、頭と左右大腿骨のみ遺残する。右大腿骨のわきに切先を足の方へと向けた直刀1振と鉄鏃1本が副葬される。

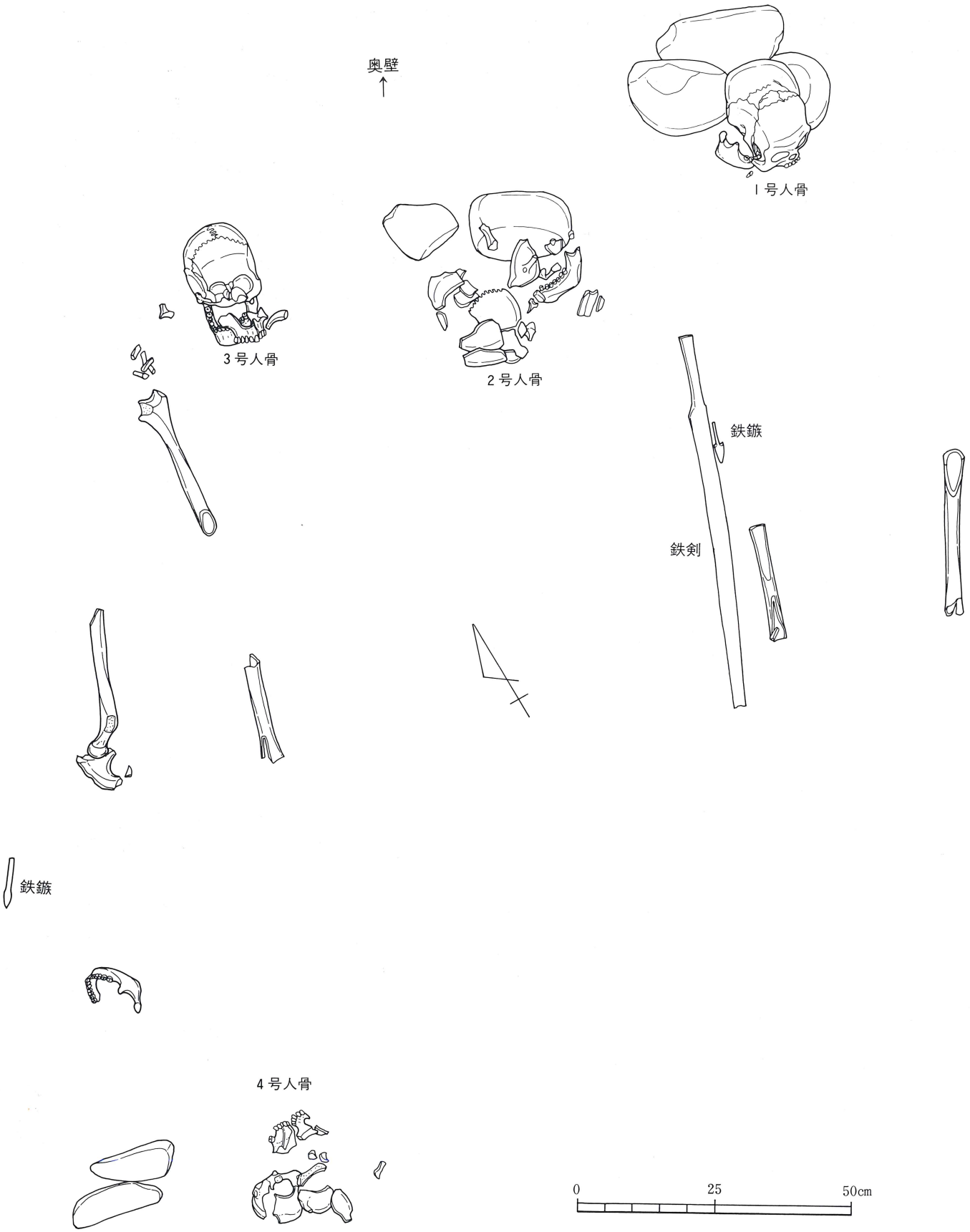
2号人骨は、奥壁側に頭を向けた男性と思われる成年人骨で、左右の礫床にはさまれた通路上に、塊石で石枕を設けて葬られている。頭のみが残る。

3号人骨は、前二者と同じ頭位で、左側の礫床上に葬られる。石枕はない。成年女性で、頭は原位置を保つと考えられるが、右の寛骨・大腿骨が本来とは逆方向の状態で、左側壁近くに認められた。肋骨と思われる骨片も頭の左横にあることから、3号人骨は、頭を除けば動かされていると判断される。

4号人骨は、他の3体とは逆に羨門部に頭を向けて葬られる。熟年の女性で、頭と左右大腿骨が残る。頭は、本来は石枕上にあったものと思われるが、落石のためか、下顎骨と頭蓋骨は石枕を中心として飛び散ったような状態である。ただ、大腿骨、とりわけ左の大腿骨は大きく原位置から動いている。

以上の所見から、3号・4号人骨の2体は埋葬後に動かされているため、最終埋葬でないことは明らかである。また、4号人骨を片付けて3号人骨を埋葬したとするには、3号人骨上に4号人骨の下肢骨をのせたことになって不都合であるため、3号→4号という順序が得られる。また、4号人骨をも片付ける必要が生じたとすると、それは隣接する2号人骨の埋葬時ということになろう。したがって、これらから1号人骨→3号人骨→4号人骨→2号人骨という埋葬順位が得られる。（田中良之）

b）副葬品　1号人骨の右側に鉄刀1と鉄鏃1があり、左側に鉄鏃5本以上が先端を足方に向け配置されていた。また3号人骨の頭位付近にガラス製丸玉4、小玉17、耳環1が集中して分布していた。



第122図　21号横穴墓玄室内人骨出土状態

2）前庭部内

前庭部埋土上に３群の須恵器、土師器を埋置状態で検出した。Ａ群は閉塞部直上にあり、前庭部中央羨門寄りにあたる。最終埋土であるⅠ層の上部で検出したものであり、長さ45㎝、幅33㎝の掘方内に一括埋置状態で検出した。その器種は須恵器坏蓋１、土師器壺１、椀３からなる。埋置はまず掘方下部の北側下部に坏蓋を臥せ、それに接して壺を置き、南側の下部に椀３個体分の破片を投入している。坏蓋と椀の上部には長さ21㎝、幅14㎝の礫を置いている。Ｂ群は羨門部から約２ｍ離れた位置にあり、前庭部西側壁に接する位置にある。掘方はⅡｂ層を切り設けられた長さ29㎝、幅18㎝の規模で、浅くほとんど底面に近い状態であった。須恵器坏蓋１が倒置状態で検出された。Ｃ群は前庭部開口付近で検出したものであり、掘方等は未検出である。土師器椀１の破片であり、埋置ではなくむしろ追葬時に先行する供献土器群を破砕し、埋土中に混入したものと考えられる。こうした点から前庭部出土の土器群はＣ群→Ｂ群→Ａ群の順に埋置されたものと推定される。

3）テラス状遺構

テラス状遺構の覆土とその周辺から少量の遺物が出土している。中世の遺構もあり、散布状態での出土でもあるため、本来この遺構に伴うものかは判断しかねる。遺物はすべて須恵器片であり、小破片が多い。器種としては坏身１、坏蓋２、坏あるいは瓿１、甕５があり、他に器種不明のものが３ある。（吉留秀敏）

４．21号横穴墓出土人骨の所見

成人骨４体分（男性２体、女性２体）が識別された。それぞれの所見は以下のとおりである。

21―１号人骨（男性・熟年）

〈保存部位〉

頭蓋骨：左頭頂部から側頭部を欠くが、顔面部や歯牙等は比較的良く残存している。赤色顔料の付着が認められる。残存歯牙の歯式を以下に示す。

○　M^2 M^1 P^2 P^1 C　I^2 ○	○ I^2 C　P^1 P^2 ○ ○ ○
×　× △ウ P_2 P_1 C ○ ○	I_1 I_2 C　P_1 P_2 M_1 M_2 ／

×　歯槽閉鎖　　○　歯槽開放　　△　歯根のみ　　ウ　う蝕

／破損・不明

体部骨：左右大腿骨体中央部片、椎骨片少量。

〈性別・年齢の推定〉

性別：乳様突起や眉弓の発達等、頭蓋骨はすべて男性の特徴を示している。

年齢：歯牙の咬耗度（Brocaの２度）、頭蓋主縫合の閉鎖（内板はすべて閉鎖）から、熟年と推定した。

〈形質〉

頭蓋骨の主要計測値は表に示す。頭型の各示数は長頭型（Ｍ８／１＝73.8、Ｍ８は推定による）、高頭型（Ｍ17／１＝75.4）、中頭型（Ｍ17／８＝97.9）であった。また、顔面の示数は広上顔型（Ｍ48／45＝47.9）、低眼窩型（Ｍ52／51＝73.8）、広鼻型（Ｍ55／54＝52.1）で、鼻根部も陥凹しており、全体に凹凸のはっきりした顔貌であったことが推察される。また、頭蓋非計測的形質の観察では、かなり発達した外耳道骨腫が右側に認められた。咬合型式は鋏咬合である。

21―2号人骨（男性？・成年）

〈保存部位〉

頭蓋骨：比較的多くの部分が残存しているが、骨質がもろく変形が著しいために復原は困難である。残存する歯牙は以下のとおりである。赤色顔料の付着が認められる。体部骨はすべて消失している。

$(M^3)\ M^2 M^1 P^2 P^1 C\ I^2 O$	$\dot{I}^1$ ／ $\dot{C}\ P^1 P^2 M^1 M^2 \dot{M}^3$
$M_3\ M_2 M_1 P_2 P_1 C\ I_2 I_1$	$I_1 I_2 C\ P_1 P_2 M_1 M_2 M_3$

・　遊離歯　　／　破損・不明　　（ ）　未萌出　　○　歯槽開放

〈性別・年齢の推定〉

性別：眉弓の発達が比較的良好で、下顎骨体の形状もかなり頑丈な印象を受ける。しかし、乳様突起の発達は弱く、1号人骨に比べると明かに華奢であることから、女性（？）として報告したものがあるが（日本民族・文化の生成2）、後述の3・4号人骨に比べると頑丈であり、男性（？）としておきたい。

年齢：歯牙咬耗度はBrocaの1～2度、第3大臼歯は右上顎のものだけが未萌出であり、その歯根部は大部分が完成しているが、一部未完成の状態である。また、観察が可能であった冠状縫合とラムダ縫合は内・外板ともに開離した状態であることから、ほぼ成年に達した位の年齢（20才前後）と推定した。

〈形質〉

頭蓋骨の計測値は得られていない。歯牙のサイズは全体に大きく、性別を男性（？）とした推定結果とも矛盾しない。頭蓋非計測的形質で、上矢状洞溝左傾が認められ、また、外耳道骨腫が右側のみ認められた。咬合型式は不明である。

21―3号人骨（女性・成年）

〈保存部位〉

頭蓋骨：鼻骨部と下顎枝が破損しているが、保存状態は良好である。赤色顔料の付着が認められる。残存する歯牙は以下のとおりである。

$M^3\ M^2 M^1 P^2$ ○ $C\ I^2 I^1$	$I^1 I^2 C\ P^1 P^2 M^1 M^2 M^3$
$M_3\ M_2 M_1 P_2 P_1 C\ I_2 I_1$	$I_1 I_2 C\ P_1 P_2 M_1 M_2 \overset{ウ}{M_3}$

○　歯槽開放　　ウ　う蝕

体部骨：頸椎体4個。全体の形状から3号に属すると推定したものは、右寛骨片、下端部を欠く右大腿骨である。

〈性別・年齢の推定〉

性別：頭蓋骨の特徴から明らかに女性である。

年齢：歯牙咬耗度がBrocaの1～2度、第3大臼歯がほぼ萌出済みであること、さらに大腿骨頭には骨端線が残っていることを考慮し、成年初期（20代前半）と推定した。

〈形質〉

頭型の示数は、長頭型（M 8／1＝73.6）に属している。上顔高は低いが（64㎜）、全体的にサイズが小さくほっそりしており、上顔示数は中上顔（M48／45＝52.5）に属している。大腿骨は細く華堵である。

頭蓋非計測的形質では、顆管欠如（左）、舌下神経管二分（右）、後頭乳突縫合骨（右）が認められ、また著明な外耳道骨腫が両側に認められた。咬合型式は鉗子咬合である。

〈特記事項〉

頭蓋骨眼窩上壁にCribra Orbitaliaの所見が見られる。この所見は鉄欠乏性貧血に関係があると考えられており、本人骨が非常に華奢で小柄であるという結果とも一致し、全体としてひ弱な体質であったことがうかがえる。

21―4号人骨（女性・熟年）

〈保存部位〉

頭蓋骨：脳頭蓋の大半は消失し、左右側頭骨片と後頭骨片のみである。顔面部は上顎骨と下顎骨（左下顎枝は消失）が残存している。これらには赤色顔料の付着が認められる。残存する歯牙は以下のとおりである。

／ M^2 × × P^1 C I^2 I^1	I^1 I^2 C P^1 P^2 × M^2 △ウ
△ウ M_2 M_1 P_2 P_1 C I_2 I_1	I_1 I_2 C P_1 P_2 ／ ／ ／

× 歯槽閉鎖　△ 歯根のみ　ウ う蝕　／ 破損・不明

体部骨：4号人骨に属する体部骨は、形状および位置関係から奥壁寄りの大腿骨2本と考えられる。この大腿骨については全体が片付けられていることから、あるいは2号人骨のものという可能性もないわけではないが、サイズ等を考慮すると4号人骨に属すると考えた方が妥当であろう。

〈性別・年齢の推定〉

性別：乳様突起の発達が弱いことから女性と推定した。

年齢：歯牙の咬耗度はBrocaの1～2度であるが、脱落が見られることから熟年と推定した。

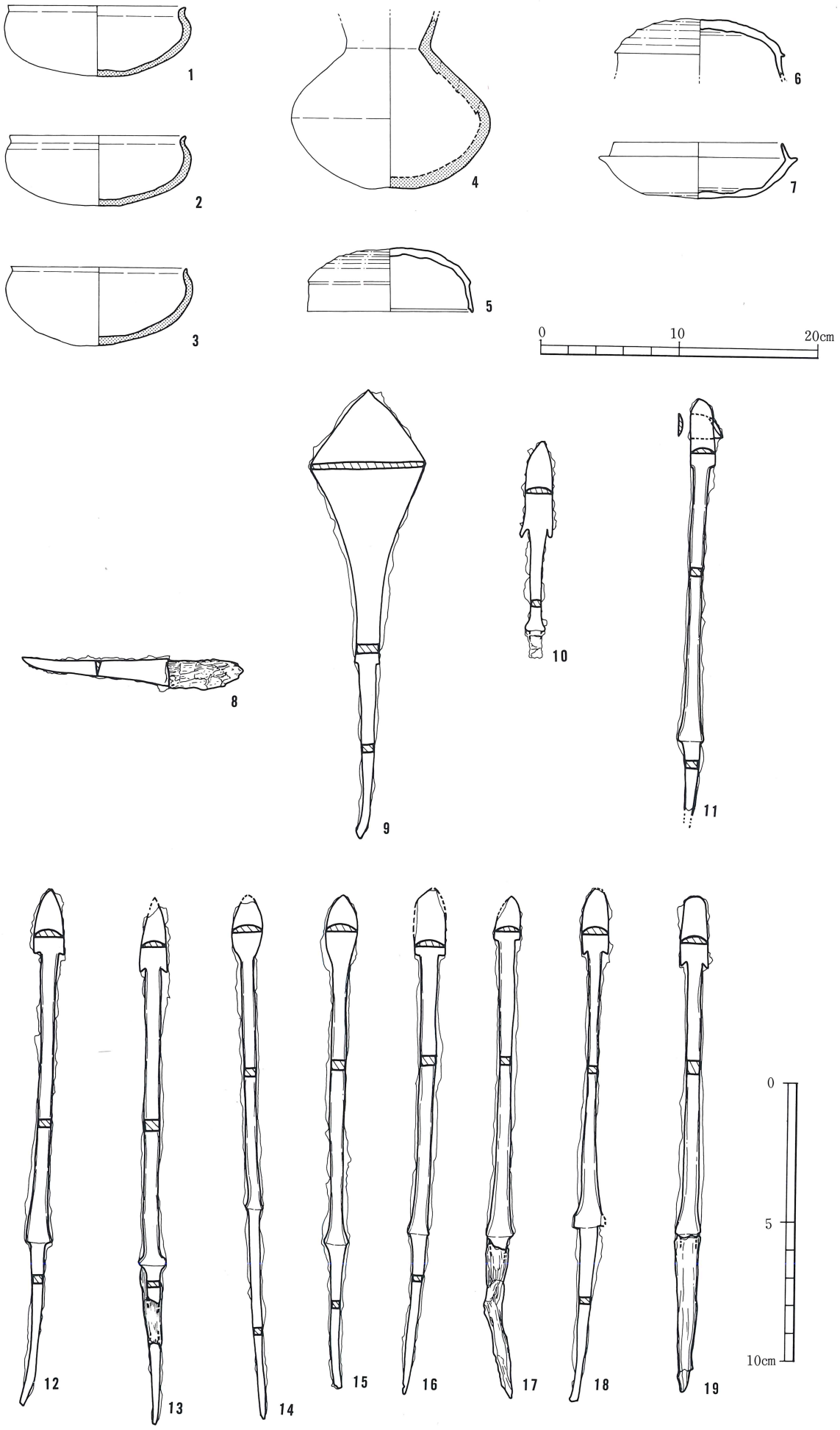
〈形質〉

保存部位が少なく全体の特徴はわからない。非計測的形質では、1～3号人骨に見られた外耳道骨腫が本人骨にも認められ、21号横穴墓出土人骨のすべてに共有されていることがわかった。咬合型式は鉗子咬合、歯槽性突顎の傾向が認められた。（土肥直美）

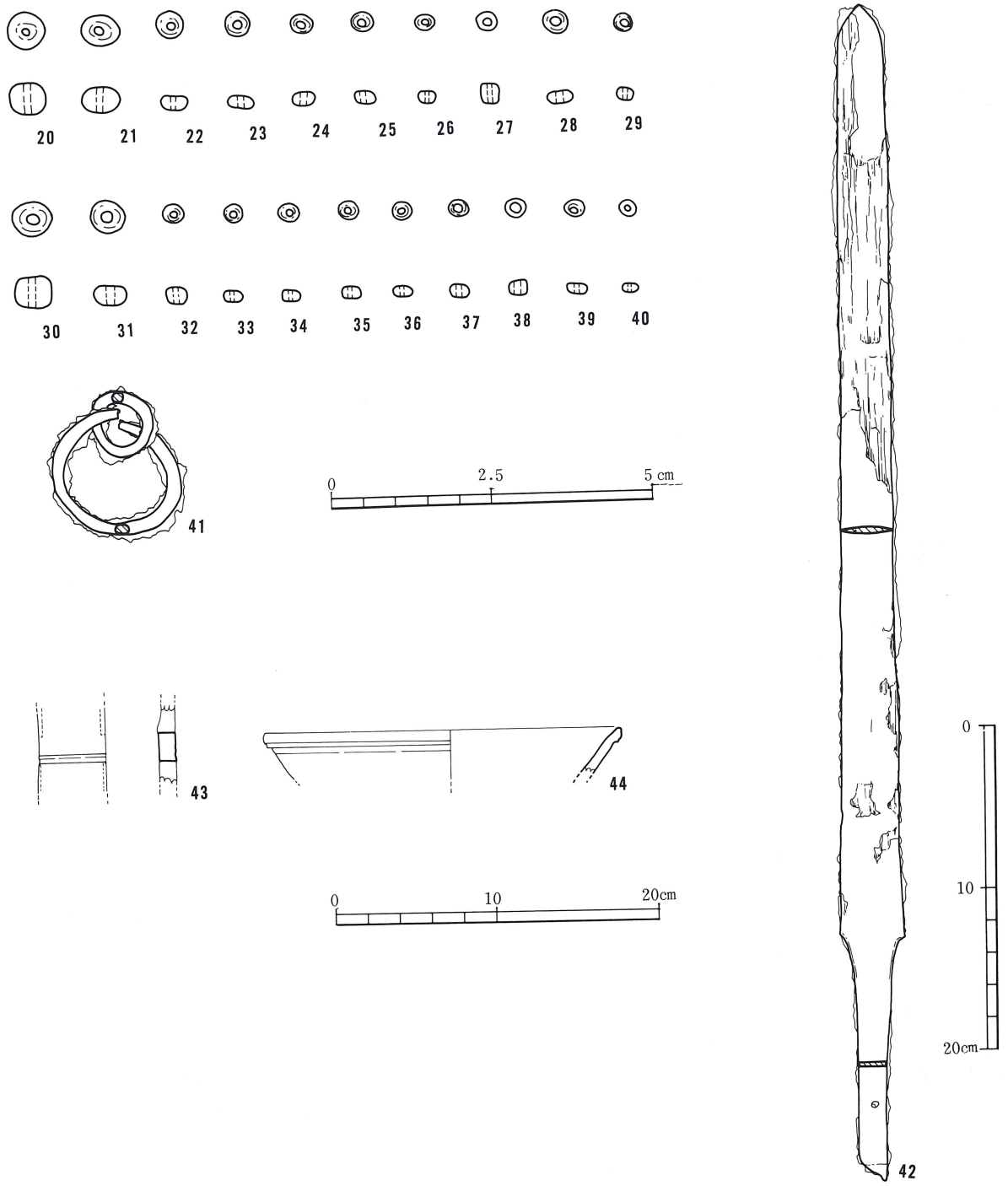
第42表　21号横穴墓出土土器観察表

（単位：cm）

番号	器種	法量 ・口径 ・器高 ・胴部最大径	形態の特色	技法の特色 内面	外面	色調	胎土	焼成	備考	ヘラ記号の有無
1	埦	・12.8 ・5 ・13.4	口縁部は短く外反しながらのび、端部は丸い。底部は浅くやや平ら。	ヨコナデ	ヨコナデ ヘラ切りの後カキ目	褐色	1～2㎜の砂粒を含む精緻	不良	土師器	
2	埦	・12.7 ・5 ・13.4	口縁部は短く外反しながらのび、端部は丸い。底部は浅くやや平ら。	ヨコナデ	ヨコナデ ヘラケズリ	褐色	精緻	不良	土師器	
3	埦	・12.6 ・5.6 ・13.5	口縁部は短くわずかに外反しながらのび、端部は丸い。底部は深く、丸みをおびる。	ヨコナデ	ヨコナデ ヘラケズリの後ナデ	茶褐色	1㎜ほどの砂粒を含むが精緻	不良	土師器	
4	直口壺	・― ・12＋α ・14.4	口頸部は外反しながらのびる。胴部は最大径は中央部にあり、底部は平ら。	ヘラミガキ?	ヘラミガキ?	褐色	2㎜以下の砂粒を多量に含む	良好	土師器	
5	坏蓋	・12 ・4.5 ・―	口縁部はほぼ直下にのび、端部は内傾する段を有す。外面には丸い稜がみとめられ、天井部は高く、丸みをおびる。	ヨコナデ	ヨコナデ 回転ヘラケズリ	灰色	2～3㎜の石英粒を含むが精緻	良好 堅緻		
6	坏蓋	・― ・4＋α ・―	口縁部はわずかに外反しながらほぼ直下にのびる。外面には、はっきりした稜がみとめられる。天井部は高く丸みをおびる。	ヨコナデ	ヨコナデ 回転ヘラケズリ	灰色	2㎜以上の石英粒を含む	良好 堅緻		
7	坏身	・12.1 ・4.1 ・14.2	たちあがりは内傾してのび、端部は丸い。受部は水平にのび端部は丸い。底部は浅く、やや平ら。	ヨコナデ ナデ	ヨコナデ 回転ヘラケズリ	褐灰色 青灰色	石英、黒色砂粒を含むが精緻	良好 堅緻	テラス出土	



第123図　21号横穴墓出土遺物実測図(1)



第124図　21号横穴墓出土遺物実測図(2)

第43表　21号横穴墓出土鉄器観察表

（単位：cm）

番号	器種	全長	頭部長（刀部）	刃幅	頸幅	刃部厚	頸厚	備考
8	刀子	7.8	5.2	1.0	不明	0.1	不明	木質柄残存
9	鉄鏃	7.7以上	3.3	1.0	0.6	0.2	0.25	
10	同上	16.0	9.7	4.1	0.6	0.25	0.3	
11	同上	14.7以上	2.5	0.8	0.5	0.2	0.3	
12	同上	18.4	2.4	1.0	0.4	0.25	0.3	
13	同上	18.8	2.6	0.9	0.5	0.2	0.4	木質残存
14	同上	18.7	2.2	1.1	0.4	0.25	0.3	
15	同上	17.1	2.5	1.1	0.5	0.3	0.35	
16	同上	18.1	2.4	1.0	0.5	0.25	0.3	
17	同上	17.8	1.6	0.9	0.5	0.2	0.3	不質残存
18	同上	18.3	2.4	0.9	0.4	0.25	0.25	
19	同上	17.7	2.5	0.9	0.5	0.25	0.5	木質残存
41	不明							
42	鉄剣	69.2以上	58.0	3.2	1.8	0.4	0.4	目針穴あり　木質鞘残存

第44表　21号横穴墓出土玉類計測表

（単位：mm，g）

No	種類	材質	色調	長径	短径	孔径	重量	備考
20	丸玉	ガラス	藍	6	5	1.5	0.3	
21	〃	〃	〃	〃	4	〃	0.2	
22	小玉	〃	〃	4	2.5	1		
23	〃	〃	〃	〃	2	〃		
24	〃	〃	〃	3.5	〃	〃		
25	〃	〃	〃	〃	〃	〃		
26	〃	〃	〃	3	〃	0.5		
27	〃	〃	〃	〃	3	〃		
28	〃	〃	〃	4	2	1.5		
29	〃	〃	〃	2.5	〃	1		
30	丸玉	〃	〃	6	5	1.5	0.3	
31	〃	〃	〃	5	3	〃	0.1	
32	小玉	〃	〃	3	2.5	1		
33	〃	〃	〃	〃	2	0.5		
34	〃	〃	〃	〃	〃	〃		
35	〃	〃	〃	〃	〃	0.5		
36	〃	〃	〃	〃	〃	〃		
37	〃	〃	〃	〃	〃	〃		
38	〃	〃	〃	〃	2.5	1		
39	〃	〃	〃	〃	1.8	〃		
40	〃	〃	青	2.5	1.5	0.5		

22号横穴墓

1．立地、調査前の状況

22号横穴墓は北支群ほぼ中央の斜面、20号横穴墓の南東7.5m所に位置し、南西方向に開口する。墓道は23号横穴墓前庭部左壁付近より作られ、23号玄室をさけるように北方向に孤状に湾曲させている。横穴墓は斜面の上位標高33m付近に設けられている。全長は11.12mを測り、玄室主軸をN－79.5°－Eにとる。墓道入口付近で南に約150°程主軸方向を変化させ孤状を呈する。横穴墓は近年の造成による羨門壁の削平と羨道、玄室の削平および陥没以外は保存状態は良好であった。墓道は完全に埋没しており地表での確認はできなかった。調査は墓道プランの確認、同埋土の検討、玄室内の調査等を行った。

2．規模、構造

1）墓道、羨門部

a）規模、構造　墓道は全長6.63m、幅は入口付近で上部幅1.65m、底面幅1.0m、羨門部で上部幅2.5m、底面幅1.7mを測る。また近年の造成によって、羨門壁および羨門、玄室天井等は大きく削平されている。墓道床面は凹凸を持ちながらも約15°の傾斜で羨門方向に向って上がる。墓道入口左壁は大きく南へ屈曲する特徴を持ち、入口から約5.5m程羨門方向へ寄った位置より墓道幅が広がるいわゆる前庭部を形成している。この部分の中央には玄室からの排水溝が羨門から約0.4m程続いている。排水溝には安山岩製板石を3枚蓋石として使用している。

羨門は天井、側壁とも崩壊が著しく復元は困難であり、幅は床面で0.73mを測る。

閉塞施設は最終埋葬時の状況を示しており、羨門左隅に床にほぼ接して人頭大の河原円礫が3個残るのみで他は認められない。このことから最終埋葬時には木蓋等での閉塞が考えられる。

b）墓道内埋土　墓道内の堆積土壌はその性状から比較的明瞭な層区分が可能であり、全体で6層群20層に分層できた。以下堆積順に説明する。なお、土層図作成の際、入口部分が南側に屈曲しているのに気付かずに玄室主軸に添って土層軸を設定したため、入口右側の一括埋置土器群の土層は明確にできなかった。以下堆積順に説明する。

第1層群（XⅢ・XⅣ層）は溝蓋石上面から入口方向へ約6m程ほぼ水平に堆積し、上層とは最も厚い所で風化土層をはさみ明瞭に区分でき、羨門付近は上層によってカットされている。本層群はさらに3層に分けられる。(1)下層（Ⅳ層）は溝蓋石下面に堆積した混りのない基盤層の二次堆積で築造直後に堆積したものである。(2)中層（XⅢb層）は溝蓋石上面に堆積したやや風化した基盤層の二次堆積土で閉塞埋土と考えられる。(3)上層（XⅢa層）はやや風化した基盤層の二次堆積土で本層上面に須恵器坏身（第129図42）、瑙（第128図11）を包含する。瑙は上層遺物と接合するところから追葬時に攪乱が認められる。本層群は初葬埋土と考えられる。

第2層群（XⅠ・XⅡ層）は羨門付近の中、下面から入口方向へ約8m程ほぼ水平に堆積する。羨門より2m付近から羨門にかけて第3層群によってカットされている。本層群はさらに3層に区分される。(1)下層（XⅡb層）はあまり風化の進まない基盤層の二次堆積土で閉塞埋土と考えられる。(2)中層（XⅡa層）は性状等が(1)と同様であるが若干風化が進んでいる。(3)上層（XⅠ層）は(2)に比べより風化が進んだ層であり、墓道入口付近にある多量の須恵器群（遺物A群）は本層中に包含される。本層群は第1次追葬埋土と考えられる。

第3層群（Ⅷ～Ⅹ層）は羨門付近の上、中面から入口方向へ約7m程斜めに堆積する。羨門より2.5m付近から羨門にかけて第4層群によってカットされている。本層群は3層に区分される。(1)Ⅹ層はやや風化土混りの基盤層の二次堆積土で閉塞埋土と考えられる。(2)Ⅸ層は羨門付近から1.5m程(1)の上面に堆積しており風化した粘質土であるが硬く締った層である。(3)Ⅷ層は羨門付近から2.5m程の所でⅩ層上面に堆積しており基盤層の二次堆積土でⅢ層とは漸移的に変化する。本層上面に須恵器甕片が少量破砕散布しており第4層群遺物と接合する。本層群は第2次追葬（最終埋葬）の埋土と考えられる。

第125図　22号横穴墓平・断面図

第４層群（Ⅲ～Ⅶ層）は羨門付近の上面から入口方向へ約８ｍ程斜めに堆積する。本層群はさらに５層に区分される。(1)Ⅳ層～Ⅶ層は羨門付近から２ｍ程レンズ状に堆積し、クロボク質の黒色土と赤褐色の基盤層の二次堆積土が互層をなす。(2)クロボク質の黒色土壌で最も厚い所で30cmを測る。本層中に甕の破砕散布状態が集中して検出した。これらは16号、18号、20～22号、24号横穴墓出土遺物と接合する。本層群は埋葬に関わらない墓前祭祀埋土と考えられる。

第５層群（Ⅱ層）は基盤層の２次堆積土で本層中にも若干の甕の破砕散布が認められ、第４層群遺物と接合する。

第６層群（Ⅰ層）はコンクリート片等を包含するところから近年の造成土と考えられる。以上の土層観察から本横穴墓では最低３回の埋葬と数回の埋葬に関わらない祭祀行為が認められる。

２）羨道、玄室

羨道は天井、側壁とも削平されており旧状を大きく損なっており高さは不明である。床面は長さ1.13ｍ、玄門幅0.85を測る。玄室は長さ2.27ｍ、裾部幅2.25ｍ、中央幅2.6ｍ、奥壁幅2.1ｍのやや胴張りの略隅丸方形状を呈し、床面には幅20cm前後、深さ５cm前後の排水溝が周壁および中央に設けられている。中央の溝は羨道中央を経て前庭部まで延びている。床面はほぼ平坦であり、玄室、羨道全体に人頭大の河原石および安山岩製板石を敷きつめている。敷石の構築順序は中央の排水溝の上から左右に広げるように行っている。なお右側壁と奥壁とのコーナー付近に人頭大の扁平な河原石を１個置き石枕としている。天井および周壁は崩落が激しく高さは不明である。天井形態は奥壁残存部分の形状からドーム状を呈すると推定される。（村上久和）

３．遺物の出土状態

１）　玄室内

玄室内には造成による天井崩落土が堆積していたが清掃後多数の遺物が検出された。

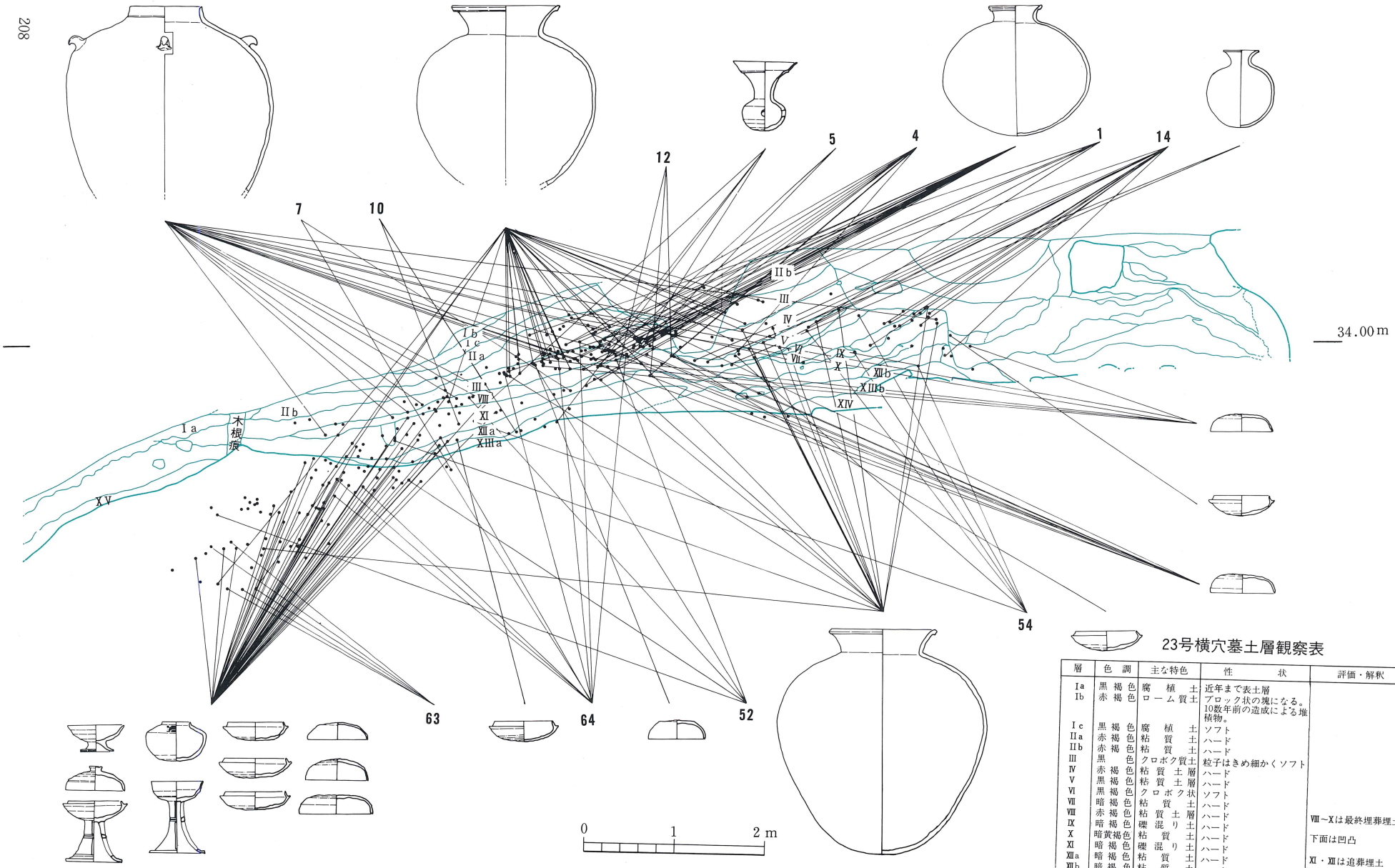
a）埋葬人骨　人骨は２体が出土している。１体は羨門部よりに葬られた成年男性で、羨門部からみて左側に頭位をとる。頭蓋骨と上・下肢骨の一部のみが残っているが、それらの位置関係からみて原位置を保っていると考えられる。したがって、羨門との位置関係からみて最後の被葬者と推定される。もう１体は奥壁よりにあった大腿骨と思われる長骨片であるが、貝輪等の副葬品との関係を含めて詳細は不明である。（田中良之）

b）副葬品　玄室内中央左寄に須恵器壺蓋（第133図75）が、ほぼ中央に、イモ貝製貝輪２点（第133図78・79）、銅剣１点（第134図77）がほぼ並んで、それより羨門寄20cmの所で耳環１個（第134図80）が検出された。奥壁付近では、左側壁とのコーナー付近で須恵器平瓶（第133図76）が、それより70cmと100cmのところで刀子２点（第134図101・102）が奥壁ぎわ中央および右側で鉄鏃群（第134図82～100）が検出された。右側壁付近では、中央の側壁ぎわに鉄鏃（第134図103・104）と耳環（第133図81）が検出された。右裾壁付近では、ほぼ中央裾壁ぎわに須恵器壺蓋２個（第133図73・74）が検出された。この内の一個（74）は敷石下に置かれていた。

２）　墓道内

墓道内の遺物出土層位については墓道内埋土の項で示した。ここでは遺物の出土状況の特徴について簡単に述べる。まず、第１層群中では羨門より５ｍ付近のほぼ中央で須恵器坏身、瑳の破砕散布を検出したが、これは追葬時に破砕されたものと考えられる。第２層群では墓道入口付近で遺物Ａ群（第129図16～第131図69）が、斜面のため若干流れ落ちているが、ほぼ配列埋置の状態で検出された。第３・４・５層群では羨門付近から入口付近までの広い範囲で須恵器甕、壺、提瓶（第128図12～15・第131図70・第132図71・72）の破砕散布が認められた。

（村上久和）



第126図　22号横穴墓縦断土層及び遺物垂直分布図

23号横穴墓土層観察表

層	色調	主な特色	性状	評価・解釈
Ⅰa	黒褐色	腐植土	近年まで表土層	
Ⅰb	赤褐色	ローム質土	ブロック状の塊になる。10数年前の造成による堆積物。	
Ⅰc	黒褐色	腐植土	ソフト	
Ⅱa	赤褐色	粘質土	ハード	
Ⅱb	赤褐色	粘質土	ハード	
Ⅲ	黒色	クロボク質土	粒子はきめ細かくソフト	
Ⅳ	赤褐色	粘質土層	ハード	
Ⅴ	黒褐色	粘質土層	ハード	
Ⅵ	黒褐色	クロボク状	ソフト	
Ⅶ	暗褐色	粘質土	ハード	
Ⅷ	赤褐色	粘質土層	ハード	
Ⅸ	暗褐色	礫混り土	ハード	Ⅷ～Ⅹは最終埋葬埋土
Ⅹ	暗黄褐色	粘質土	ハード	下面は凹凸
Ⅺ	暗褐色	礫混り土	ハード	
Ⅻa	暗褐色	粘質土	ハード	Ⅺ・Ⅻは追葬埋土
Ⅻb	暗褐色	粘質土	ハード	
XIIIa	赤褐色	粘質土層	ハード	XIII、XIVは初葬埋土
XIIIb	黄褐色	粘質土層	ハード	
XIV	黄色	砂礫層	きれい、よごれていない。	
XV	黒色	粘質土	ソフト	旧表土

4．22号横穴墓出土人骨の所見

男性１体分の人骨が検出された。

〈保存部位〉

頭蓋骨：後頭部を欠く頭蓋冠のほぼ右半、下顎骨片、歯牙６本。残存歯牙の歯式を以下に示す。

$\dot{M}^3$ ／／／／／／／	／／／／／／／／
M_3 M_2 $\dot{M}_1$ ／／／／／	／／ $\dot{C}$ ／／／ $\dot{M}_2$ ／

・　遊離歯　　／　破損・不明

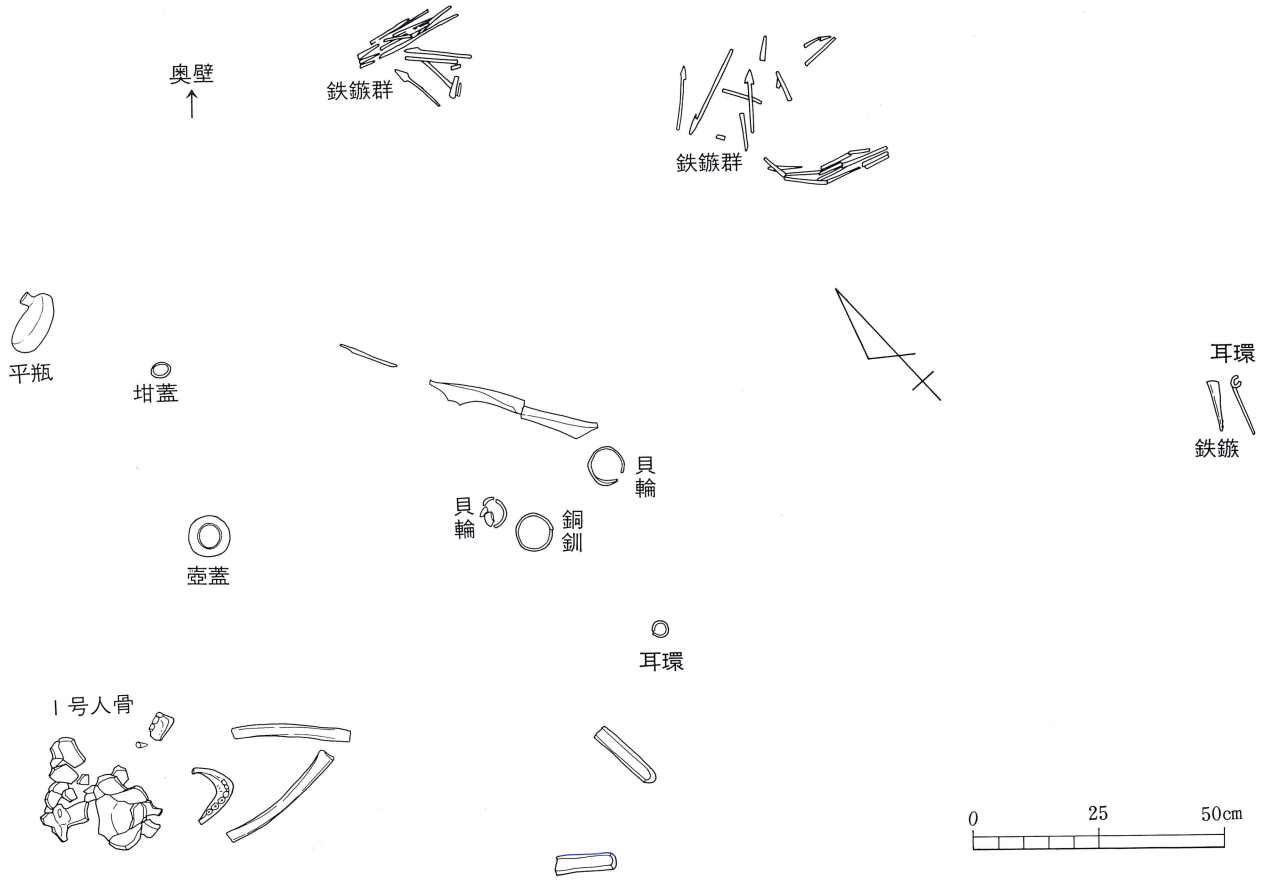
〈性別・年齢の推定〉

性別：乳様突起の発達が著明であり、骨質も頑丈であることから男性と推定した。

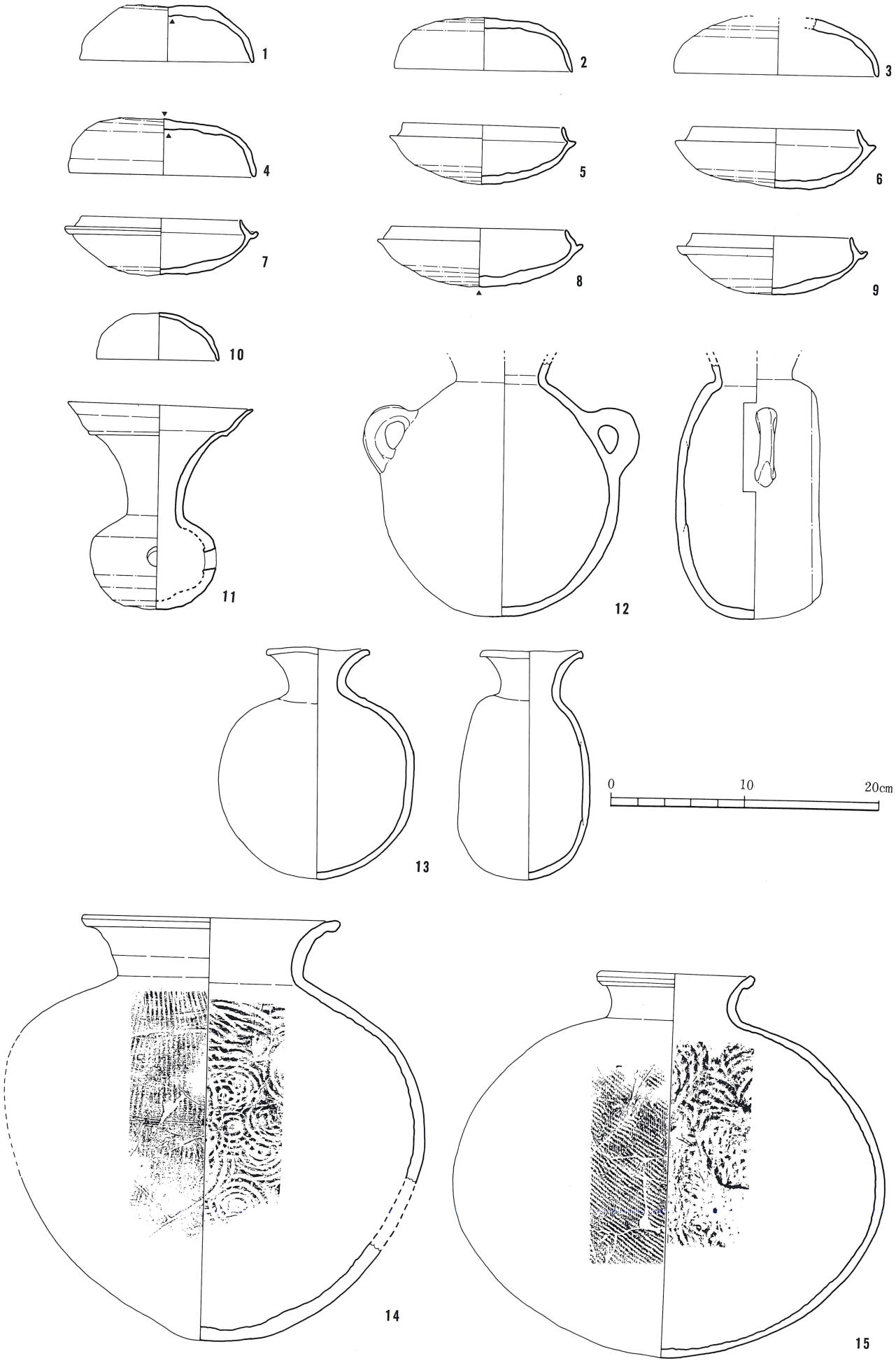
年齢：歯牙の咬耗度（Broca １～２度）、部分的に残存する冠状縫合の閉鎖程度（内・外板とも開離）から、成年と推定した。

〈形質〉

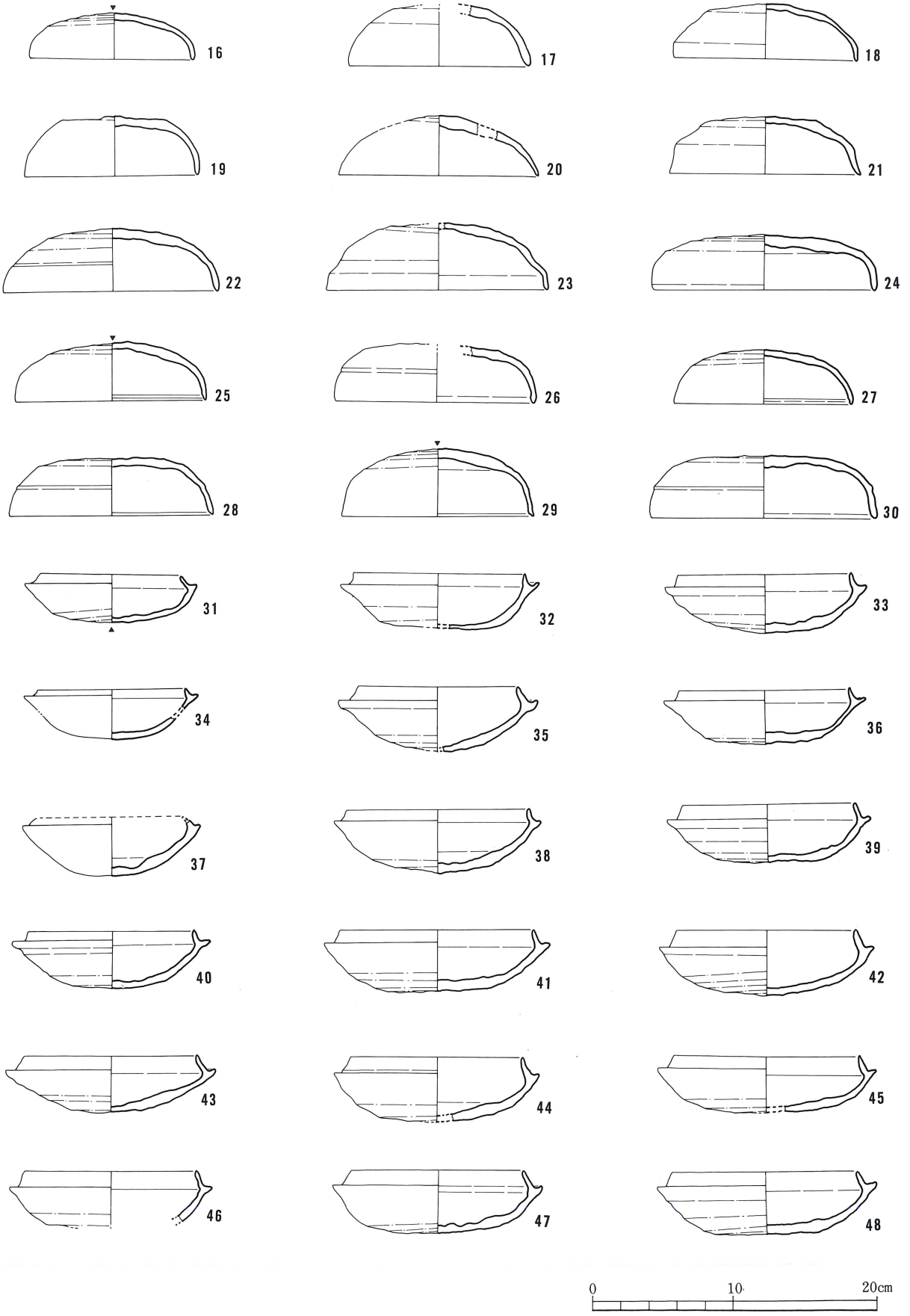
頭蓋骨非計測的形質の観察で、鼓室骨裂孔（右、一）、外耳道骨腫（右、一）が観察された。保存部位が少なく、その他の形質については不明である。（土肥直美）



第127図　22号横穴墓玄室内人骨出土状態

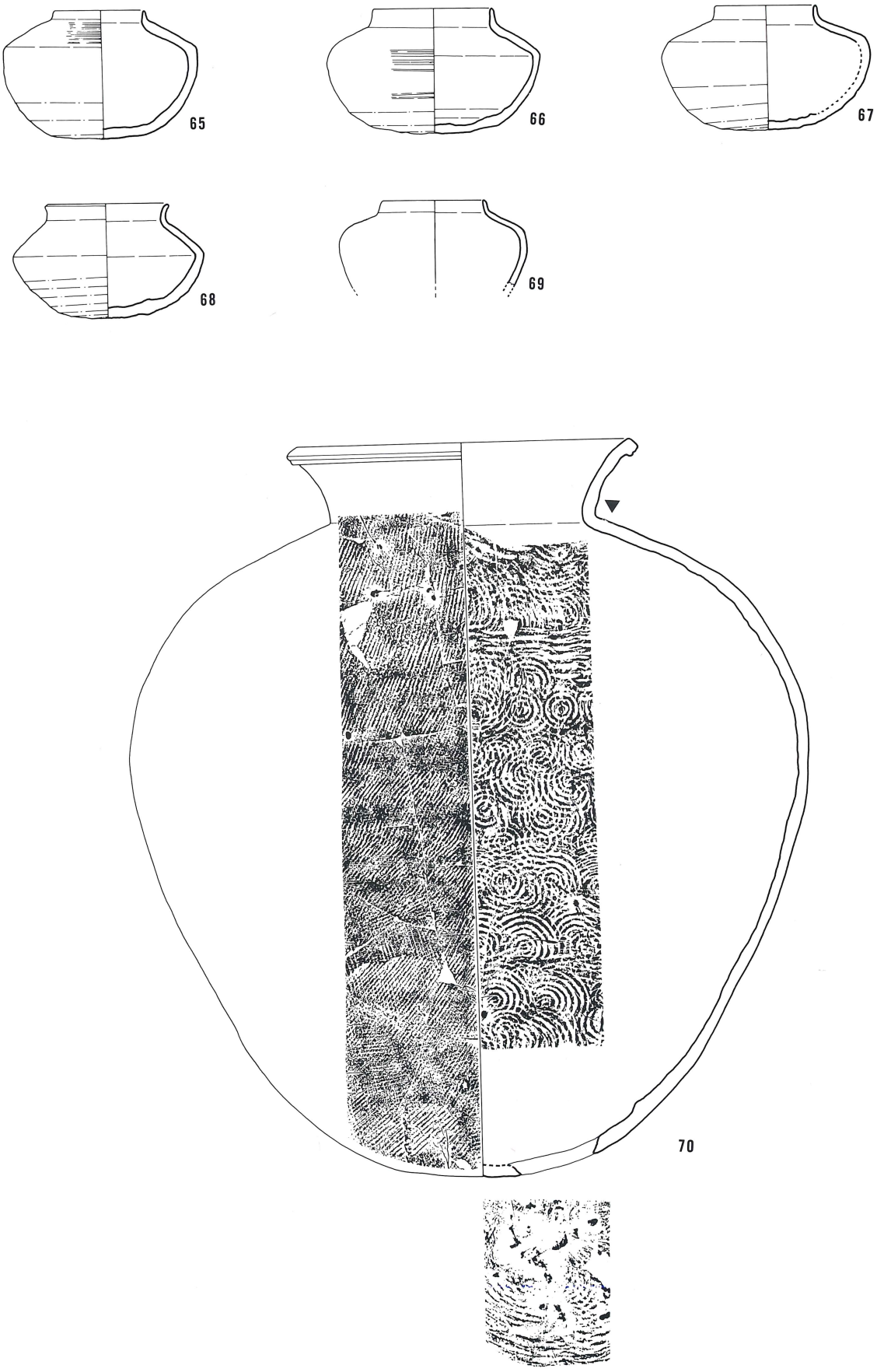


第128図　22号横穴墓出土遺物実測図(1)

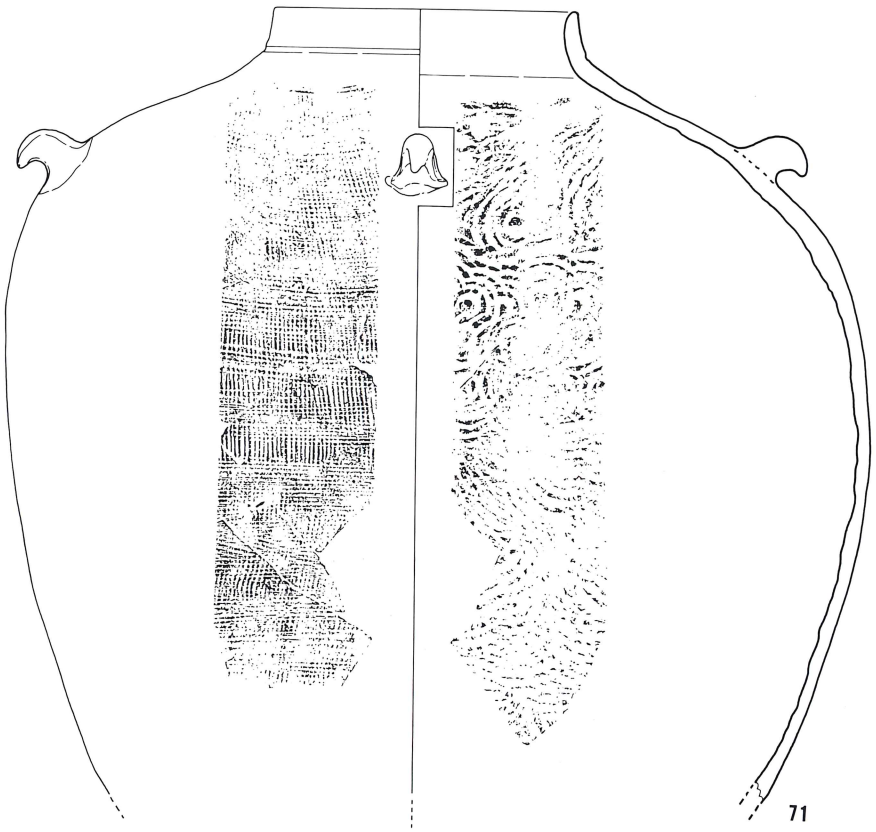


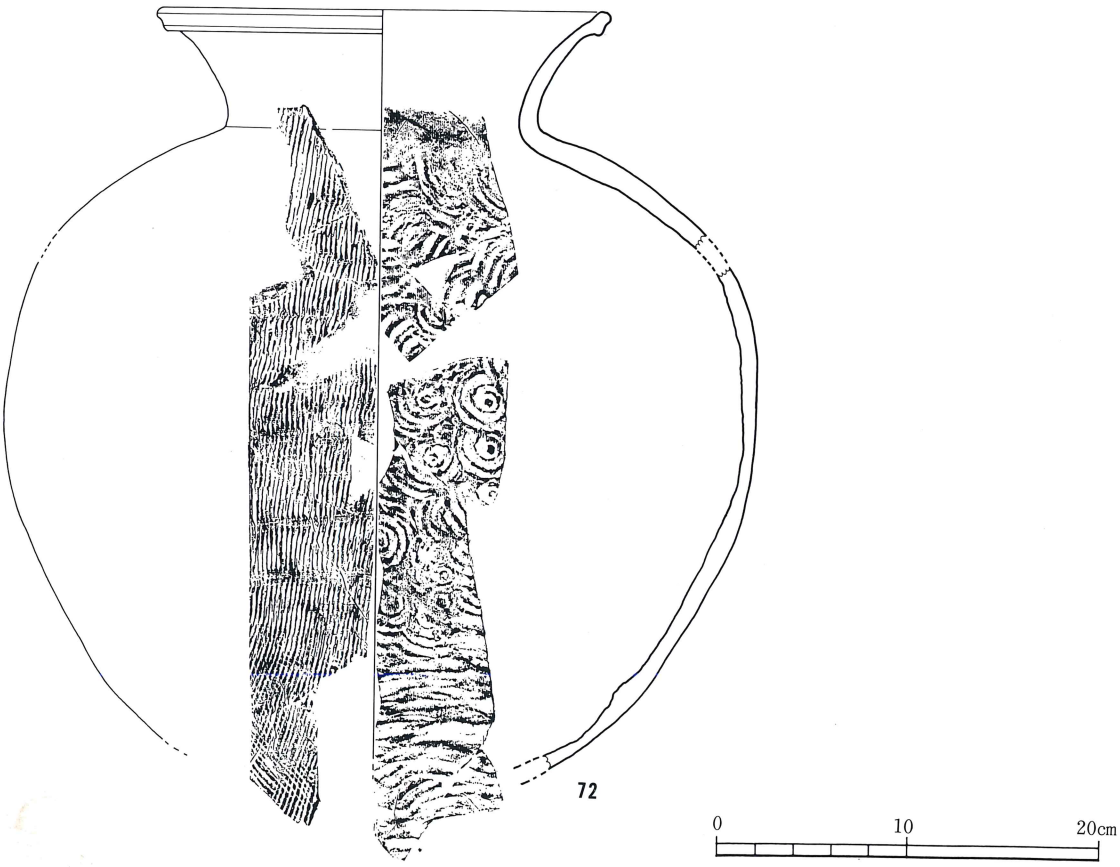
第129図　22号横穴墓出土遺物実測図(2)

第130図　22号横穴墓出土遺物実測図(3)

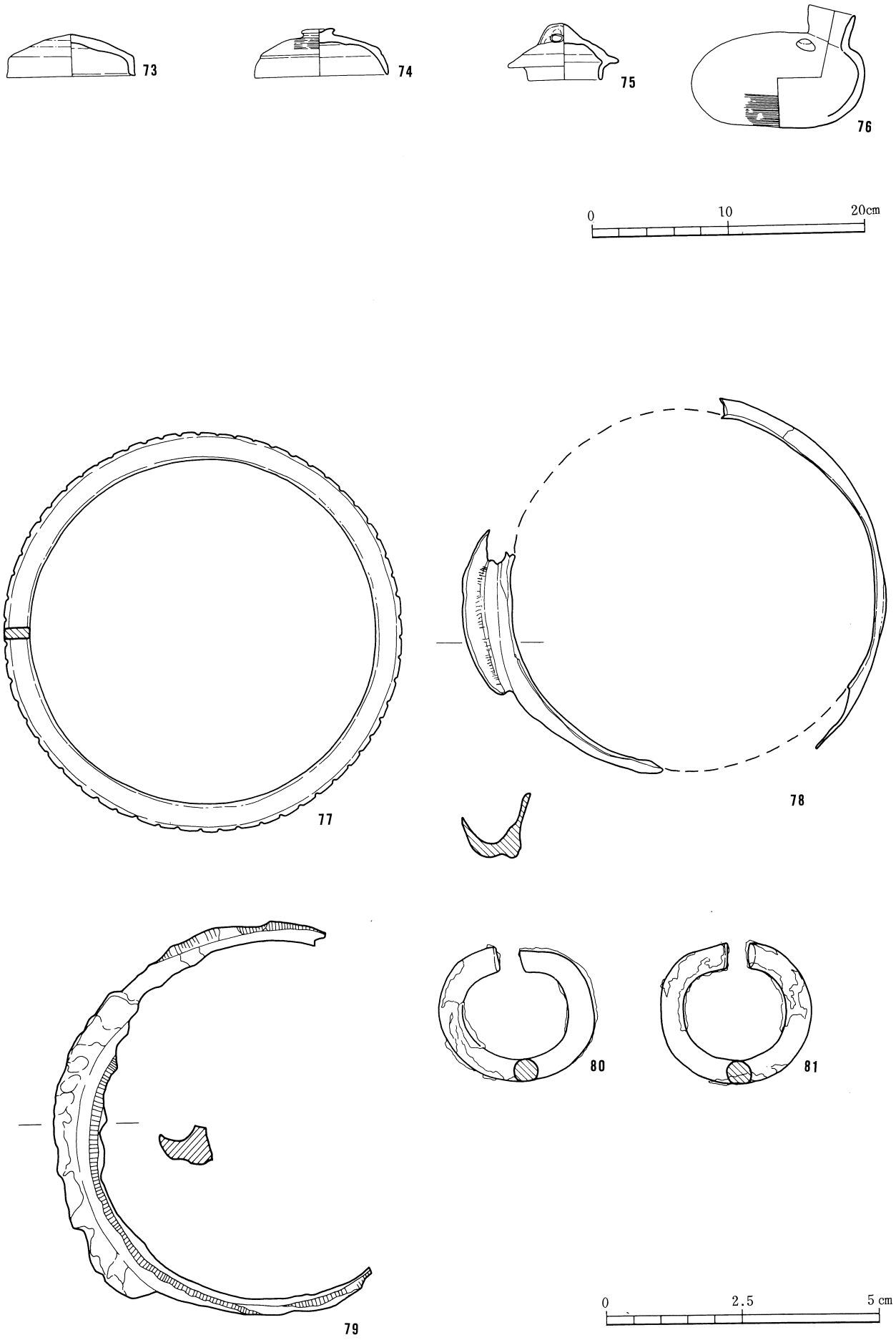


第131図　22号横穴墓出土遺物実測図(4)

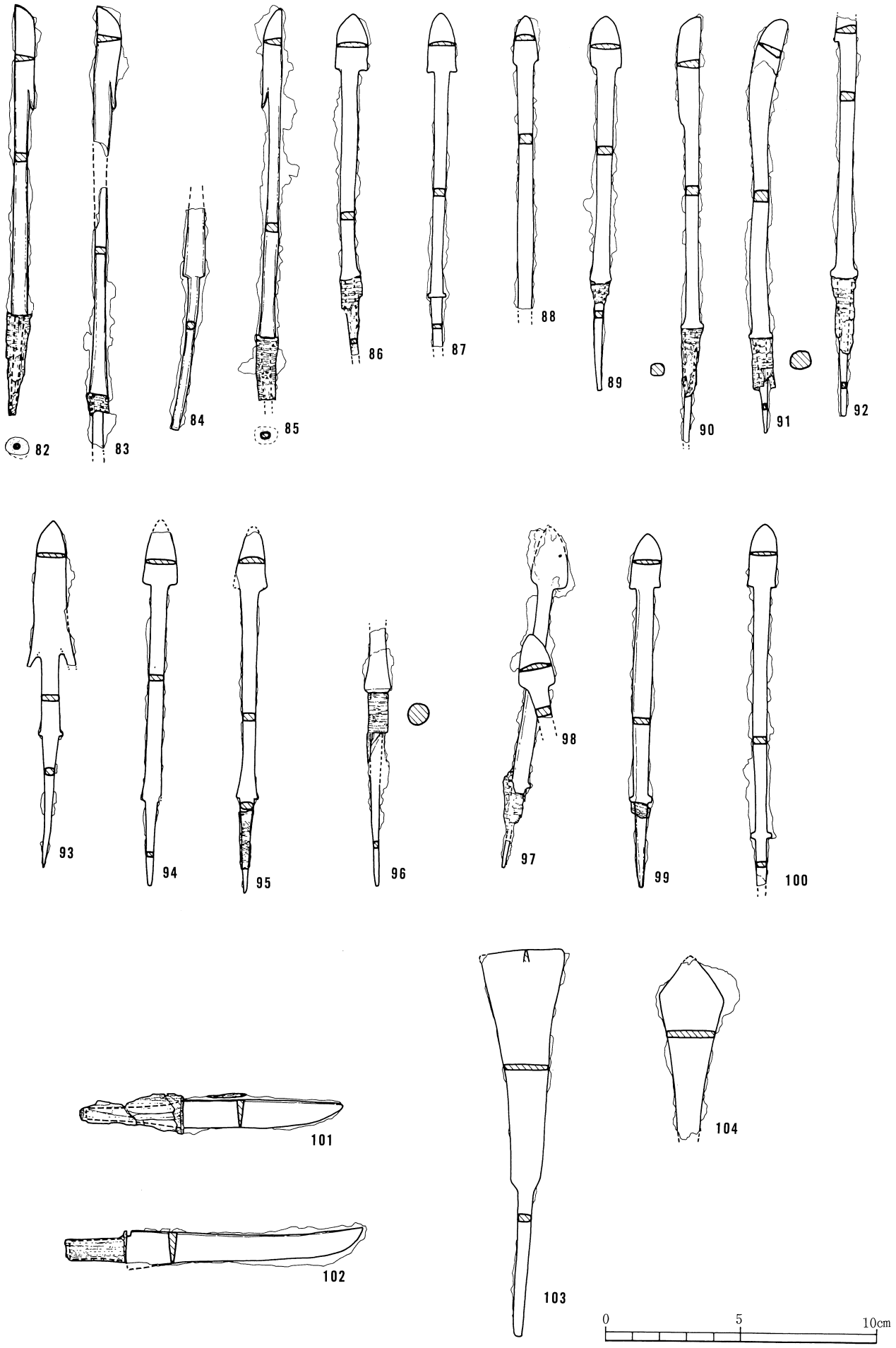




第132図　22号横穴墓出土遺物実測図(5)



第133図　22号横穴墓出土遺物実測図(6)



第134図　22号横穴墓出土遺物実測図(7)

第45表　22号横穴墓出土土器観察表

（単位：cm）

番号	器種	法量 ・口径 ・器高 ・胴部最大径	形態の特色	技法の特色 内面	外面	色調	胎土	焼成	備考	ヘラ記号の有無
1	坏蓋	・13.1 ・4.1 ・—	口縁部は外反しながらのび、端部は丸い。天井部は高く平らである。	回転ナデ 同心円タタキ痕	回転ナデ 回転ヘラケズリ	灰色 灰黒色	精緻	良好 堅緻		
2	坏蓋	・13.2 ・4 ・—	口縁部は外反しながらのび、端部は丸い。 天井部は、やや高く平らである。	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	青灰色	0.5～1.5mmの白色砂粒を少量含む	良好		
3	坏蓋	・15.5 ・4.3 ・—	口縁部はほぼ直下に下り、端部は丸い。天井部の状態は不明。稜はみとめられない。	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	白青灰色	0.5～4mmの白色砂粒をやや多量に含む	良好	反転復元	
4	坏蓋	・13.8 ・4.2 ・—	口縁部は若干内側に屈曲し、端部はややとがっている。天井部は低く平らである。	回転ナデ 同心円スタンプ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	淡緑灰色 青灰色	1～3mmの白色砂粒を含む	良好		外面天井部「小」
5	坏身	・12 ・4.5 ・—	たちあがりは内傾してのび、端部は丸い。受部は水平にのび、端部は丸い。 底部は深く、丸みをおびる。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	青灰色	石英粒を多量に含む	良好 堅緻		
6	坏身	・12.4 ・4.5 ・—	たちあがりは内傾してのび、端部は丸い。受部は、ほぼ水平にのび、端部はとがりぎみ。底部は浅く平らである。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	明青灰色	0.5～3.5mmの白色砂粒を多量に含む	良好		
7	坏身	・12.2 ・4.3 ・—	たちあがりは内傾してのび、端部は丸い。受部は上外方に湾曲しながらのび、端部は丸い。底部はやや深く丸い。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	青灰色	1mm前後の石英粒を少量含む	良好 堅緻		
8	坏身	・13 ・4.4 ・—	たちあがりは内傾してのび、端部はさらに内傾して、若干丸みをおびる。受部は上外方にのび、端部は丸い。底部はやや深く丸い。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	青灰色 暗青灰色	0.5～3mmの白色砂粒を少量含む	良好 堅緻		外面底部「丨」
9	坏身	・11.9 ・4.5 ・—	たちあがりは内傾してのび、端部は細く鋭い。受部は上外方にのび、端部は丸い。底部は深く丸みをおびている。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	淡緑褐色 白灰色 青灰色	0.5～2mmの白色砂粒を微量に含む	良好		
10	坩蓋	・9.2 ・3.6 ・—	口縁部は外反して下り端部は丸い。天井部は高く丸味をおびる。稜はみとめられない。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 不定方向のヘラケズリ	青灰色 暗赤褐色 茶褐色	1mm以下の黒色砂粒を微量に含む	良好		
11	甕	・13.9 ・15.6 ・9.5	口頸部は外反しながらのび端部付近で屈曲し、外面に凸線がつく。端部はわずかに段をなす。胴部はだ円形を呈し底部は、やや平ら。胴部中央部に穿孔あり。	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	青灰～灰黒色	石英粒を多量に含む	良好		
12	提瓶	・— ・19.7＋α ・17.6	口頸部は外反しながらのびる。胴部は、円形を呈し、両肩に把手がつく。	回転ナデ	ナデ 回転ヘラケズリ	青黒灰色 青灰色	精緻 石英粒を含む	良好	反転復元	

番号	器種	法量 ・口径 ・器高 ・胴部最大径	形態の特色	技法の特色 内面	外面	色調	胎土	焼成	備考	ヘラ記号の有無
13	提瓶	・7.8 ・14.6 ・17.5	口頸部は外反しながらのび、端部は面をなす。胴部は円形で最大径は中心部にある。	回転ナデ	回転ナデ 回転カキ目ナデ	青灰色	石英、長石の微細粒を微量含む	良好		
14	壺	・19.4 ・31.8＋α ・32＋α	口頸部は外反しながらのび、端部は、丸みをおび面をなす。胴部はほぼ円形を呈すが、底部はとがりぎみである。	回転ナデ 同心円タタキ	回転ナデ 平行タタキ カキ目	青灰色	精緻	良好		
15	横瓶	・11.4 ・29 ・33	口頸部は外反しながらのび、端部は肥厚し段をなす。胴部はだ円形を呈す。	回転ナデ 同心円タタキ	回転ナデ タタキ	淡青灰色	精緻	やや不良		
16	坏蓋	・11.5 ・3.2 ・－	口縁部は若干内側に屈曲し、端部は丸い。天井部は低く平らである。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	黒灰色	0.5～2㎜の白色砂粒を微量含む	良好		外面天井部「∪」
17	坏蓋	・12.7 ・4.3 ・－	口縁部はやや外反しながらのび、端部は丸い。天井部はやや高く、丸みをおびる。	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	青灰色	精緻	良好 堅緻	反転復元	
18	坏蓋	・12.8 ・3.9 ・－	口縁部はほぼ直下に下り、端部は丸い。天井部はやや高く平らである。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ ヘラ切り未調整	青灰色	0.5～9㎜の白色、黒色砂粒を多量に含む	良好		
19	坏蓋	・12.4 ・4.2 ・－	口縁部はほぼ直下にのび、端部は丸い。天井部はやや高く、平らである。	回転ナデ	回転ナデ ヘラケズリ	灰黒色 灰色	石英粒を大量に含む	良好 堅緻		
20	坏蓋	・14 ・4.2 ・－	口縁部は外反しながらのび、端部は丸い。天井部は高く、丸みをおびる。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	青灰色 灰白色	角閃石と考えられる黒色粒を多量に含む	やや良好	反転復元	
21	坏蓋	・13.5 ・4 ・－	口縁部は外反しながらのび、端部はさらに外反し、丸い。天井部はやや高く平らである。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	白灰色	0.5～3㎜の白色砂粒を含む	不良		
22	坏蓋	・15.1 ・4.5 ・－	口縁部は外反しながらのび、端部は丸い。外面はわずかに稜がみられ、天井部はやや高く丸みをおびる。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	淡緑灰色 青灰色	0.5～3㎜の白色砂粒をやや多量に含む	良好		
23	坏蓋	・15.5 ・4.7 ・－	口縁部は外反して、直下に下り、端部は丸い。稜はみとめられない。天井部はやや高く平らである。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	青灰色 灰　色	0.5～1.5㎜の白色砂粒を微量含む	やや不良		
24	坏蓋	・15.6 ・4 ・－	口縁部はほぼ直下に下り、端部は丸い。天井部は低く平らである。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	灰色 青灰色	0.5～3.5㎜の白色、黒色砂粒を多量に含む	良好 堅緻		
25	坏蓋	・13.4 ・3.9 ・－	口縁部は外反して直下に下り、端部はわずかに内傾する段を有す。天井部は低く丸みをおびる。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	黒灰色 淡緑褐色	0.5～1.5㎜の白色、黒色砂粒を微量含む	良好		外面天井部「卅」

番号	器種	法量 ・口径 ・器高 ・胴部最大径	形態の特色	技法の特色 内面	外面	色調	胎土	焼成	備考	ヘラ記号の有無
26	坏蓋	・14 ・4 ・—	口縁部は外反しながらのび、端部でやや内湾し内傾する面を有す。天井部は低く平らである。	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	白青灰色 青灰色	0.5～2㎜の白色砂粒を微量含む	良好 堅緻		
27	坏蓋	・12.5 ・3.8 ・—	口縁部は外反しながらのび、端部は内傾する段を有す。天井部はやや高く丸みをおびる。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	青灰色	0.5～3㎜の白色砂粒を少量含む	良好		
28	坏蓋	・14.1 ・4.1 ・—	口縁部は外反しながらのび、端部は内傾する段を有す。外面には、うすい稜がみとめられる。天井部はやや高く平らである。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ ヘラ切り	青灰色	0.5～3.5㎜の白色砂粒をやや多量に含む	良好 堅緻		
29	坏蓋	・13.6 ・4.8 ・—	口縁部は外反しながらのび、端部は内傾する段をうすく有す。天井部は高く、丸みをおびる。	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	淡緑灰色 淡黒褐色	0.5～3.5㎜の黒色砂粒を少量含む	良好		外面天井部「I」
30	坏蓋	・15.8 ・4.3 ・—	口縁部はほぼ直下に下り、端部はやや内傾する段がうすくみられる。外面にはっきりした稜あり。天井部は低く平らである。	回転ナデ 同心円スタンプ文	回転ナデ 回転ヘラケズリ	青灰色	1～3.5㎜の白色砂粒を多量に含む	良好 堅緻		
31	坏身	・10 ・3.3 ・—	たちあがりは短く内傾してのび、端部はやや肥厚して丸い。受部は短く水平にのび、端部は丸い。底部は浅くやや丸みをおびる。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	黒灰色 白黒灰色	1～2㎜の白色砂粒を微量含む	良好		外面底部「V」
32	坏身	・12 ・4.0 ・—	たちあがりは内傾してのび、端部の形態は不明。受部は上外方にのび、端部は丸い。 底部は浅く平らである。	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	淡黄赤褐色	0.5～3.5㎜の白色・黒色砂粒をやや多量に含む	不良		
33	坏身	・12.4 ・4.2 ・14.4	たちあがりは内傾してのび、端部は丸い。受部はほぼ水平にのび端部は丸い。底部はやや深く丸みをおびる。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	青灰色 灰色 暗青灰色	0.5～4.5㎜の白色砂粒を多量に含む	良好 堅緻		
34	坏身	・10.6 ・3.5 ・12.4	たちあがりは短く内傾してのび、端部は丸い。受部は水平にのび、端部は丸い。底部は浅く平らである。	焼成不良のため調整不明	焼成不良のため調整不明	淡黄灰色	石英粒を含むが精緻	不良		
35	坏身	・11.2 ・4.5 ・14.5	たちあがりは内傾してのび、端部は丸い。受部は上外方にのび、端部は丸い。底部は浅く丸みをおびる。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	淡緑灰色	0.5～3㎜の白色砂粒を少量含む	良好		
36	坏身	・12 ・3.4 ・14.3	たちあがりは短く内傾してのび、端部は鋭い。受部は上外方にのび、端部は鋭い。底部は浅くほぼ平らである。	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	灰色	0.5～2㎜の黒色砂粒を多量、白色砂粒を微量含む	良好		
37	坏身	・— ・4 ・12.6	受部は短く水平にのび、端部は丸い。底部は深くやや平らである。	焼成不良のため調整不明	焼成不良のため調整不明	淡黄灰色	石英粒を含むが精緻	不良		

番号	器種	法量 ・口径 ・器高 ・胴部最大径	形態の特色	技法の特色 内面	外面	色調	胎土	焼成	備考	ヘラ記号の有無
38	坏身	・12.8 ・4.55 ・－	たちあがりは内傾してのび、端部は鋭い。受部は水平にのび、端部は丸い。底部は浅く丸みをおびる。	回転ナデ 調整ナデ 同心円のスタンプ	回転ナデ 回転ヘラケズリ ヘラ切り未調整	淡緑灰色 青灰色	0.1～2㎜の白色、黒色砂粒を微量含む	良好		
39	坏身	・11.4 ・2.7 ・－	たちあがりは内傾してのび、端部は丸い。受部はほぼ水平にのび、端部は丸い。	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	青灰色	角閃石粒を含む	良好 堅緻	反転復元	
40	坏身	・11.6 ・4.1 ・－	たちあがりは短くほぼ直立してのび、端部は鋭い。受部は上外方にのび、端部は丸い。底部は浅く丸みをおびる。	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ ヘラ切り痕	淡灰色 白灰色	0.5～4㎜の白色砂粒をやや多量に含む	良好 堅緻		
41	坏身	・13.5 ・4.4 ・－	たちあがりは内傾してのび、端部は細く鋭い。受部はほぼ水平にのび、端部は丸い。底部は浅く平らである。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	白灰色	0.5～4㎜の白色砂粒を多量に含む	良好		
42	坏身	・12.5 ・4.2 ・－	たちあがりは内傾して段を有し、端部は丸い。受部はほぼ水平にのび、端部は鋭い。底部はやや浅く丸みをおびる。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	明青灰色 紫褐色	0.5～3㎜の白色砂粒を多量に含む	良好 堅緻		
43	坏身	・12.2 ・4.1 ・－	たちあがりは内傾してのび、端部は鋭い。受部は上外方にのび、端部は丸い。底部は浅く丸みをおびる。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	淡灰色 青灰色	0.5～3㎜の白色、黒色砂粒を微量含む	良好		
44	坏身	・12 ・4.4＋α ・14.4	たちあがりは内傾してのび、端部は丸い。受部は水平にのび端部はとがる。底部は深く平らである。	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	青灰色 白灰色	0.5～3㎜の白色砂粒を多量に含む	良好 堅緻		
45	坏身	・13.4 ・4＋α ・15.8	たちあがりは内傾してのび、端部はとがりきみで丸い。受部は上外方にのび、端部はとがりぎみで丸い。底部はやや深く平らである。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	青灰色 淡緑灰色	1～2.5㎜の白色砂粒を少量含む	良好		
46	坏身	・12.1 ・3.6 ・14.2	たちあがりは内傾してのび、端部は丸い。受部は水平にのび端部は丸い。	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	明青灰色	1～4㎜の白色砂粒をやや多量に含む	良好 堅緻		
47	坏身	・12.2 ・4.4 ・14.7	たちあがりは内傾してのび、端部は丸い。受部は上外方にのび端部は鋭い。底部は浅くやや平ら。外面の器面が荒れている。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	明青灰色 青灰色	1～3.5㎜の白色砂粒を微量含む	良好 堅緻		
48	坏身	・12.9 ・4.5 ・15.4	たちあがりは内傾してのび、端部は丸い。受部はやや上外方にのび端部にかけて凸面をなし鋭い。底部は浅く平らである。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	明青灰色	0.5～3.5㎜の白色砂粒を多量に含む	良好		
49－A	坏蓋	・13.2 ・5.4 ・－	口縁部は外反しながらのび、端部は丸い。外面は丸みをおびた稜がみとめられる。天井部は高く丸みをおびる。外面天井部はツマミがつく。	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ ナデ	青灰色 淡黄褐色	石英、長石粒を含む	良好		

番号	器種	法量 ・口径 ・器高 ・胴部最大径	形態の特色	技法の特色 内面	外面	色調	胎土	焼成	備考	ヘラ記号の有無
49－B	有蓋高坏	・11.7 ・13.4 ・14.3	坏部のたちあがりは内傾してのび、端部は丸い。受部は上外方にのび端部は丸い。脚部は、下外方にのび、外面中央部に２本の沈線がある。端部は面をなす。長方形二段スカシが２方向からあり。	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ後ナデ	青灰色	石英、長石粒を含む	良好		
50－A	坏蓋	・13.2 ・5.3 ・－	口縁部は外反しながらのび、端部は丸い。外面には稜がみとめられる。天井部はやや高く丸みをおびる。外面頂部にツマミがつく。	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	青灰色 青灰白色	長石、石英粒を含む	良好		
50－B	有蓋高坏	・11.6 ・15 ・14.3	坏部のたちあがりは内傾してのび端部は丸い。受部は上外方にのび端部は丸い。脚部は下外方にのび、端部は面をなす。外面中央部に２本の沈線をなす。２方向から長方形二段スカシあり。(あと２方向わりつけが残っている。)	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	青灰色	石英、長石粒を含む	良好		外面脚裾部「Ｉ」
51	有蓋高坏	・13.1 ・－ ・16	たちあがりは内傾してのび、端部は丸い。受部は、肥厚しながら上外方にのび、端部は丸い。脚部は下外方にのび、端部は面をなす。外面中央部に２本の沈線がある。長方形二段スカシあり。	器面が磨滅しているため調整不明	器面が磨滅しているため調整不明	灰橙色 青灰色	石英粒を多量に含む	良好		
52	高坏	・10.9 ・16.5 ・－	坏部の口縁部は外反しながらのび、端部は丸い。外面には稜が、ややはっきりとみとめられる。脚部は下外方にのび端部は面をなす。スカシはヘラ状の線で三方に入れ内側まで貫通していない。	回転ナデ	回転ナデ 櫛描列点文 回転ヘラケズリ後ナデ	灰色～黒色	石英微砂粒を少量含む	良好 堅緻		
53	高坏	・11.4 ・15.9 ・－	坏部の口縁部は上外方にのび、端部は細く丸い。外面に稜が２ケ所みられる。脚部は長く下外方にのび、外面中央部に２本の沈線がみられ、端部は面をなす。長方形二段スカシが三方にあり。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリの後回転ナデ	灰色～黒色	石英粒を多量に含む	良好		
54	高坏	・11.7 ・15 ・－	坏部の口縁部は上外方にのび、端部は丸い。丸い外面には稜の２ケ所みとめられる。脚部は下外方にのび端部は面をなす。スカシは長方形二段のものを三方向に入れる。	回転ナデ	回転ナデ 櫛描波状文	灰色 灰黒色	精緻	良好 堅緻		
55	高坏	・12 ・12.8 ・－	坏部の口縁部は上外方にのび、端部は内傾する面をなす。外面には、はっきりと稜がある。脚部は、下外方にのび端部は面をなす。外面中央部に２本の沈線がある。	回転ナデ	回転ナデ 櫛描列点文 回転ヘラケズリ後ナデ	赤灰色～青灰色	石英、長石粒の微細粒を含む	良好		

番号	器種	法量 ・口径 ・器高 ・胴部最大径	形態の特色	技法の特色 内面	外面	色調	胎土	焼成	備考	ヘラ記号の有無
56	高坏	・12.6 ・5.8 ・—	坏部の口縁部は外反しながらのび、端部は丸い。脚部は下外方にのび、端部は面をなす。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 調整ナデ	青灰色	石英、長石粒を含む	良好		
57	高坏	・12.5 ・6 ・—	坏部の口縁部は外反しながらのび、端部は丸い。脚部は下外方にのび端部は面をなす。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 調整ナデ	青灰色	石英、長石粒を含む	良好		
58	高坏	・12.5 ・5.9 ・—	坏部の口縁部は外反しながらのび、端部は丸い。脚部は下外方にのび、端部は面をなす。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 調整ナデ	青灰色	石英、長石粒を含む。	良好		
59	高坏	・10.6 ・9.6 ・—	坏部の口縁部は外反しながらのび、端部は丸い。脚部は下外方にのび、端部は丸い。下方に穿孔あり。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ ナデ	青灰色	黒色砂粒を含むが精緻	良好 堅緻		
60	器台	・— ・10.6＋α ・9	器台筒部の破片。長方形スカシ窓が二方向にあり。	回転ナデ	櫛描波状文	青灰色	精緻	良好 堅緻		
61	高坏	・15 ・4.6 ・—	脚部は下外方にのび、脚部は面をなす。スカシ窓あり。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 茶灰褐色	0.5～1㎜の砂粒をやや多量に含む	良好	脚部	
62	高坏	・11 ・8.2＋α ・—	口縁部は外反しながらのび、端部は細く丸い。外面にはうすい稜がみとめられる。脚部は長方形三方スカシあり。外面に一本の沈線あり。	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	青灰色～灰色	石英粒を微量に含む	良好 堅緻		
63	提瓶	・8.4 ・19.6＋α ・—	口頸部は外反しながらのび、端部は丸い。	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	明青灰色 灰色	精緻	良好		
64	提瓶	・16.8 ・10.8＋α ・—	胴部は円形を呈し、外面両肩に、輪状の把手がつくが一方は欠損している。	器面が磨滅しているため調整不明	器面が磨滅しているため調整不明	灰白色	角閃石、石英粒を含む	不良		
65	短頸壺	・6.3 ・8.7 ・13.4	口頸部は短く直立してのび、端部は丸い。胴部は丸みをおび最大径は上部にある。底部は深く、やや平らである。	回転ナデ	回転ナデ 回転カキ目 回転ヘラケズリ	青灰色	石英、長石粒を含む	良好		
66	短頸壺	・8.2 ・8.4 ・14.6	口頸部は短く直立してのび、端部は丸い。胴部の最大径は上方にある。底部は丸みをおびる。	回転ナデ	回転ナデ 回転カキ目 回転ヘラケズリ	青灰色	石英、長石粒を含む	良好		
67	短頸壺	・7 ・8.4 ・14.4	口頸部は短く直立してのび、端部は丸い。胴部の最大径は上方にある。底部は深く丸みをおびる。	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	青灰色	石英、長石粒を含む	良好		
68	短頸壺	・8.2 ・7.7 ・13.2	口頸部は外反しながらのび、端部は面をなす。胴部最大径は、ほぼ中央部にある。底部は深く、丸みをおびる。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	青灰色	石英、長石粒を含む	良好		

番号	器種	法量 ・口径 ・器高 ・胴部最大径	形態の特色	技法の特色 内面	外面	色調	胎土	焼成	備考	ヘラ記号の有無
69	短頸壺	・7 ・5.6 ・12.9	口頸部は短く内側してのび、端部は丸い。胴部はやや丸みをおびてはっている。	回転ナデ	回転カキ目	青灰色	精緻	良好 堅緻		
70	甕	・22.8 ・49.6 ・46.4	口頸部は外反しながらのび、端部は段をなし、外面に凸面をなす。胴部の最大径は上方にあり。底部は、丸みをおびる。	回転ナデ 同心円タタキ	回転ナデ 平行タタキ	青灰色	石英、長石粒を含む	良好	外面底部に焼成後外側から穿孔あり	外面頸部「Ψ」
71	甕	・16 ・41＋α ・46	口頸部は短く直立してのび、端部は丸い。胴部はほぼ長円形を呈す。外面肩部に5ケ所ツノ状の把手あり。	回転ナデ 同心円タタキ	回転ナデ 平行タタキ 回転カキ目	青灰色 黄褐色	精緻	良好		
72	甕	・23.2 ・40＋α ・40	口頸部は外反しながらのび、端部は段をなし丸い。外面はわずかながら凹面をなす。胴面は、ほぼ円形を呈す。	回転ナデ 平行タタキ 回転カキ目	回転ナデ 同心円タタキ	青灰色	精緻	良好		
73	坏蓋	・9.6 ・3.2 ・—	口縁部はほぼ直下にのび、端部は内傾する面を有す。天井部はやや高くとがりぎみである。	回転ナデ ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	青灰色	精緻	良好		
74	坏蓋	・10 ・3.4 ・—	口縁部は外反しながらのび、端部は丸い。天井部はやや高く、丸みをおび、外面頂部にツマミがつく。外面に稜がみられる。	回転ナデ	回転ナデ 回転カキ目	青灰色	石英、長石粒を含む	良好		
75	蓋	・5.2 ・4.2 ・8.2	口縁部は内傾しながらのび、端部は丸い。受部は水平にのび、端部は丸い。天井部は低く外面頂部に輪状のツマミがつく。	回転ナデ	回転ナデ 不定方向のヘラケズリ 後ナデ	明青灰色	精緻	良好 堅緻	陶質土器？	
76	平瓶	・3.6 ・9 ・12.8	口頸部はほぼ直立しながらのび、端部は丸い。胴部はだ円形で外面に浮文がつく。	回転ナデ	回転ナデ 回転カキ目	青灰色	長石、石英粒を少量含む	良好		

第46表　22号横穴墓出土装身具計測表

（単位：cm，g）

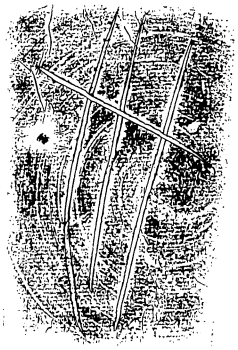
番号	器種	外径	断面径	重量	備考
77	銅釧	6.4（内径）	0.2×0.5		朝鮮製？　白銅質
78	貝輪	6.7（内径）	1.2×1.2		イモ貝、横切り
79	同上	6.6（内径）	0.7×1.0		イモ貝、横切り
80	耳環	28×26.5	0.4×0.45	8.7	銅地金張、緑青
81	同上	2.9×24.5	0.4×0.45	9.5	銅地金張、緑青

第47表　22号横穴墓出土鉄器観察表

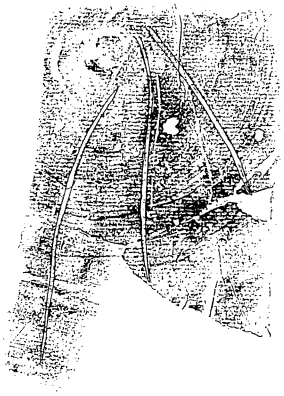
（単位：cm）

番　号	器　　種	全　長	頭部長（刀部）	刃　幅	頸　幅	刃部厚	頸　厚	備　　考
82	鉄鏃	15.0以上	3.9	0.8	0.5	0.3	0.3	桜樹皮巻残存
83	同上	13.5以上	3.8	0.9	0.55	0.3	0.3	同上
84	同上							頸部
85	同上	14.5以上	3.7	0.7	0.6	0.3	0.3	桜樹皮巻残存
86	同上	12.7以上	2.0	1.1	0.6	0.2	0.3	同上
87	同上	12.4以上	2.2	1.0	0.45	0.2	0.3	
88	同上	10.8以上	1.7	0.9	0.6	0.25	0.3	
89	同上	13.9	1.8	1.1	0.6	0.2	0.3	桜樹皮巻残存
90	同上	15.9以上	4.1	0.8	0.5	0.25	0.3	同上
91	同上	15.3	3.1	0.9	0.6	0.25	0.4	同上
92	同上	14.8	0.8以上	0.8	0.55	0.25	0.25	同上
93	同上	12.9	5.3	1.3	0.6	0.2	0.25	同上
94	同上	13.2	1.9以上	1.2	0.6	0.2	0.25	
95	同上	13.4	1.7	1.0	0.5	0.25	0.25	桜樹皮巻残存
96	同上	9.5以上						同上　　頸部
97	同上	12.4	2.0	1.25	0.6	不明	0.25	同上
98	同上	3.0以上	1.8	1.3	0.6	0.2	0.3	
99	同上	13.1	2.0	1.1	0.6	0.2	0.25	桜樹皮巻残存
100	同上	13.4	2.4	1.0	0.55	0.2	0.25	
101	刀子	9.9	6.0	0.9	0.55	0.25	不明	鹿角製柄の残存
102	同上	11.0	8.6	1.0	0.65	0.2	不明	同上
103	鉄鏃	14.5	9.1	3.2	0.5	0.2	0.3	
104	同上	6.8以上	6.8以上	2.4	不明	0.2	不明	

128図－8

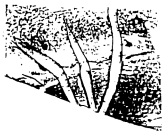


129図－25



128図－4

128図－4

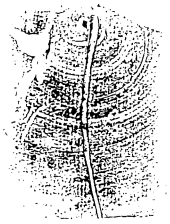


131図－70

129図－31

130図－50B

129図－16



129図－29

128図－1

第135図　22号横穴墓出土土器ヘラ記号

23号横穴墓

1．立地、調査前の状況

23号横穴墓は北支群中のやや東側斜面下方に立地し南西方向に開口する。全長は約4.25ｍで前庭部入口床面で標高31.6ｍを測る。当初22号横穴墓の墓道入口と想定しており、また羨道、玄室の天井部が陥没していたことにより、横穴墓の存在を確認できずに調査した。そのため、前庭部内埋土土層観察をせずに掘り下げてしまい、閉塞石上面を確認して横穴墓の存在に気付いた。その後、調査は前庭部プランおよび前庭部内１号土壙墓の確認、玄室内の崩落土等の除去作業を行い、遺物礫床等の調査を実施した。

2．規模、構造

1）　前庭部、羨門部

前庭部は床面で長さ1.75ｍ、幅は羨門付近で約1.1ｍ、入口付近で約2.0ｍを測り台形状を呈す。床面は、ほぼ水平に羨門付近まで続くが、北西隅に前庭部長軸に添って土壙墓がつくられているのが特徴である。

羨門は天井、側壁とも崩壊が著しく、復元は困難であるが床面で幅0.47ｍを測る。

閉塞施設は板石と河原円礫を使用し構築されている。閉塞の配石はその形状により３工程に分けられる。第１工程は長さ35㎝、幅55～60㎝、厚さ５～10㎝前後の安山岩製板石２枚を上下に重ね合せ羨門を覆う。両板石とも羨門側の面にベンガラを塗布する。第２工程は長さ40㎝、幅30～60㎝、厚さ10㎝前後の板石を平坦に重ねて第１工程の板石の下面の支えとしている。両板石とも上面に部分的にベンガラの塗布が認められることからこの配石工程は追葬時に行われたものと考えられる。第３工程は２工程を根石として人頭大よりやや大形の円礫３個で第１工程の板石の中面支えとなる。この配石後に閉塞施設全体を覆うように埋土がなされていたと推定されるが前述した情況で前庭部内埋土の様相は不明である。

2）　羨道、玄室

羨道は天井、側壁上部が陥没しており、高さは不明である。床面は長さ0.81ｍ、幅0.45ｍを測り、若干長い羨道であるのが特徴である。床面は約15°の傾斜で玄室に向って下降する。玄室との境は約0.1ｍの段差を持ち玄室が低い。

玄室は長さ1.77ｍ、幅2.14ｍの平入り長方形を呈している。天井部がほとんど落盤しているため高さは不明である。床面には左右側壁側に約0.1ｍ程基盤層を削り出して屍床を設けている。左右屍床には直径10㎝以下の河原円礫を敷いて礫床としている。礫床部分で標高31.85ｍを測る。天井形態は奥壁残存部分からドーム状を呈すると考えられる。

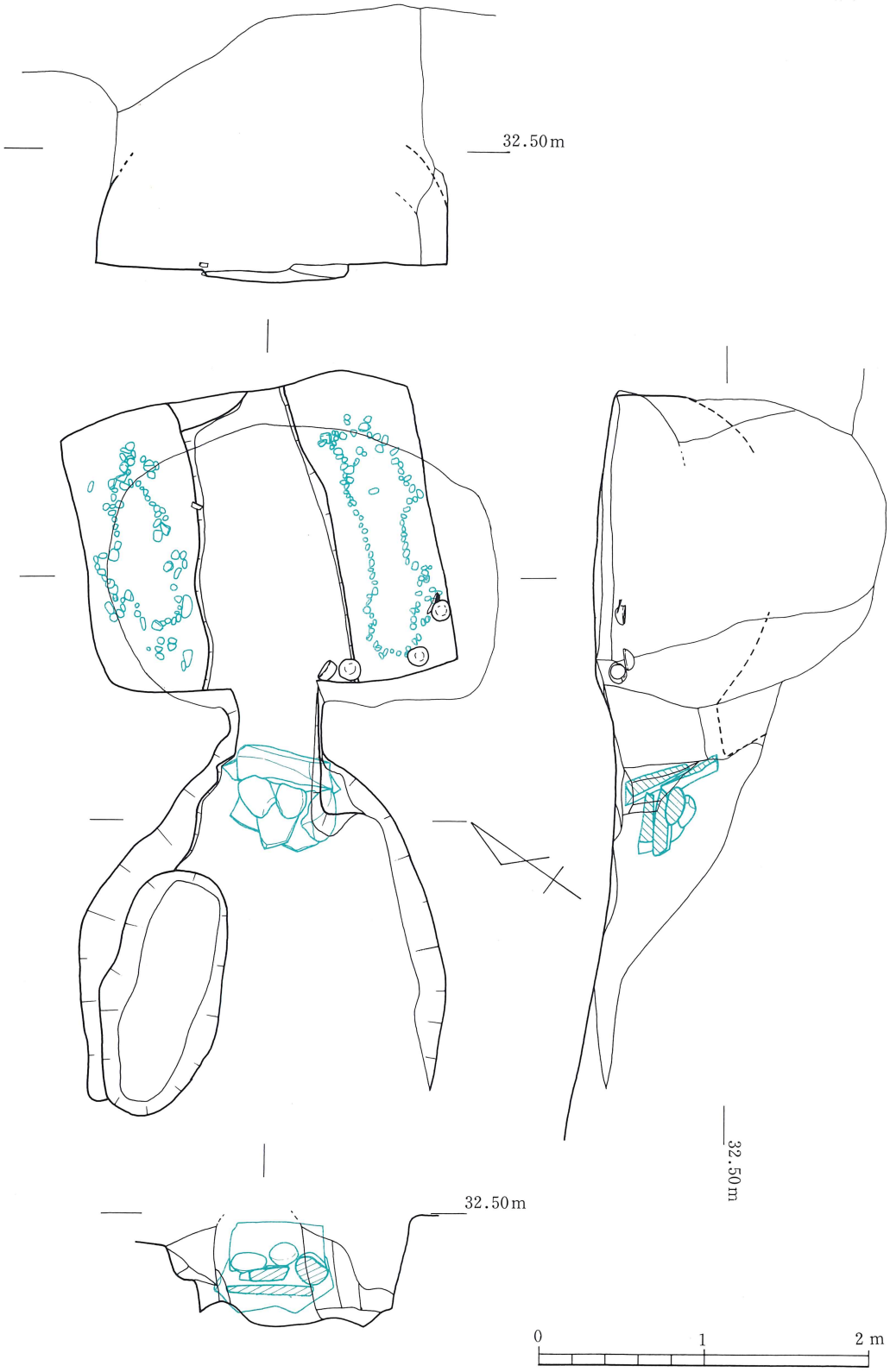
3．遺物の出土状態

1）　玄室内

遺物は、右裾壁の玄門近くに土師器埦２個（第138図１・２）、右裾壁中央付近に土師器埦１個（これは、調査中に盗難に合う。）が伏せた状態で、右側壁の裾壁よりに鉄鏃３本（第138図５～７）と土師器埦（第138図３）が検出された。鉄鏃は先端を玄門方向に向け、埦は正置した状態で鉄鏃の上に置かれていた。また、右屍床中央付近で頁岩製の小形砥石（第138図８）が検出された。

2）　前庭部内

前庭部内埋土中～上層中に土師器埦（第138図４）が破片で検出されたが一個体分に復元できるところから初葬時のものが追葬時に細片になったものと推定される。



第136図　23号横穴墓平・断面図

1号土壙墓

前庭部左壁ぎわに壁面に平行して土壙墓が検出された。土壙墓の検出面は基盤層面であったが、前述したように土層確認を明確にしておらず掘り込み面、あるいは横穴墓との先後関係は不明である。土壙墓の検出時における埋土は、基盤層の2次堆積土であり、前庭部最下面埋土と同種である。墓壙は、隅丸長方形で床面で長さ1.35m、幅0.45mを測り、深さは現状で0.2～0.5mを測る。主軸はN－58°－Eであり西側小口壁は斜面の関係上明瞭でない。遺物等は認められなかった。(村上久和)

第48表　23号横穴墓出土土器観察表

(単位：cm)

番号	器種	法量 ・口径 ・器高 ・胴部最大径	形態の特色	技法の特色 内面	外面	色調	胎土	焼成	備考	ヘラ記号の有無
1	椀	・13.2 ・6 ・14	口縁部は内湾しながらのび、端部はわずかに外反し、ややとがり気味。底部は深くわずかに平らである。	ヘラミガキ	ヘラミガキナデ	赤褐色	石英、雲母粒を多量に含む	良好 堅緻	土師器	
2	椀	・13 ・5.7 ・14	口縁部は内湾しながらのび、端部はわずかに外反し丸い。底部は、深くわずかに平らである。	ヘラミガキ	ヘラミガキナデ	赤褐色	石英、雲母粒を含む	良好 堅緻	土師器	
3	椀	・13 ・5.6 ・14	口縁部は内湾しながらのび、端部でわずかに外反し丸い。底部は深く丸い。	ヘラミガキ	ヘラミガキナデ	赤褐色	石英、雲母粒を多量に含む	良好 堅緻	土師器	
4	椀	・13 ・6 ・14.2	口縁部は内湾しながらのび、端部はわずかに外反し丸い。底部は深く平らである。	磨滅のため調整不明であるが部分的にヘラミガキがみられる		赤褐色	石英粒を含む 精緻		土師器 反転復元	

第49表　23号横穴墓出土鉄器観察表

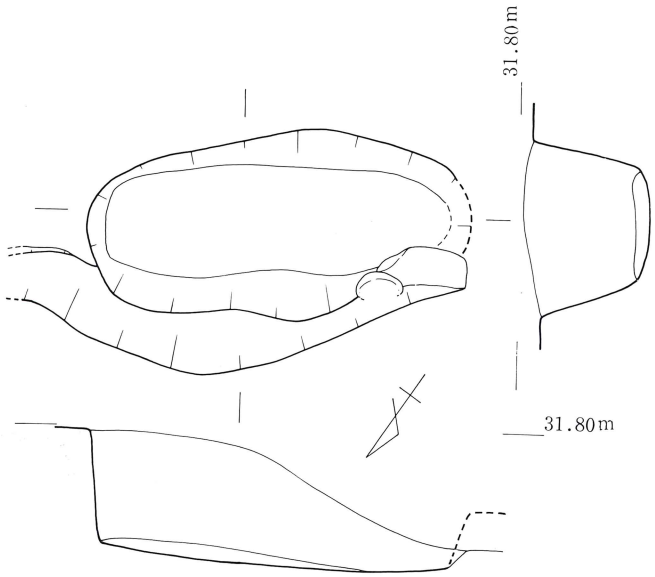
(単位：cm)

番号	器種	全長	頭部長(刀部)	刃幅	頸幅	刃部厚	頸厚	備考
5	鉄鏃	13.0	8.6	4.0	0.8	0.2	0.2	桜樹皮巻残存
6	同上	13.7	6.9	4.0	1.1	0.2	0.2	同上
7	同上	11.9以上	6.6	3.2	1.0	0.2	0.2	同上

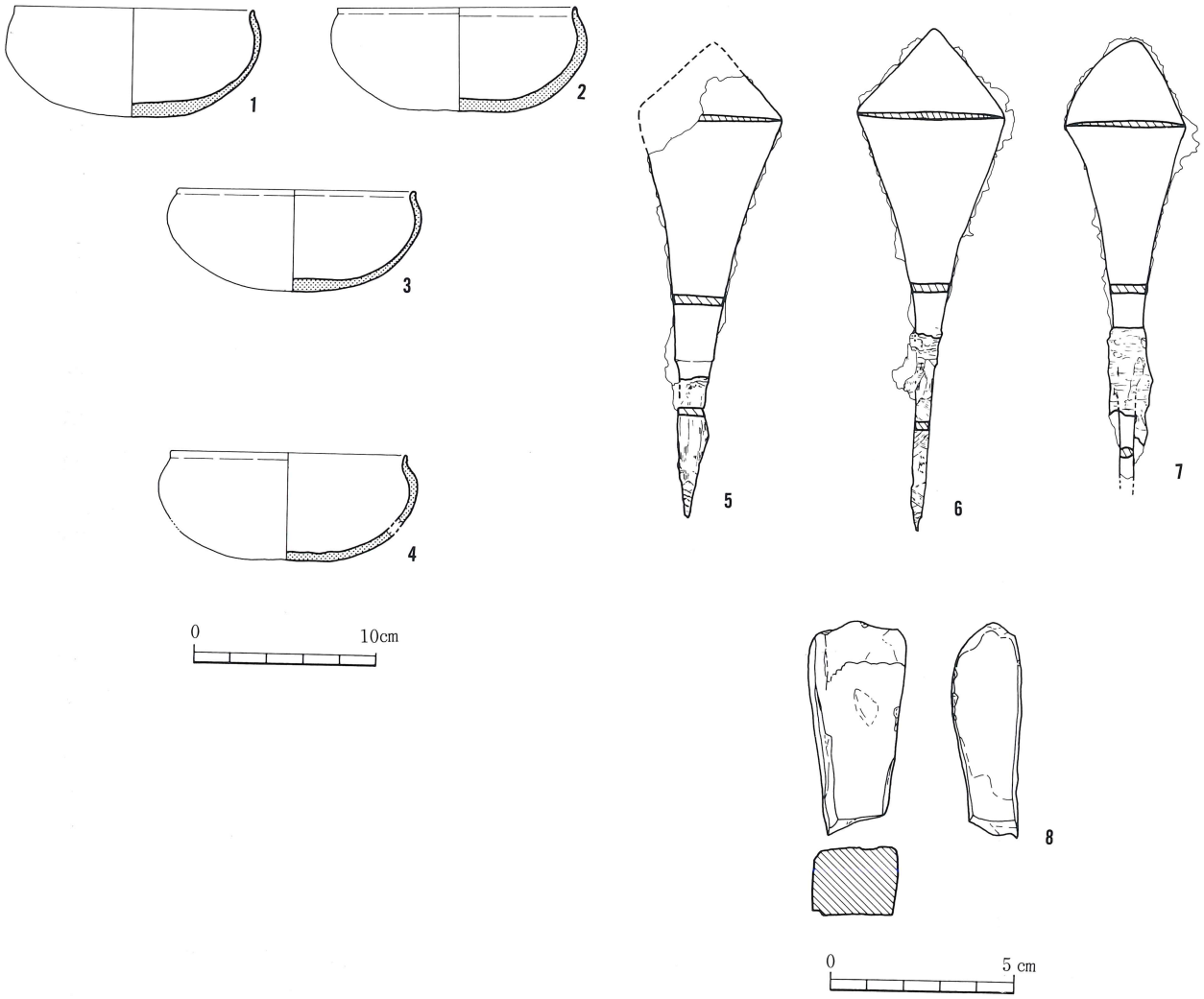
第50表　23号横穴墓出土石器観察表

(単位：cm)

番号	器種	全長	幅	厚さ	石質	備考
8	砥石	5.9＋α	2.3	1.8	頁岩	四面ともに研磨している



第137図　23号横穴墓前庭部1号土壙墓平・断面図



第138図　23号横穴墓出土遺物実測図

24号横穴墓

1．立地、調査前の状況

24号横穴墓は北支群のほぼ中央、22号横穴墓の南６ｍの所に位置し、22号横穴墓同様南西方向に開口する横穴墓である。斜面の上方、標高32.3ｍ付近に設けられている。全長19.1ｍを測り、主軸をＮ－84.5°－Ｅにとる。保存状態は良好で、墓道は完全に埋没しており地表での確認はできなかった。調査は墓道プランの確認、同埋土の検討、閉塞部、玄室内の調査等を行った。なお、前庭部および玄室は県道下に埋没しており、調査は昭和56年に墓道を、昭和60年に前庭部～玄室を行った。

2．規模、構造

1）墓道、羨門部

a）規模、構造　墓道は全長15.5ｍ、幅は入口で底面幅1.0ｍ、羨門部で底面幅2.1ｍを測る。墓道は入口から約６ｍの所からゆるく北側に湾曲しているのが特徴で、入口は23号横穴墓前庭部に接近している。また近年の造成や県道開設の為、墓道側壁、羨門、玄室天井は大きく削平されている。墓道床面は凹凸を持ちながらも約10～15°の緩やかな傾斜で羨門に向って上がる。墓道入口から約11ｍ羨門方向へ寄った位置より墓道幅が広がり羨門付近が最も広くなる逆台形を呈する前庭部を形成している。この部分の中央には玄室からの排水溝が羨門から1.0ｍ程続いている。また、この溝の両側には長さ0.8～1.0ｍ、幅0.7～1.0ｍ、高さ0.1ｍ程の基壇が削り出されている。排水溝には安山岩製の板石を２個蓋石として使用している。

羨門部は天井、側壁とも崩壊が著しく、復元は困難であり、幅は床面で0.62ｍを測る。

閉塞施設は最終埋葬時の状況を示しており安山岩製板石３枚と人頭大の河原円礫とを乱雑に積んでいる。

b）墓道内埋土　墓道内の堆積土壌はその性状から、比較的明瞭な層区分が可能であり全体で６層群20層に分層できる。以下堆積順に説明する。

第１層群（Ⅷ層）は、溝蓋石上面から入口方向約８ｍ付近までレンズ状に堆積し、最も厚い所で60㎝を測る。羨門付近は上層によってカットされている。基盤層の二次堆積物で上層とは区分が明瞭である。遺物Ａ群（第141図１～５）は本層中に含まれる。初葬時埋土と推定される。

第２層群（Ⅶ層）は、閉塞石下面から入口方向約11ｍ付近までレンズ状に堆積し、最も厚い所で50㎝を測る。上層とは明瞭に区分でき、羨門付近は上層にカットされている。基盤層の二次堆積物であるが、やや風化作用を受けた感がある。本層中に遺物Ｂ群（第141図20～第142図26）が含まれる。第１次追葬埋土と推定される。

第３層群（Ⅴ・Ⅵ層）は、閉塞付近より入口方向へ0.6ｍから９ｍの範囲にレンズ状に堆積し、最も厚い所で30㎝を測る。羨門付近は上層の閉塞埋土によって完全に削平される。本層はさらに上下２層に区分される。(1)下層（Ⅵ層）は基盤層の二次堆積層で上層とは漸移的に変化する。(2)上層（Ⅴ層）は下層と性状はほぼ同じであるが若干風化しており軟質である。第２次追葬埋土と推定される。

第４層群（Ⅰ～Ⅳ層）は閉塞から入口方向４ｍの範囲にＵ字状に堆積し最も厚い所で45㎝を測る。上面は全て近年の造成でカットされており、特に羨門付近は上層の攪乱土によって大きく抉られている。本層はさらに４層に区分される。(1)基盤層が風化した層で上層とは漸移的に変化する（Ⅳ層）。(2)クロボク質の粘質土（Ⅲ層）。(3)は(1)とほぼ同類の層で(1)よりも風化の進んだ層（Ⅱ層）。(4)クロボク質の風化土（Ⅰ層）である。本層群中に遺物Ｃ群（第141図８～19）が含まれるが、Ｃ群は一部第３層群上面からの出土も認められる。第３次追葬埋土と推定される。

第５層群（Ⅸ層）は、県道開設時の埋土と推定される。粘質の固い土層である。

第６層群（Ⅹ～ⅩⅣ層）は墓道入口付近に約２ｍの範囲で堆積した土層で、基盤層の二次堆積土とクロボク質土が互層をなしており、本層群をカットする形で24号横穴墓の墓道内埋土が形成されていることから24号横穴墓築造以前の堆積土である。本層群は23号横穴墓の墳丘土の可能性が高い。以上の土層観察から本横穴墓では最低

4回の埋葬が行われたと推定される。

2）　羨道、玄室

羨道は天井、側壁が削平されており旧状を大きく損なっている。このため高さは不明である。床面は長さ1.5m、幅0.65mを測り、ほぼ水平に玄室に続いている。

玄室は長さ2.62m、幅2.48mの略隅丸方形を呈し、床面の周壁および中央には幅約10cm、深さ約10cmの排水溝が設けられており、これは羨道中央へと続いている。床面はほぼ平坦であり、玄室全体に人頭大の河原石を敷きつめている。この敷石は中央の排水溝の上から左右に広げるように構築されている。天井はほとんど落盤しているため高さは不明である。天井形態は奥壁残存部からドーム状を呈すと考えられる。

3．遺物の出土状態

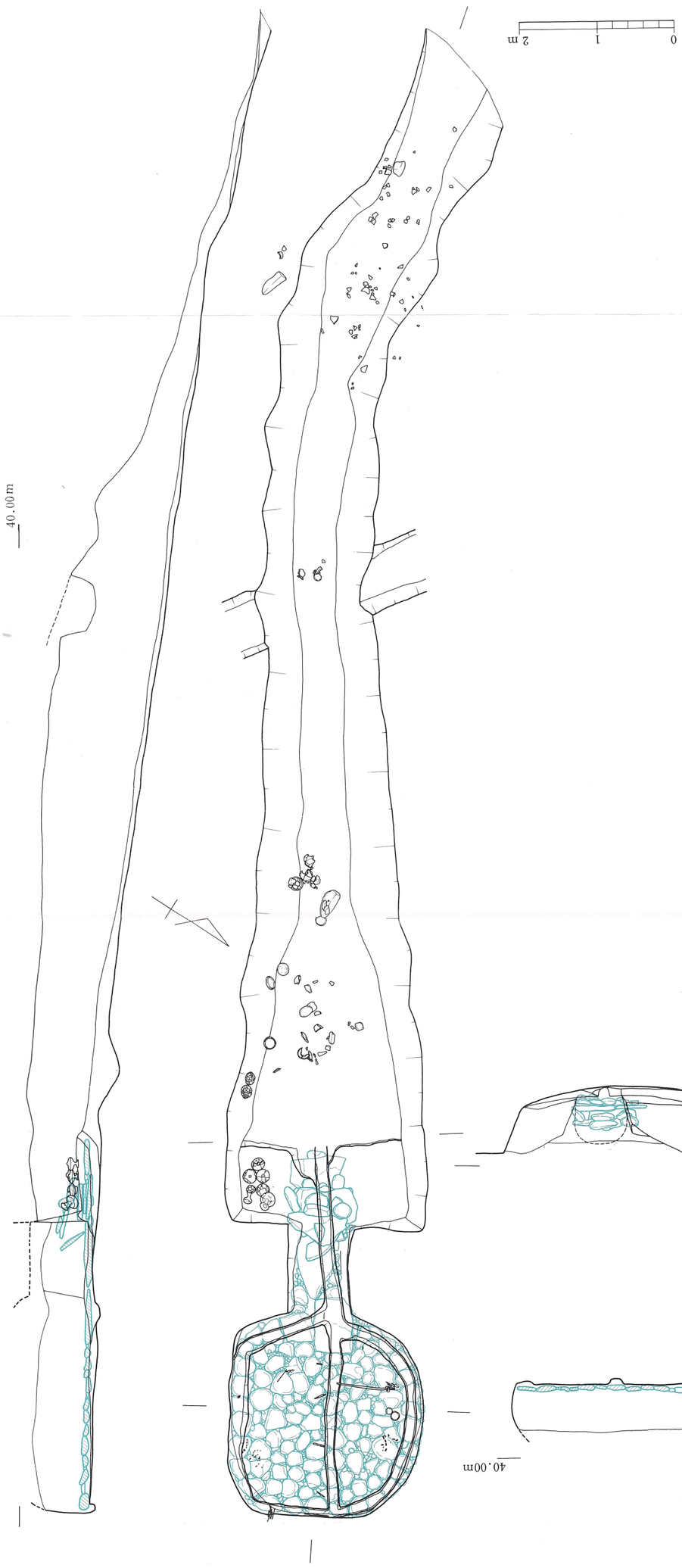
1）　玄室内

玄室内には造成による多量の土砂が流入していたが、清掃後に土器、鉄器、装身具類が検出された。まず、土器は玄室中央左側壁寄に須恵器坩蓋、長頸壺蓋（第142図33・34）が口縁部を上にして並んで出土した。この地点より奥壁方向へ0.7mの所で須恵器坩蓋（取り上げ後紛失）が口縁部を上にして出土した。鉄器は左裾壁と左側壁のコーナー付近で直刀1振（第143図56）と鉄鏃群4本（第143図43～46）が、中央排水溝付近のほぼ中央に刀子1本（第143図55）、同奥壁ぎわに刀子1本と小直刀（第143図56）が、奥壁と右側壁のコーナー付近で鉄鏃群（第142図37～42）が、中央やや玄門寄りに鉄鏃、鉋、馬具類がそれぞれ検出されたが、この中で出土状態の特徴的なものは、左側壁コーナー付近で出土した直刀と鉄鏃群が刀先を逆方向に向けている点、奥壁コーナー付近で出土した鉄鏃が壁に立てかけていた点などが指摘できる。玉類は次の3地点で集中分布が認められた。まず右裾壁と右側壁のコーナー付近にガラス玉類が、左側壁ぎわ中央よりやや奥壁方向に管玉、ガラス玉類が、右側壁ぎわ奥壁寄に勾玉、管玉、ガラス玉類が出土した。なお、人骨片は中央奥壁寄に下肢骨片が出土したが、粉状になっており特徴は不明である。

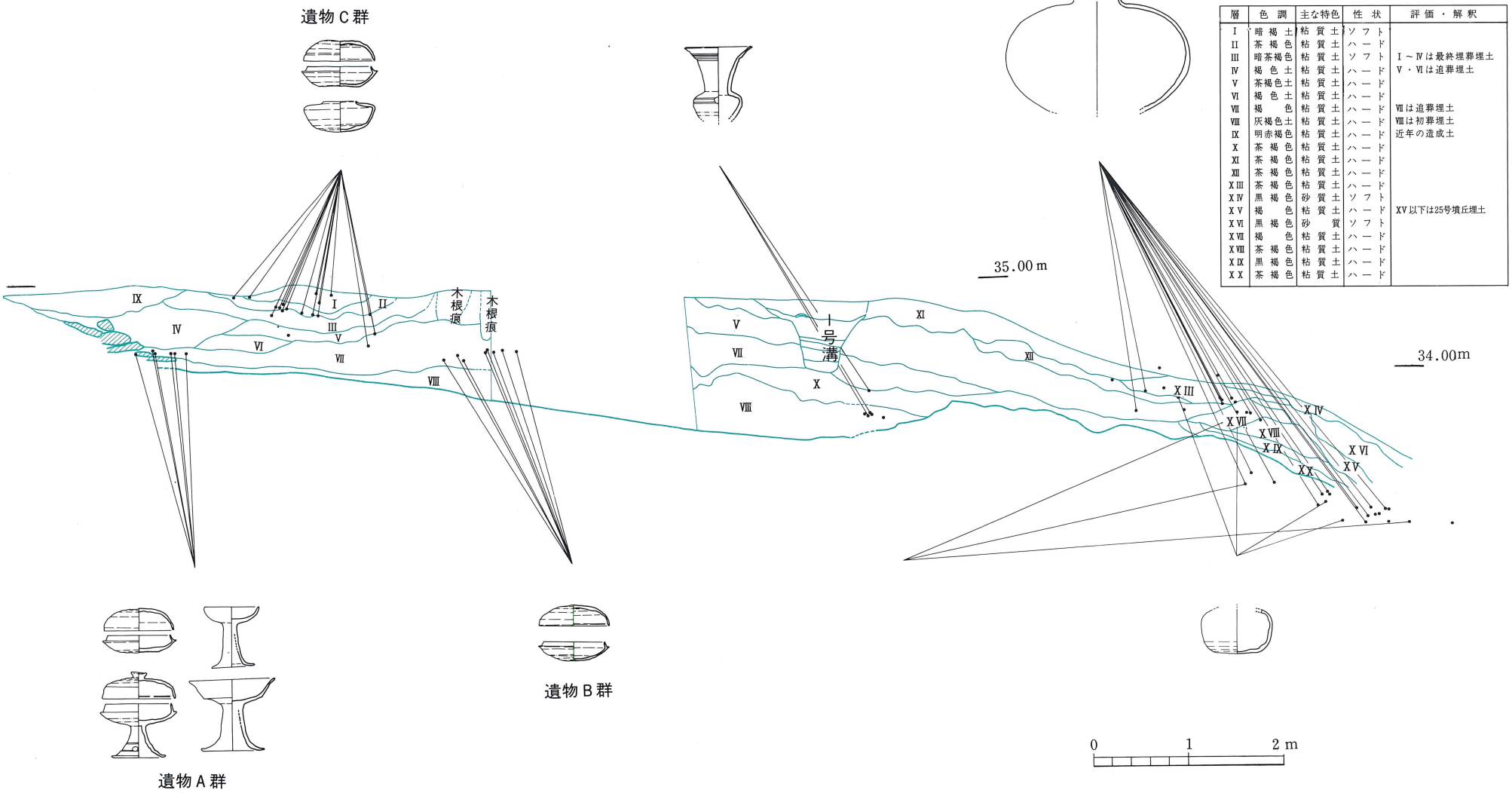
2）墓道内

墓道内の遺物の出土層位については、墓道内埋土の項で示した。ここでは遺物の出土状態について述べる。

羨門付近の右コーナーの基壇上に遺物A群（第141図12）が配列埋置の状態で検出された。これは須恵器有蓋高坏3個体、坏蓋身1個体、土師器高坏で構成されている。有蓋高坏は三個隣接して正置されその横に坏蓋身が正置されている。その上と右に土師器高坏が倒立して並べられ、右側の高坏の玄室寄に土師器高坏が横向に置かれていた。なお、玄室寄左側の有蓋高坏の中からハマグリ4個体がとじたままの状態で出土した。遺物B群（第141図20～第142図26）は墓道と前庭部の境付近で破砕された状態で出土した。坏蓋・身類で構成され、人頭大の河原石を1個上に置いている。遺物C群（第141図8～19）は前庭部中央の右寄りに坏蓋身3個体＋短頸壺＋坏蓋＋坏身の配列埋置と周辺に坏蓋・身、短頸壺が破砕散布された状態で出土した。坏蓋・身2個体は前庭部右肩ぎわに上下に並立して、それより入口方向へ1mの地点に坏蓋・身が坏身を上にして重ね合わせた状態でその周辺に坏蓋を倒立させ坏身は正置させている。短頸壺は中央付近に正置させ、その周辺に人頭大の河原石1個や坏類、短頸壺の破砕散布が見られた。また、墓道入口付近で横瓶、平瓶類の破砕散布が認められる。これらの遺物は22号横穴墓のⅠ層出土のものと接合関係を示している。（村上久和）



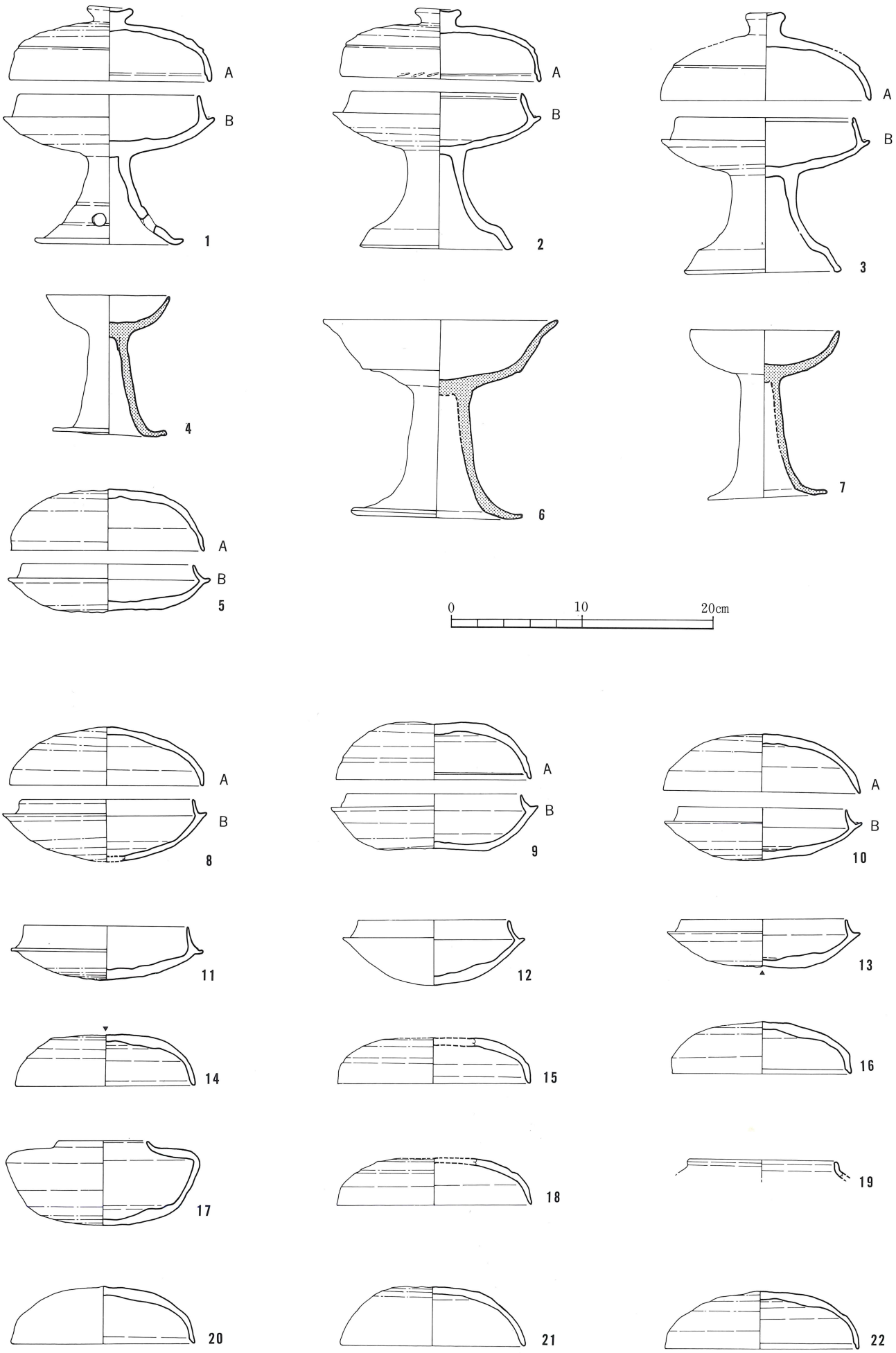
第139図　24号横穴墓平・断面図



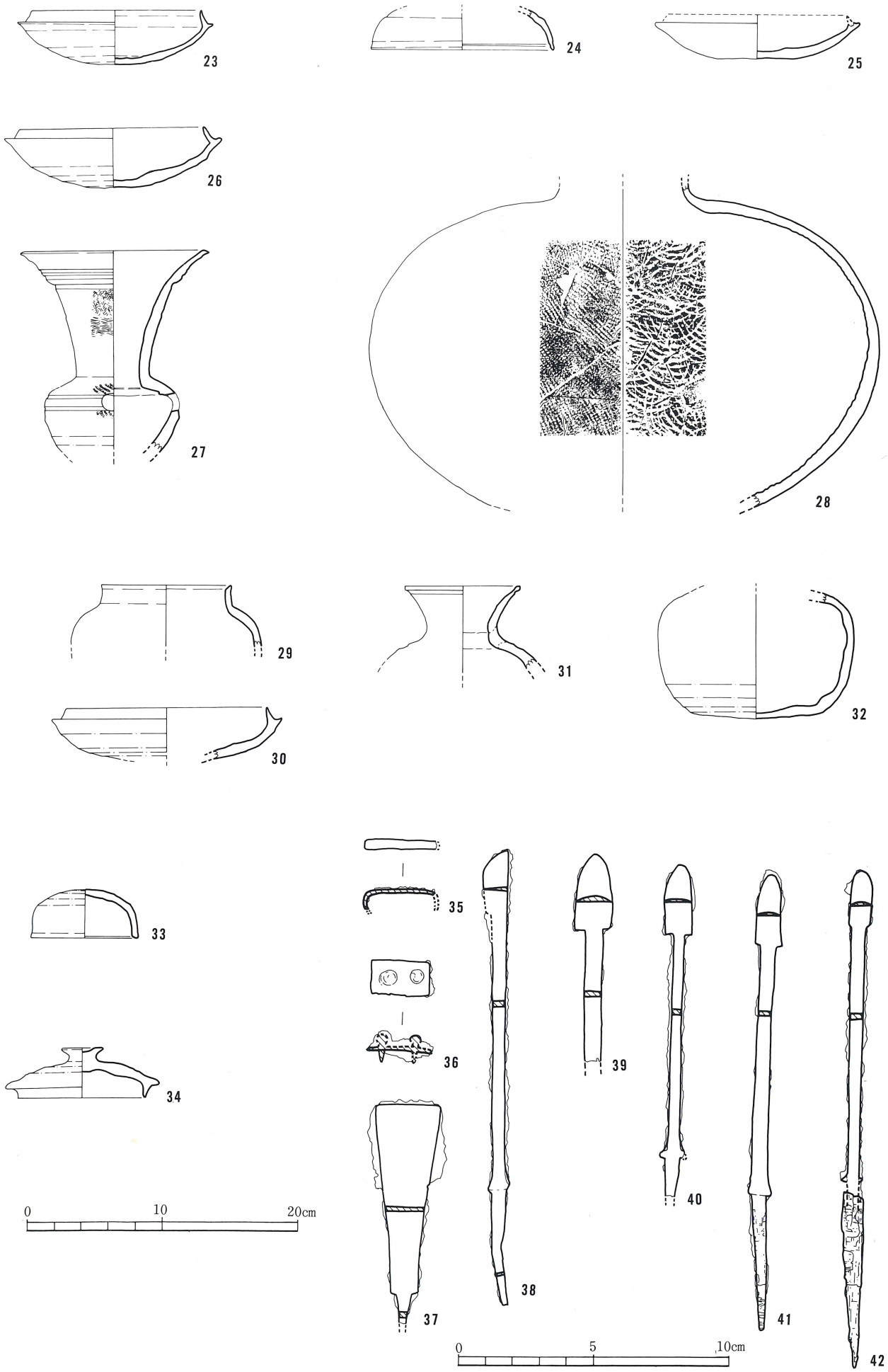
24号横穴墓土層観察表

層	色調	主な特色	性状	評価・解釈
Ⅰ	暗褐土	粘質土	ソフト	
Ⅱ	茶褐色	粘質土	ハード	
Ⅲ	暗茶褐色	粘質土	ソフト	Ⅰ～Ⅳは最終埋葬埋土
Ⅳ	褐色土	粘質土	ハード	Ⅴ・Ⅵは追葬埋土
Ⅴ	茶褐色土	粘質土	ハード	
Ⅵ	褐色土	粘質土	ハード	
Ⅶ	褐色	粘質土	ハード	Ⅶは追葬埋土
Ⅷ	灰褐色土	粘質土	ハード	Ⅷは初葬埋土
Ⅸ	明赤褐色	粘質土	ハード	近年の造成土
Ⅹ	茶褐色	粘質土	ハード	
Ⅺ	茶褐色	粘質土	ハード	
Ⅻ	茶褐色	粘質土	ハード	
XIII	茶褐色	粘質土	ハード	
XIV	黒褐色	砂質土	ソフト	
XV	褐色	粘質土	ハード	XV以下は25号墳丘埋土
XVI	黒褐色	砂質	ソフト	
XVII	褐色	粘質土	ハード	
XVIII	茶褐色	粘質土	ハード	
XIX	黒褐色	粘質土	ハード	
XX	茶褐色	粘質土	ハード	

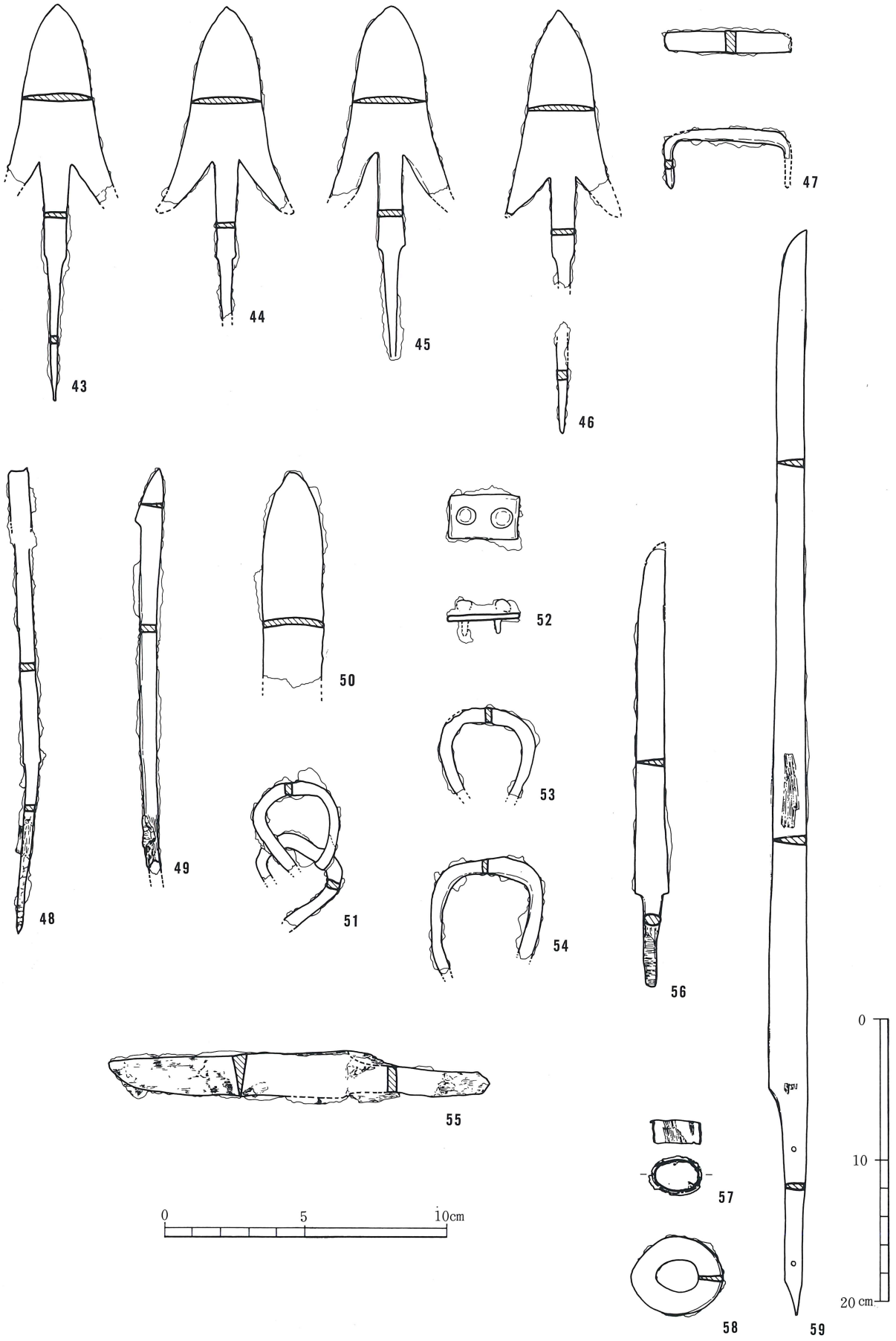
第140図　24号横穴墓縦断土層及び遺物垂直分布図



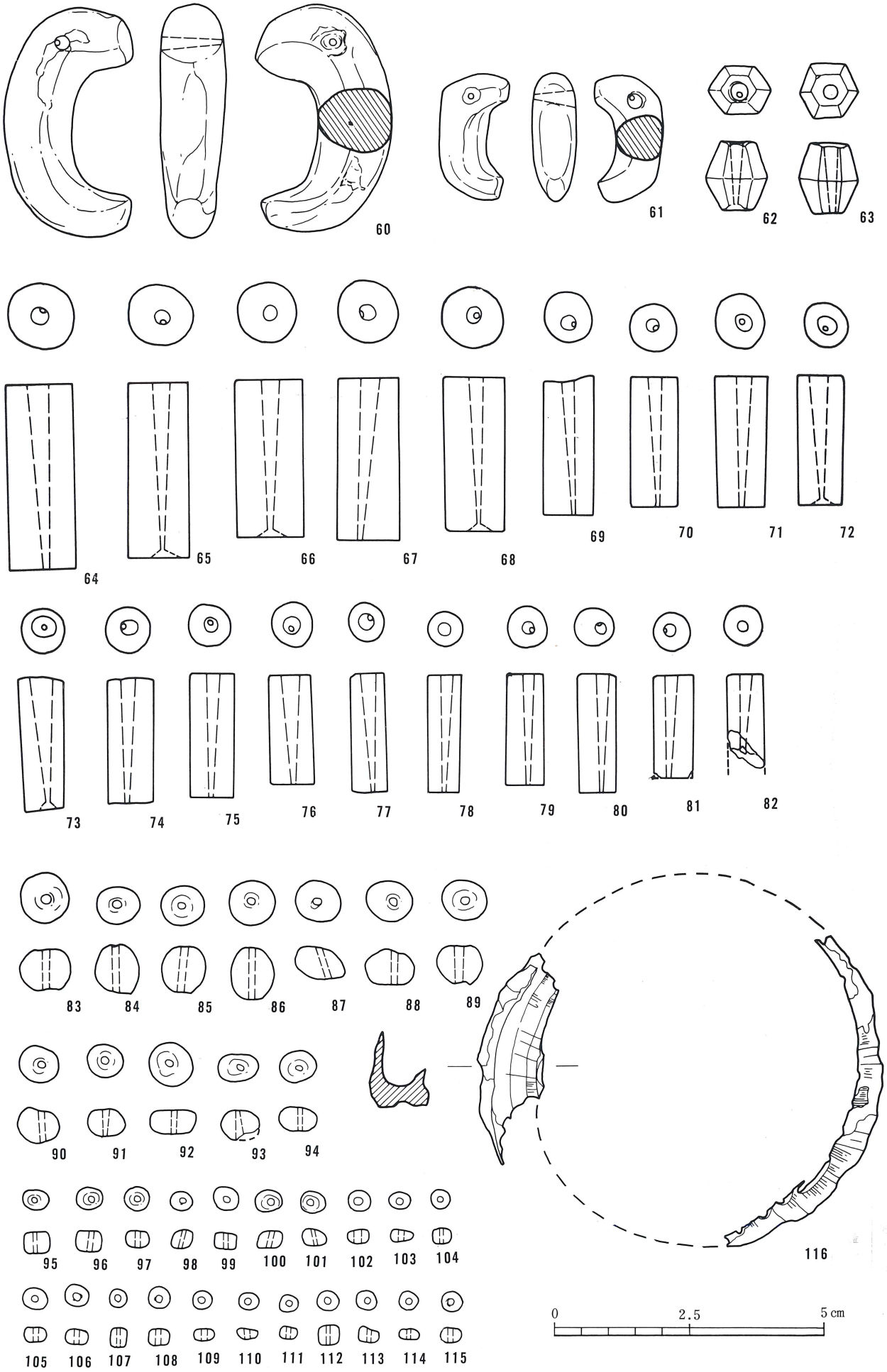
第141図　24号横穴墓出土遺物実測図(1)



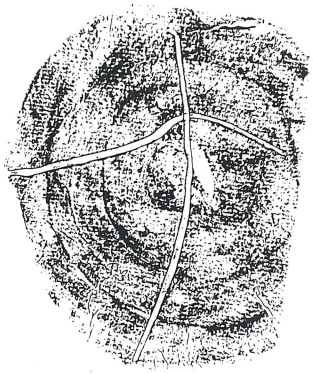
第142図　24号横穴墓出土遺物実測図(2)



第143図　24号横穴墓出土遺物実測図(3)

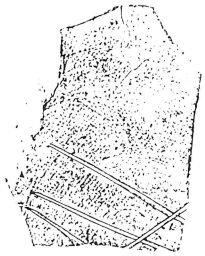


第144図　24号横穴墓出土遺物実測図(4)

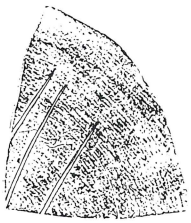


141図－14

141図－13



坏外面



坏外面

第145図　24号横穴墓出土土器ヘラ記号

第51表　24号横穴墓出土土器観察表

（単位：cm）

番号	器種	法量 ・口径 ・器高 ・胴部最大径	形態の特色	技法の特色 内面	外面	色調	胎土	焼成	備考	ヘラ記号の有無
1－A	坏蓋	・15 ・5.6 ・－	口縁部はわずかに外反しながらのび、端部は内傾する段を有す。外面にはややはっきりした稜が認められる。外面頂部にツマミを有す。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	青灰色	精緻	良好	1～7は一括遺物	
1－B	有蓋高坏	・13.7 ・11.3 ・－	坏部のたちあがりは内傾してのび、端部は丸い。受部は上外方にのび、端部は丸い。脚部は下外方にのび、端部付近でわずかに屈曲し丸い。外面に穿孔をはさむように、2本の沈線あり。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	灰色 灰白色	石英、黒色砂粒を含む 精緻	不良		
2－A	坏蓋	・15 ・5.3 ・－	口縁部はわずかに外反しながらのび、端部は内傾する段を有す。外面にはややはっきりした稜がみとめられる。外面頂部にツマミを有す。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	青灰色	精緻	良好		
2－B	有蓋高坏	・12.8 ・11.8 ・－	坏部のたちあがりは内傾してのび、端部は内傾する段を有す。受部は上外方にのび、端部は丸い。脚部は下外方にのび端部付近で、外湾しながらのび、端部は面をなす。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	青灰色	石英の微砂粒を含む 精緻	良好 堅緻		
3－A	坏蓋	・15.8 ・6.6 ・－	口縁部は外反しながらのび、端部は丸い。外面にはうすい稜がみられる。外面頂部にツマミがつく。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ	灰色 白灰色	0.5～1㎜の白色砂粒 角閃石 その他の砂粒を含む	不良		
3－B	有蓋高坏	・13.4 ・11.8 ・－	坏部のたちあがりは内傾してのび、端部は内傾する段を有す。受部は上外方にのび端部は丸い。脚部は下外方にのび端部付近でいったん外方へ屈曲し端部は面をなす。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	青灰色	精緻 0.5㎜前後の白色砂粒を含む	良好		

番号	器種	法量 ・口径 ・器高 ・胴部最大径	形態の特色	技法の特色 内面	外面	色調	胎土	焼成	備考	ヘラ記号の有無
4	高坏	・9.3 ・10.5 ・—	坏部の口縁部は外反しながらのび、端部は丸い。脚部は下外方にのび、端部は面をなす。	ナデ	ナデ	明褐色	雲母、角閃石粒を含むが精緻	良好・堅緻	土師器	
5—A	坏蓋	・14.5 ・4.6 ・—	口縁部はほぼ直下にのび、端部は丸い。天井部は高く丸みをおびる。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	青灰色	0.5～1.5mmの白色砂粒を少量含む	良好		
5—B	坏身	・12.8 ・3.6 ・—	たちあがりは内傾してのび、端部は丸い。受部はほぼ水平にのび、端部は丸い。 底部は浅く平らである。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	青灰色	0.5～1mmの白色砂粒を少量含む	良好		
6	高坏	・17.8 ・15 ・—	坏部の口縁部は外反しながらのび、端部は丸い。脚部は、下外方にのび、端部は丸い。	ナデ	ナデ	赤橙色	0.5～1mmの白色砂粒を含む	良好	土師器	
7	高坏	・11.2 ・12.7 ・—	坏部は内湾しながらのび、端部は丸い。脚部は下外方にのびる。	ナデ	ナデ	赤橙色	1～2.5mmの白色砂粒を含む	良好	土師器	
8—A	坏蓋	・14.6 ・4.5 ・—	口縁部は丸みをおびながら、直下に下り端部は丸い。天井部は高く丸みをおびる。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	青灰色	石英、黒色砂粒を含む	良好	8～10は一括遺物	
8—B	坏身	・13 ・4.7 ・—	たちあがりは内傾してのび、端部はわずかに肥厚しながら丸い。受部は上外方にのび、端部は丸い。	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	青灰色	石英、黒色砂粒を含む	良好		
9—A	坏蓋	・14.8 ・4.3 ・—	口縁部は外反しながらのび、端部は丸い。内面にわずかに沈線をなす。外面はわずかに沈線状にくぼむ。天井部はやや平らである。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	青灰色	精緻	良好		
9—B	坏身	・13.2 ・4.2 ・—	たちあがりは内傾してのび、端部は丸い。受部は上外方にのび、端部は丸い。底部はやや深く平らである。	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	青灰色	石英、長石粒、わずかに黒色砂粒を含む	良好		
10—A	坏蓋	・15 ・4.4 ・—	口縁部は外反しながらのび、端部は細くなり丸い。天井部はやや高く丸みをおびる。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	淡黄褐色	石英、黒色砂粒を含む	不良		
10—B	坏身	・12.8 ・4 ・—	たちあがりは内傾してのび、端部は丸い。受部は上外方にのび、端部は丸い。底部はやや浅く平らである。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	青灰色	石英、黒色砂粒を含む	良好		
11	坏身	・12.5 ・4.1 ・—	たちあがりは内傾してのび、端部は細く丸い。受部はほぼ水平にのび丸い。底部は浅く平らである。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	青灰色 灰色	石英粒を多量に含む	良好		
12	坏身	・11.4 ・5 ・—	たちあがりは内傾してのび、端部は丸い。受部はほぼ水平にのび、端部は丸い。底部は深く丸い。	磨滅のため調整不明	調整不明	灰白色	石英粒を含む	不良		

番号	器種	法量 ・口径 ・器高 ・胴部最大径	形態の特色	技法の特色 内面	外面	色調	胎土	焼成	備考	ヘラ記号の有無
13	坏身	・12.7 ・3.5 ・－	たちあがりは内傾してのび、端部は丸い。受部は上外方にのび、端部は丸い。底部はやや浅く平らである。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	青灰色	石英、長石粒を含む	良好		外面底部「×」
14	坏蓋	・13.5 ・3.9 ・－	口縁部は外反しながらのび、端部は丸く内面にわずかに線をなす。天井部はやや高く平らである。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	青灰色	長石、石英粒を含む	良好		外面天井部頂部「×」
15	坏蓋	・4＋α ・3.4＋α ・－	口縁部はほぼ直下にのび、端部は丸い。外面には稜がわずかにみとめられる。	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	青灰色	石英、長石粒を含む	良好	反転復元	
16	坏蓋	・13.5 ・4 ・－	口縁部はほぼ直下にのび、端部は内傾する段を有す。天井部は、やや低く平らである。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	灰褐色 青灰褐色	1～3㎜の砂粒を少量含む	良好 堅緻		
17	坩	・6.8 ・6.5 ・4.7	口頸部は短く内傾してのび、端部は丸い。胴部最大径は中央部より上方にある。底部は浅く平らである。	ナデ	ナデ 回転ヘラケズリ	青灰褐色 灰褐色	1～3㎜の砂粒を少量含む	良好 堅緻		
18	坏蓋	・14.8＋α ・3.6＋α ・－	口縁部はわずかに外反しながらのび、端部はややとがりぎみで丸い。	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	青灰色	石英、長石粒を含む	良好	反転復元	
19	短頸壷	・11.2 ・－ ・－	口頸部は短く直立してのび、端部は肥厚し丸い。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色	精緻	良好		
20	坏蓋	・13.5 ・4.4 ・－	口縁部はほぼ直下にのび、端部は丸い。天井部はやや高く丸みをおびる。	回転ナデ	回転ヘラケズリ	灰白色	精緻	不良		
21	坏蓋	・14 ・4.4 ・－	口縁部は外反しながらのび、端部は丸い。天井部は高くやや平らである。	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	青灰色	石英、長石粒を含む	良好 （やや軟質）		
22	坏蓋	・14.8 ・4.4 ・－	口縁部は外反しながらほぼ直下にのび、端部内面には、沈線をなす。天井部は高く丸みをおびる。	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	淡黄褐色	長石、黒色砂粒を含む	良好 （やや軟質）		
23	坏身	・12.7 ・4 ・－	たちあがりは内傾してのび、端部は丸い。受部はほぼ水平にのび、端部は丸い。底部はやや深く平らである。	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ後ナデ	青灰色	石英、黒色砂粒を含む	良好		
24	坏蓋	・13.6 ・3＋α ・－	口縁部は外反しながらのび、端部は内面に沈線をなす。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色	精緻	良好	反転復元	
25	坏身	・15.1 ・2.7＋α ・－	受部は上外方にのび、端部は丸い。底部は浅く平らである。	磨滅しているため調整不明	磨滅しているため調整不明	灰白色		不良	反転復元	
26	坏身	・13.7 ・4.4 ・－	たちあがりは内傾してのび、端部は丸い。受部はほぼ水平にのび、端部は丸い。底部はやや浅く丸みをおびる。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	灰色 灰黒色	黒色砂粒を含む	良好 堅緻		

番号	器種	法量 ・口径 ・器高 ・胴部最大径	形態の特色	技法の特色 内面	外面	色調	胎土	焼成	備考	ヘラ記号の有無
27	瓶	・14＋α ・14.8＋α ・－	口頸部は上外方にのび、口縁部に行くにつれてさらに外反し、外面に３本の沈線をなす。胴部は丸みをおび外面に沈線２本をなす。	回転ナデ ハケ目	回転ナデ 櫛描波状文 櫛歯文 回転ヘラケズリ	灰色	石英粒を多量に含む	良好 堅緻		
28	横瓶	・口縁部欠損 ・24＋α ・37.4	胴部はだ円形を呈す。	同心円タタキ	タタキを施し後カキ目	淡青灰色	精緻	やや良好 堅緻	22号１、４、５、10、68他と接合	
29	短頸壷	・9.5 ・4.4＋α ・－	口頸部は短く直立してのび、端部は内傾する段を有す。	回転ナデ	回転ナデ	暗青灰色	石英粒を含む 精緻	良好 堅緻		
30	坏身	・14.8 ・3.6＋α ・－	たちあがりは内傾してのび、端部はとがりぎみ。受部は上外方にのび、端部は丸い。	回転ナデ	回転ヘラケズリ	青灰色 灰色	石英粒 黒色砂粒を含む	良好 堅緻		
31	壷	・8.5 ・－ ・－	口頸部は外反しながらのび、端部は肥厚し段をなす。	回転ナデ	回転ナデ 板ナデ	灰色 青黒色	石英粒を含む	良好 堅緻		
32	平瓶	・－ ・9.4＋α ・14.6	胴部はだ円形を呈し、底部は平ら。	回転ナデ ユビナデ	回転ナデ	青灰色	石英粒を含む	良好 堅緻		
33	坩蓋	・8 ・3.6 ・－	口縁部はほぼ直下にのび、端部は面をなす。天井部は高く丸みをおびる。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	暗青灰色	１～５㎜大の砂粒を含む	良好 堅緻		
34	長頸壷蓋	・9.3 ・3.7 ・－	たちあがりは内傾してのび、端部は丸い。受部は、ほぼ水平にのび丸い。天井部はやや高く平ら。外面頂部にツマミがつく。	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	暗青灰色	石英粒を少量含む	良好 堅緻		

第52表　24号横穴墓出土鉄器観察表

（単位：cm）

番号	器種	全長	頭部長（刀部）	刃幅	頸幅	刃部厚	頸厚	備考
35	馬具							責金具
36	同上							帯留金具
37	鉄鏃	8.1以上	7.0	2.4	0.5	0.2	0.25	
38	同上	16.9	2.4	0.9	0.5	0.2	0.25	桜樹皮巻き残存
39	同上	7.1	2.3	2.3	0.6	0.3	0.2	
40	同上	12.3	2.6	1.0	0.4	0.2	0.25	
41	同上	16.9	2.6	0.8	0.5	0.2	0.2	
42	同上	18.4	2.0	0.8	0.5	0.2	0.3	桜樹皮巻き残存
43	同上	14.0	7.0以上	3.3	0.8	0.3	0.2	
44	同上	11.0以上	7.3	3.3	0.7	0.25	0.2	
45	同上	12.5以上	6.6以上	3.3	0.9	0.2	0.25	
46	同上	15.0以上	7.3以上	3.3	0.8	0.2	0.2	

番　号	器　　種	全　長	頭部長（刀部）	刃　幅	頸　幅	刃部厚	頸　厚	備　　考
47	馬具							責金具
48	鉄鏃	16.4	2.6	0.7	0.5	不明	0.25	
49	同上	14.2以上	1.8	1.0	0.55	0.15	0.25	
50	鉋	7.5以上	7.5以上	2.1		0.2		
51	馬具							鎖金具
52	同上							帯留金具
53	同上							鎖金具
54	同上							同上
55	刀子	13.5	8.3	1.4	0.9	0.5	0.3	鹿角製柄残存、刃部布（木綿）巻き残存
56	直刀	77.0		2.0				
57	口金物							
58	鐔							
59	直刀	31.0以上		2.0				

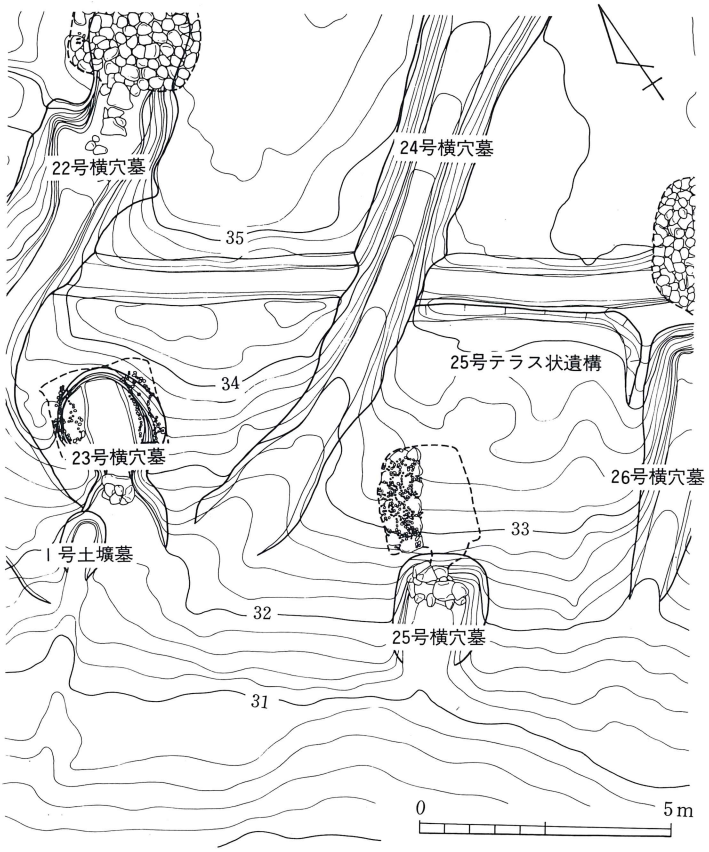
第53表　24号横穴墓出土装身具計測表

（単位：mm，g）

番　号	種　類	材　質	色　調	長　径	短　径	孔　径	重　量（g）	備　　考
60	勾玉	メノウ	黄土	43	13.5	3～1	14.5	片面穿孔
61	〃	水晶	透明	23	9	〃	3.6	〃
62	切子玉	〃	〃	13	11.5	2.5～1	2.2	〃
63	〃	碧玉	暗緑	〃	〃	〃	2.05	〃
64	管玉	〃	〃	34.5	12.5	4～1.5	11.4	〃
65	〃	〃	〃	32.5	11	3～1	9.5	〃
66	〃	〃	〃	29	12.5	3.5～1	9.25	〃
67	〃	〃	〃	30	12	〃	9.65	〃
68	〃	〃	〃	28.5	11.5	3～1	9.3	〃
69	〃	〃	〃	26	9.5	2.5～0.5	5.4	〃
70	〃	〃	〃	24	9	2.5～1	4.05	〃
71	〃	〃	〃	24.5	10	3～1	5.9	〃
72	〃	〃	〃	24	9	3.5～1	3.55	〃
73	〃	〃	〃	24.5	8.5	4～1	3.85	〃
74	〃	〃	〃	23	8.5	2.5～1	3.5	〃
75	〃	〃	〃	〃	8	〃	3.45	〃
76	〃	〃	〃	20	〃	3～1	3.3	〃
77	〃	〃	〃	22	6.5	〃	2.7	〃
78	〃	〃	〃	21.5	6	2.5～0.5	1.75	〃
79	〃	〃	〃	20.5	8	2～1	3.15	〃
80	〃	〃	〃	22	7	2.5～1	2.3	〃

番号	種類	材質	色調	長径	短径	孔径	重量(g)	備考
81	管玉	碧玉	暗玉	19	〃	2～1	2.15	片面穿孔
82	〃	〃	〃		〃	〃	1.9	〃
83	練玉	土	黒褐	9.5	8	1.5	0.7	
84	〃	〃	〃	9	〃	1	0.55	
85	〃	〃	〃	8.5	8.5	〃	0.65	
86	〃	〃	〃	10	8	〃	0.8	
87	〃	〃	〃	8	6	〃	0.45	
88	〃	〃	〃	9	7～6	〃	0.5	
89	〃	〃	〃	8.5	7	1.5	0.4	
90	〃	〃	〃	8	7～5	1	0.45	
91	〃	〃	〃	7	5	〃	0.3	
92	〃	〃	〃	9	4	〃	0.4	
93	〃	〃	〃	7	5.5	1.5	0.2	
94	〃	〃	〃	〃	4	1	〃	
95	小玉	ガラス	暗青緑	5	4	1	0.15	
96	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	
97	〃	〃	〃	4.5	3	〃	0.1	
98	〃	〃	〃	4	3	1	0.1	
99	〃	〃	青	〃	〃	〃	0.15	
100	〃	〃	緑	4.5	〃	〃	0.1	
101	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	
102	〃	〃	〃	4	2.5	1.5	〃	
103	〃	〃	〃	〃	2	1	〃	
104	〃	〃	〃	〃	3.5	〃	〃	
105	〃	〃	青緑	4.5	2.8	〃	〃	
106	〃	〃	〃	4	2.5	〃	〃	
107	〃	〃	〃	3.5	3.5	〃	〃	
108	〃	〃	〃	4	3	〃	〃	
109	〃	〃	〃	3.5	2	〃	〃	
110	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	
111	〃	〃	〃	3	〃	〃	〃	
112	〃	〃	黄	4	3.5	〃	0.15	
113	〃	〃	〃	〃	2.5	〃	0.1	
114	〃	〃	〃	3.5	2	〃	〃	
115	〃	〃	〃	4	3	〃	〃	

番号	器種	内径	断面径	重量	備考
116	具輪	59	14×11		イモ貝、横割り



第146図　25号横穴墓テラス平面図

25号横穴墓

1．立地、調査前の状況

25号横穴墓は横穴墓群のほぼ中央に位置する斜面にあり、南西方向に開口する。墳丘を有する横穴墓である。主軸方向はN－56.5°－Eを測る。標高は約32mである。埋葬主体部の全長は約4.9mを測り、その保存状態は良好であった。24号横穴墓の墓道検出作業中に斜面を整形して設けられた墳丘と周溝内の供献土器群が現れ、本横穴墓発見の契機となった。なお、前庭部には調査前には横穴墓の存在を示すような落ち込みなどは認められなかった。調査は墳丘と供献土器群の検出作業を進めつつ、順次前庭部プランの確認、同埋土の検討、閉塞施設の調査、撤去を行った。閉塞施設の除去後、埋葬人骨の遺存が確認されたため、九州大学医学部第2解剖学教室室員の参加協力の上で玄室内の調査を実施した。本横穴墓は調査概報「Ⅰ（1982）」で23号横穴墓としたものである。

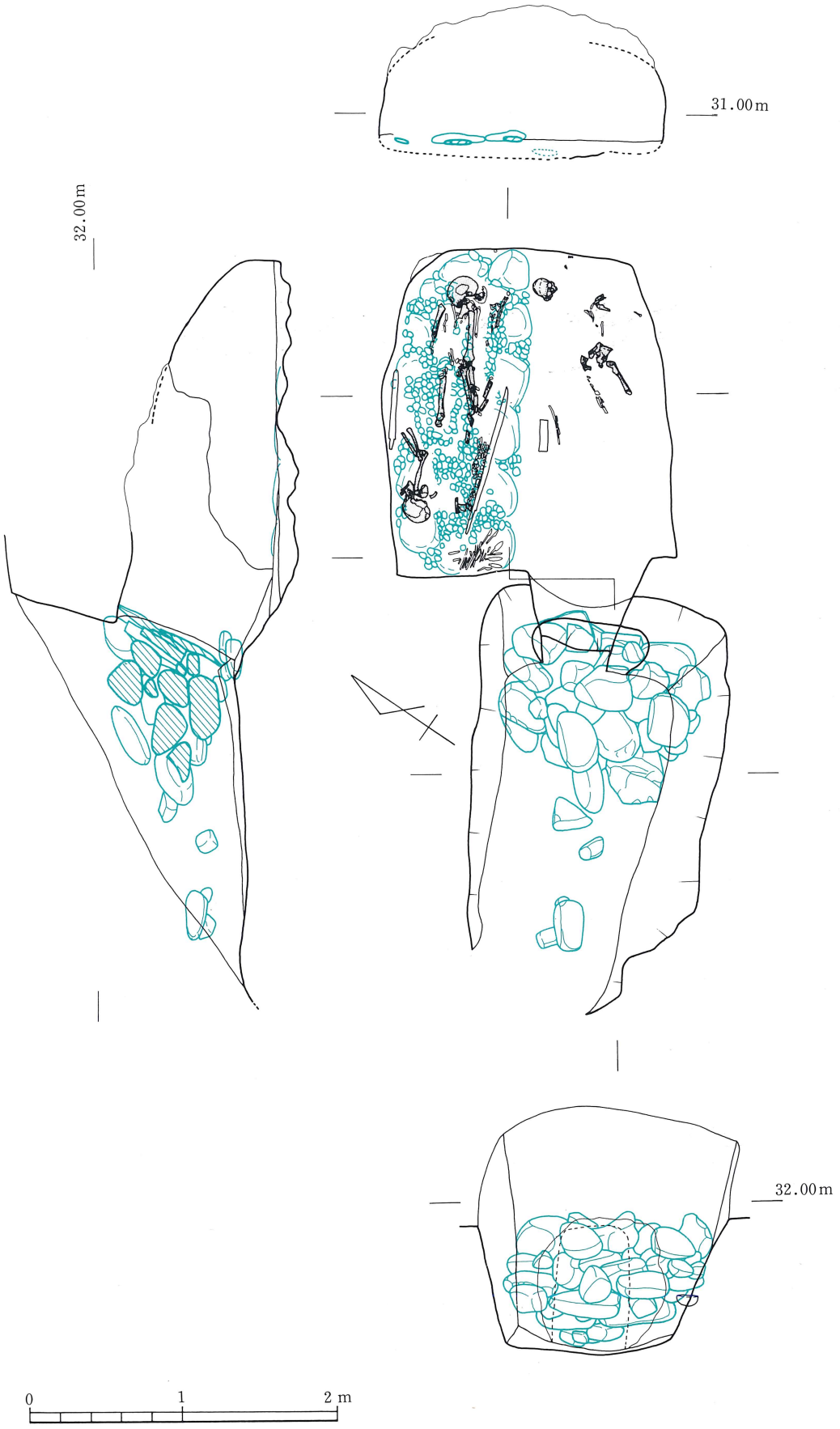
2．規模、構造

1）前庭部、羨門部

前庭部は長さ約2.7m、幅約1.6mであり羨門部に向って拡がる平面形を呈する。前庭部床面は中央部が緩くへこむがほぼ平坦である。床面の標高は約31.05mである。床面は羨門部直下から40°の傾斜で玄室内に下降する。側壁の傾斜は両者に差異があり、西側壁が75°、東側壁が65～70°を測る。羨門部壁の傾斜は約75°を測る。

羨門部は特に天井部分と側壁部分において崩壊が著しく、旧状を大きく損なっている。床面と天井部は玄室に向って下降し、羨門部壁の西側に偏って設けられている。閉塞状態などから復元すると、羨門部は高さ0.7m、幅0.8mと推定される。

閉塞施設は板石と河原円礫を使用し、入念に構築されている。なお、閉塞は最終埋葬時のものである。まず、前庭部の下部に最大30cmの埋土を行い閉塞の基底部を整えている。閉塞の配石は形状と使用部位によって次の4群に分けられる。第1群は幅、厚さ共10cm、長さ20cm以上の円礫を4個使用し、羨門部直下の斜面に据え、上面を平坦にしている。第2群は幅、長さ共に40cm以上、厚さ20cm以上の大石を用い、羨門部前面の埋土を掘削し据え置かれる。第3群は安山岩板石が5枚であり、第1、2群を根石として羨門部を覆う。第2群と板石の固定の際に直径20cm以下の円礫が数個使用されている。第4群は幅、長さ共に20cm以上の河原および地山包含円礫を主とする約30個からなり、第2群を根石とし、第1～3群の隙間を覆い積み上げられる。この間埋土は行われず、礫間は空間となっている。また、第4群設置の初期に閉塞石内に土師器埦⑽の埋置が認められた。これは第2群大石と前庭部右側壁との空間に埦を正置し、その上部に埦に接しないようにやや偏平な円礫を懸架し蓋石としている。なお、以上の閉塞によって前庭部は面積、堆積共におおよそ半分が埋まる。この配石の後に前庭部全体を覆うように埋土がなされている。埋土はやや汚れた地山の二次堆積物であり、床面直上の埋土とは明確に分離される。埋土中には長さ20cmに達する円礫も含まれており、本来の閉塞石が二次的に動かされたものと推定された。



第147図　25号横穴墓平・断面図

こうした状況から、本横穴墓では２回以上の埋葬が予測され、現状の閉塞やその中で検出された供献土器は最終埋葬時のものと判断された。

２）羨道、玄室

羨道は玄室に向って広がり、羨門部床面で幅0.46ｍ、玄門部床面で幅0.80ｍ、長さ0.61～0.72ｍを測る。床面は約40°の傾斜で玄室に向って下降し、玄室との接続部分で最終となる。天井部は崩落によって不明であるが30°前後の傾斜で下降すると推定される。玄室は妻入り、略方形を呈し、奥壁側の両隅が隅丸となる。長さ2.08ｍ、幅1.87ｍを測る。天井部は崩落のために明確ではないが、ドーム形で高さは約0.8ｍと推定される。床面は標高30.65～30.80ｍで凹凸が激しい。床面には10cm前後の埋土を玄室全面に行い標高30.80ｍで平坦にしている。玄室左側部分には左側壁に接して礫床を設けている。これはまず、直径20～30cm、厚さ10cm程度の円礫を22個、長さ2.05ｍ、幅約0.8ｍの範囲に敷き詰め、さらに石間の隙間に直径７cm以下の河原円礫を散布し、礫床としている。玄室内には天井の崩落部と閉塞施設の隙間からの流入土が西側に堆積していたが、礫床は埋没から免れていた。

３）墳丘

本横穴墓羨門壁頂部で標高約34ｍの斜面上に階段状の地山整形を行った後、横穴部奥壁上付近を中心として盛土を行い墳丘を構築している。地山整形と墳丘盛土の北側部分は24号横穴墓の墓道により削られ、西側は斜面で流出しているために不明確となっている。地山整形は隅丸方形であり南北方向に６ｍ以上、東西方向に４ｍ以上認められた。墳丘の平面形は一辺が約４ｍの方形であると推定される。地山整形は基盤層を掘り下げて行われ、中央付近には直径約50cmの落ち込みがみられた。その性格は不明である。墳丘は地山の二次堆積物を盛って構築されたもので最大0.7ｍの盛土が認められた。墳丘外表施設はない。残存する墳丘の最高所は標高34.2ｍを測る。羨門部上面からの見かけ上の墳丘は約1.5ｍになる。

墳丘と地山整形の壁面の間は溝状となり、黒色の腐植土と両斜面からの流入土が堆積していた。墳丘後方の腐植土は間層を挟んで上下２層に分離され、下部の腐植土中に供献土器群が検出された。（吉留秀敏）

３．遺物の出土状態

１）玄室内

a）埋葬人骨　羨門からみて左側に設けられた礫床上に２体、玄室右側に１体の、計３体が埋葬されていた。

１号人骨は、頭位を羨門の方へ向けた熟年男性で、落石のために頭や四肢骨が若干動いているが、ほぼ原位置を保っている。人骨の左に剣、右に直刀が、それぞれ切先を足元に向けて副葬されている。また、頭の右には１群の鉄鏃が束ねられたような状態で検出されたが、これもこの人骨に伴うと考えられる。

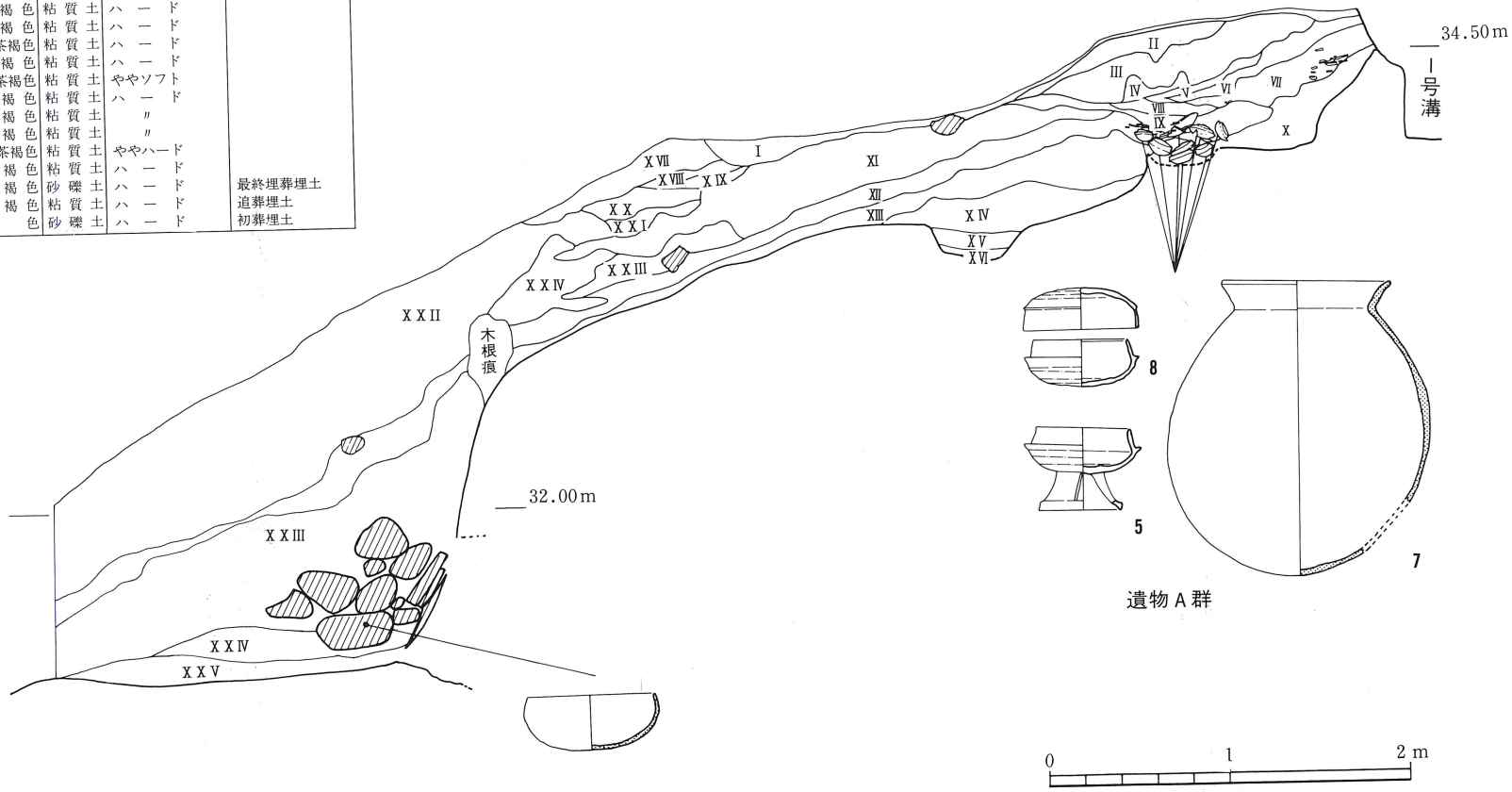
２号人骨は、奥壁に頭位を向けて、礫床上に葬られた若年の被葬者である。１号人骨の右半身と差し違えに重複しているが、左脛骨が１号の右前腕骨上に、右上腕骨・肩甲骨が１号左足根骨上、右鎖骨と第１・２頸椎が１号の右足根骨上にそれぞれのっていることから、１号から２号の順に埋葬されたと判断される。また、２号人骨が右半身上にのせられたにもかかわらず、１号人骨の右肘関節、右距腿関節および右足根骨の関節が外れていないことは、１号人骨埋葬後２号人骨追葬までの時間が短かかったことを示している。礫床にそって先端を羨門側へと向けた１群の鉄鏃は、この２号人骨に伴うと考えられる。

３号人骨は、玄室右側の成年女性で、玄室の長軸に斜交して葬られている。下顎骨・肋骨・頭蓋骨が原位置を動き、破損しているが、落石によるものと考えられ、他は埋葬されたままの状態と考えてよい。玄室中央の鉈は、方向からみて３号人骨に副葬されたものと考えられるが、鉄斧については定かではない。

以上の所見から、25号横穴墓における埋葬は、１号人骨が初葬で、それほど時間を経過せずに２号人骨が追葬され、最後に３号人骨が埋葬されたと推定される。（田中良之）

25号横穴墓土層観察表

層	色調	主な特色	性状	評価・解釈
I	茶褐色	粘質土	ハード	II以下は墳丘盛土
II	黄褐色	粘質土	〃	
III	明黄褐色土	粘質土	〃	
IV	明褐色	粘質土	〃	
V	黒褐色	粘質土	ソフト	
VI	黒茶褐色	粘質土	ややソフト	
VII	黒褐色	粘質土	〃	
VIII	茶褐色	粘質土	ハード	
IX	黒褐色	粘質土	ややソフト	
X	茶褐色	粘質土	ハードード	
XI	茶褐色	粘質土	ハードード	XIIは遺物A群含包
XII	黒色	粘質土	ソフトード	
XIII	茶褐色	粘質土	ハードード	
XIV	茶褐色	粘質土	ハードード	
XV	暗茶褐色	粘質土	ハードード	
XVI	茶褐色	粘質土	ハードード	
XVII	黒茶褐色	粘質土	ややソフトード	
XVIII	茶褐色	粘質土	ハード	
XIX	暗褐色	粘質土	〃	
XX	茶褐色	粘質土	〃	
XXI	暗茶褐色	粘質土	ややハードード	
XXII	黄褐色	粘質土	ハード	
XXIII	黄褐色	砂礫土	ハード	最終埋葬埋土
XXIV	赤褐色	粘質土	ハード	追葬埋土
XXV	黄色	砂礫土	ハード	初葬埋土



第148図　25号横穴墓縦断土層及び遺物垂直分布図

b）副葬品　1号人骨の左側の壁に沿って鉄剣1、右側に沿って鉄刀1振が切先を足方（東向き）に配置されていた。剣の柄部は左上腕部分に置き、刀の柄部は頭右側に置いている。また、頭位左上方に22本以上の鉄鏃があり、細根形の主体は先端を西方向に置き、柳葉形の4点と細根形の2点は先端を南～南東方向に向けている。2号人骨の南側礫床外には鉄鏃8本が先端を西向きに置かれている。玄室のほぼ中央、3号人骨の右足西側に鉄斧1が先端を羨門方向に、鉇が先端を奥壁に向けて置かれている。また、鉇の先端付近を中心として直径20cmの範囲に赤色顔料が分布していた。

2）前庭部内

前庭部閉塞石内に土師器が埋置状態で検出した。これは閉塞石のうち第4群設置の初期に閉塞石間の空間に土師器埦（第150図10）を埋置したものであり、第2群大石と前庭部右側壁との空間に埦を正置し、その上部に埦に接しないようにやや偏平な円礫を懸架し蓋石としている。

3）墳頂部内

墳丘後方の墳端と地山整形部分が接するあたりに一括埋置状態で須恵器と土師器の一群が検出された。出土層位は墳丘後方の第9層にあたる下部腐植土である。墳丘と地山整形面後方壁の間の低地部分に設けられた、地山を掘り込む長さ65cm、幅40cm、深さ約15cmの不整形の掘方内に検出された。掘方の立ち上がりは腐植土中にあり、この遺構の構築が腐植土形成の以前か以後のどちらに行われたかは明確でない。器種は須恵器蓋坏4、高坏1、土師器甕1からなり、他に長脚二段透し高坏の脚部1が出土しているが、明らかに時期が異なること、出土位置が24号横穴墓墓道に接する部分であることから混入したものと考えられる。配列は、まず掘方下部に蓋坏2の蓋と身を開いた状態で置き、その東側に高坏と甕を据え置いている。また掘方の北側に蓋坏2が蓋と身を開いた状態で点在しているが、本来は掘方上に下部と同様のありかたで配置してあったと推定される。（吉留秀敏）

4．25号横穴墓出土人骨の所見

成人2体（男性1体、女性1体）、小児1体、計3体の保存良好な人骨が得られている。

25―1号人骨（男性・成年～熟年）

〈保存部位〉

頭蓋骨：右前頭部から側頭部を欠くが、他の部位は残っている。残存歯を以下に示す。赤色顔料の付着がある。

M^3 M^2 M^1 P^2 P^1 ○ I^2 I^1	I^1 I^2 C P^1 P^2 M^1 × ／
M_3 M_2 M_1 P_2 P_1 C I_2 I_1	I_1 I_2 C P_1 P_2 M_1 M_2 M_3

○　歯槽開放　　×　歯槽閉鎖　　／　破損・不明

体部骨：上肢は左の方が保存が良く、左の上腕骨・橈骨はほぼ完形、尺骨も遠位端を欠く程度である。右は上腕骨・橈骨・尺骨ともに骨体部片が残存するだけである。下肢は左右大腿骨および左右脛骨の骨体部、右腓骨遠位部、足根骨少量。軀幹骨は椎骨片がわずかに検出されただけである。

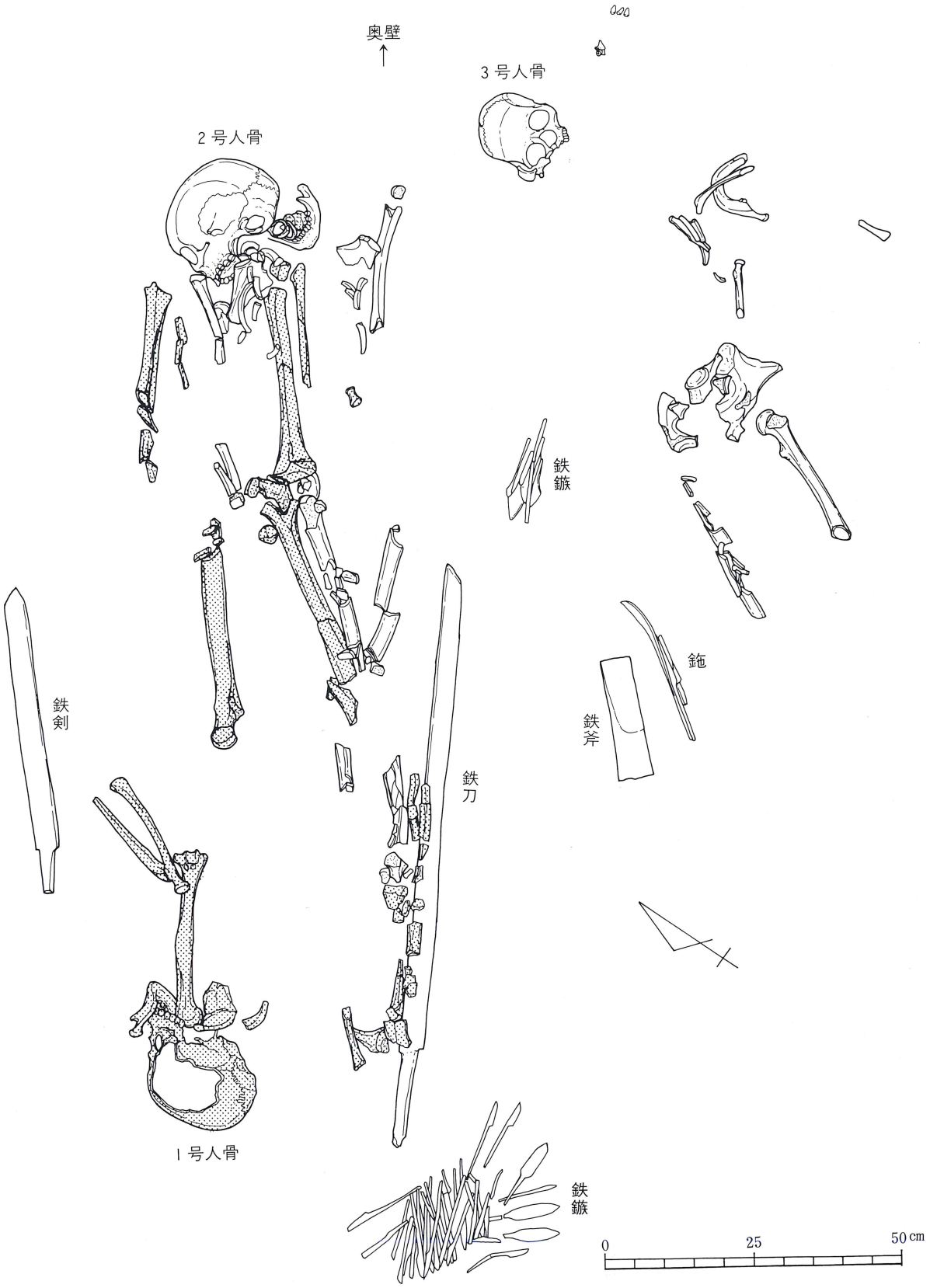
〈性別・年齢の推定〉

性別：乳様突起および眉弓の発達が著明であり、四肢骨の筋付着部も良く発達しており、明かに男性である。

年齢：歯牙咬耗度（Brocaの1～2度）および頭蓋主縫合の閉鎖の程度（内板は閉鎖、外板は矢状縫合の一部が閉鎖）から、成年から熟年になる頃（40才前後）と推定した。

〈形質〉

頭蓋骨は後頭部に膨隆が認められ、長頭型（M8／1＝73.8、M8は推定値）を示した。顔面部は鼻根部が陥凹し、上顔高も低く、いわゆる縄文人的な特徴を有する。咬合型式は鉗子咬合である。四肢骨の筋付着部が発達し、周径が大きく、がっしりした体格の人物だったと推察される。また、頭蓋骨非計測的形質の観察の結果、イ



第149図　25号横穴墓玄室内人骨出土状態

ンカ骨、左眼窩上縁孔、下顎隆起が認められた。

25―2号人骨（不明・小児）

〈保存部位〉

頭蓋骨：鼻骨、頬骨弓、上顎骨の一部を欠くが、他は残っている。残存歯を以下に示す。赤色顔料の付着あり。

$(M^3)\ M^2\ M^1\ \overset{(P^2)}{m^2}\ P^1\ C\ I^2\ I^1$	$I^1\ I^2\ C\ \overset{(P^2)}{P^1}\ m^2\ M^1\ M^2\ (M^3)$
$(M_3)\ M_2\ M_1\ P_2\ P_1\ C\ I_2\ I_1$	$I_1\ I_2\ C\ P_1\ P_2\ M_1\ M_2\ (M_3)$

（ ）　未萌出　　m　乳臼歯

体部骨：右鎖骨、左右肩甲骨片、左右の上腕骨体部・大腿骨体部・脛骨体部片。軀幹骨は肋骨と椎骨片が少量。

〈性別・年齢の推定〉

性別：不明である。

年齢：歯式より小児と推定した。

〈形質〉

後頭部に膨隆があり、インカ骨が観察された。また、下顎隆起もわずかに認められる。咬合型式は鋏咬合。

25―3号人骨（女性・成年）

〈保存部位〉

頭蓋骨：後半分が失われており、ほぼ顔面部だけが残存。赤色顔料の付着がみられた。残存歯を以下に示す。

／　$\overset{ウ}{M^2}\ M^1\ \dot{P}^2\ \dot{P}^1\ C\ I^2$ ○	○ $I^2\ C\ P^1\ P^2\ M^1\ \overset{ウ}{M^2}\ M^3$
$\dot{M}_3$ ／／／／／／／	／／／／／／／／

○　歯槽開放　　ウ　う蝕　　／　破損・不明

体部骨：左橈骨近位部、左寛骨片、左大腿骨近位部、肋骨片少量。

〈性別・年齢の推定〉

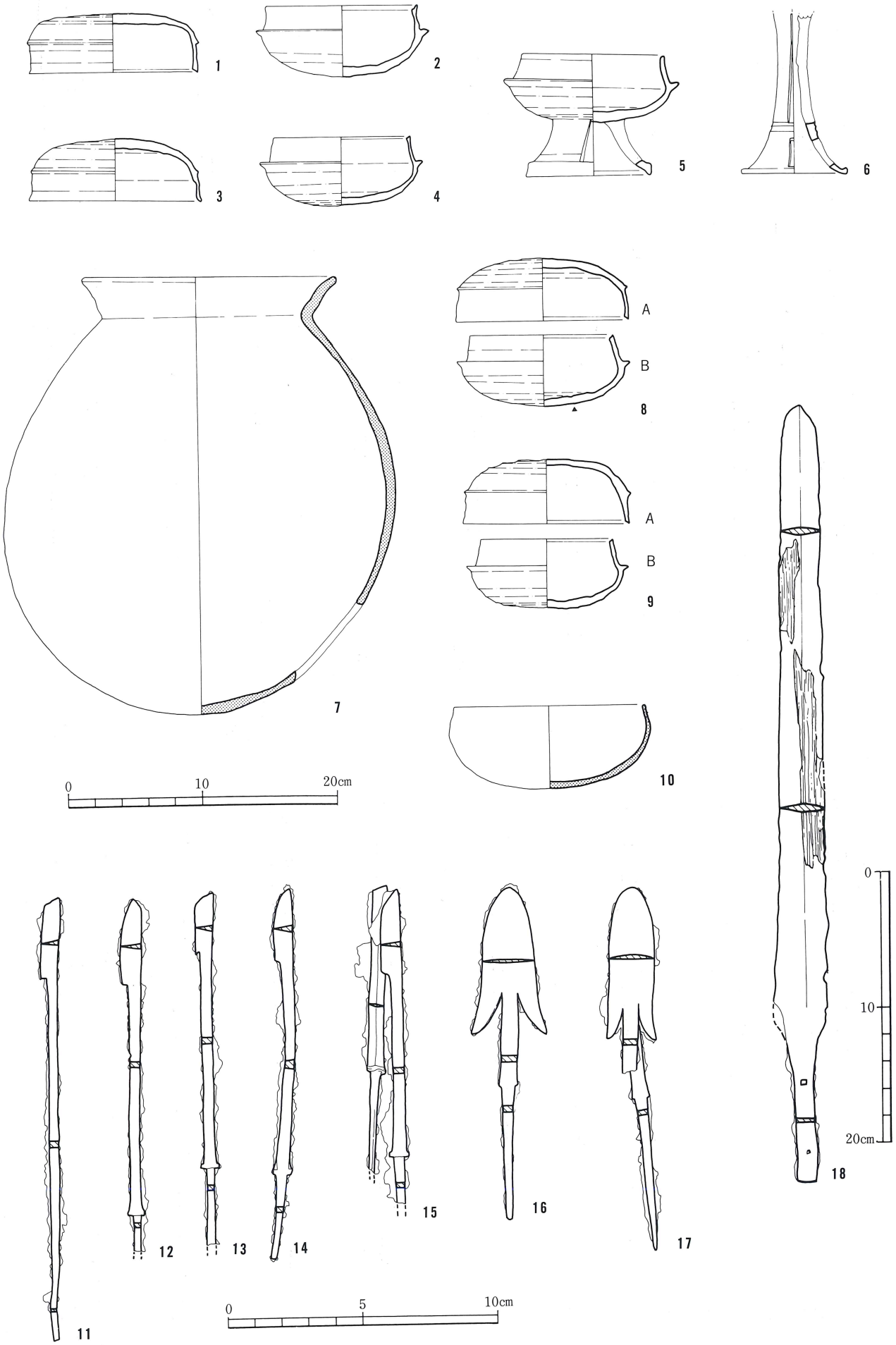
性別：側頭線や眉弓は、比較的良く発達しているが、大坐骨切痕の角は大きく大腿骨も細く華奢であることから、女性と推定した。

年齢：歯牙咬耗度（Broca の１～２度）、冠状および矢状縫合の閉鎖程度（内・外板ともほぼ開離）から成年と推定した。

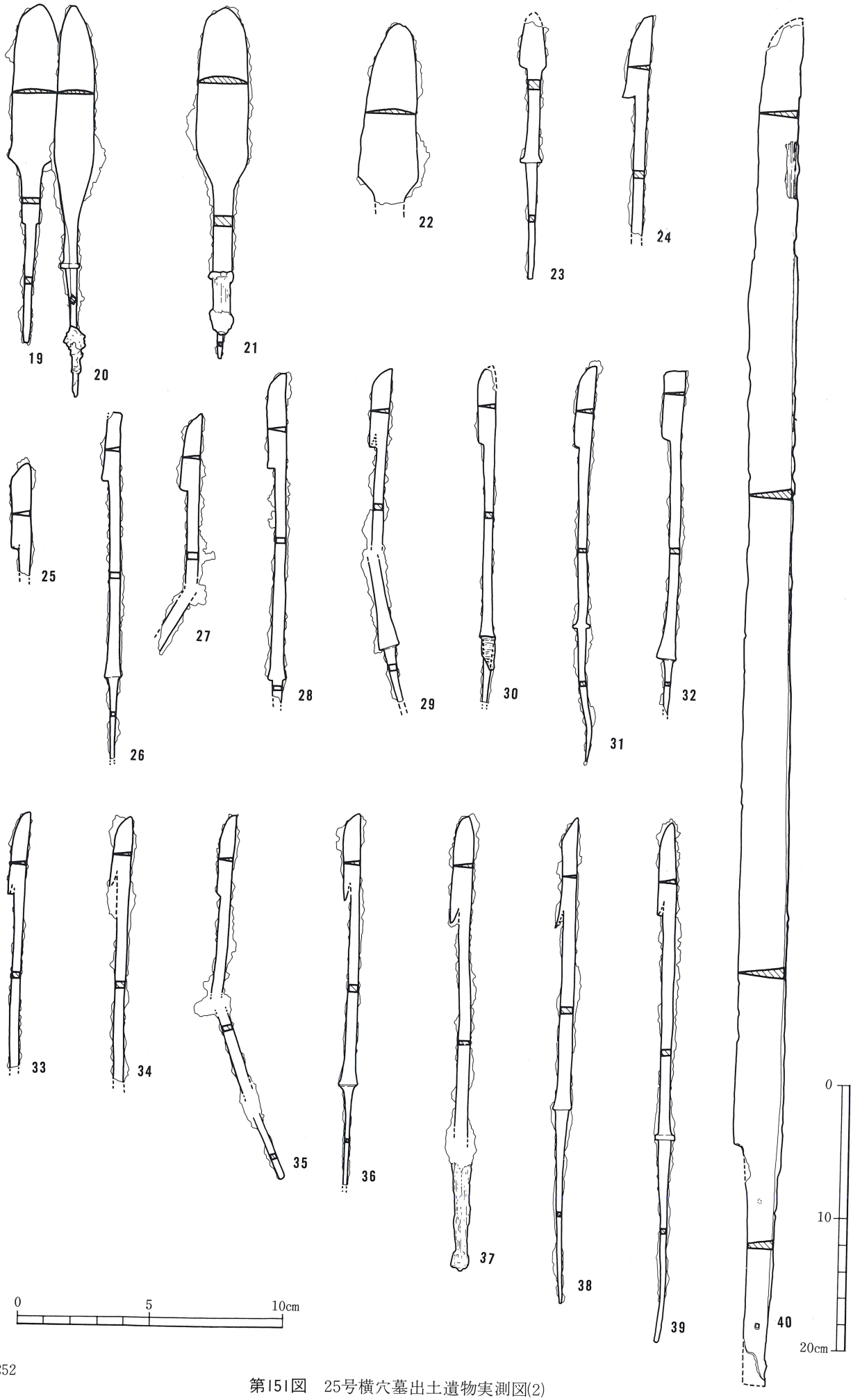
〈形質〉

上顔高が低く、鼻根部もやや陥凹している。頭蓋非計測的形質では、後頭部が失われているため、他の２体に見られたインカ骨は確認できなかった。前頭・側頭接合、右眼窩上縁孔が認められた。咬合型式は不明である。

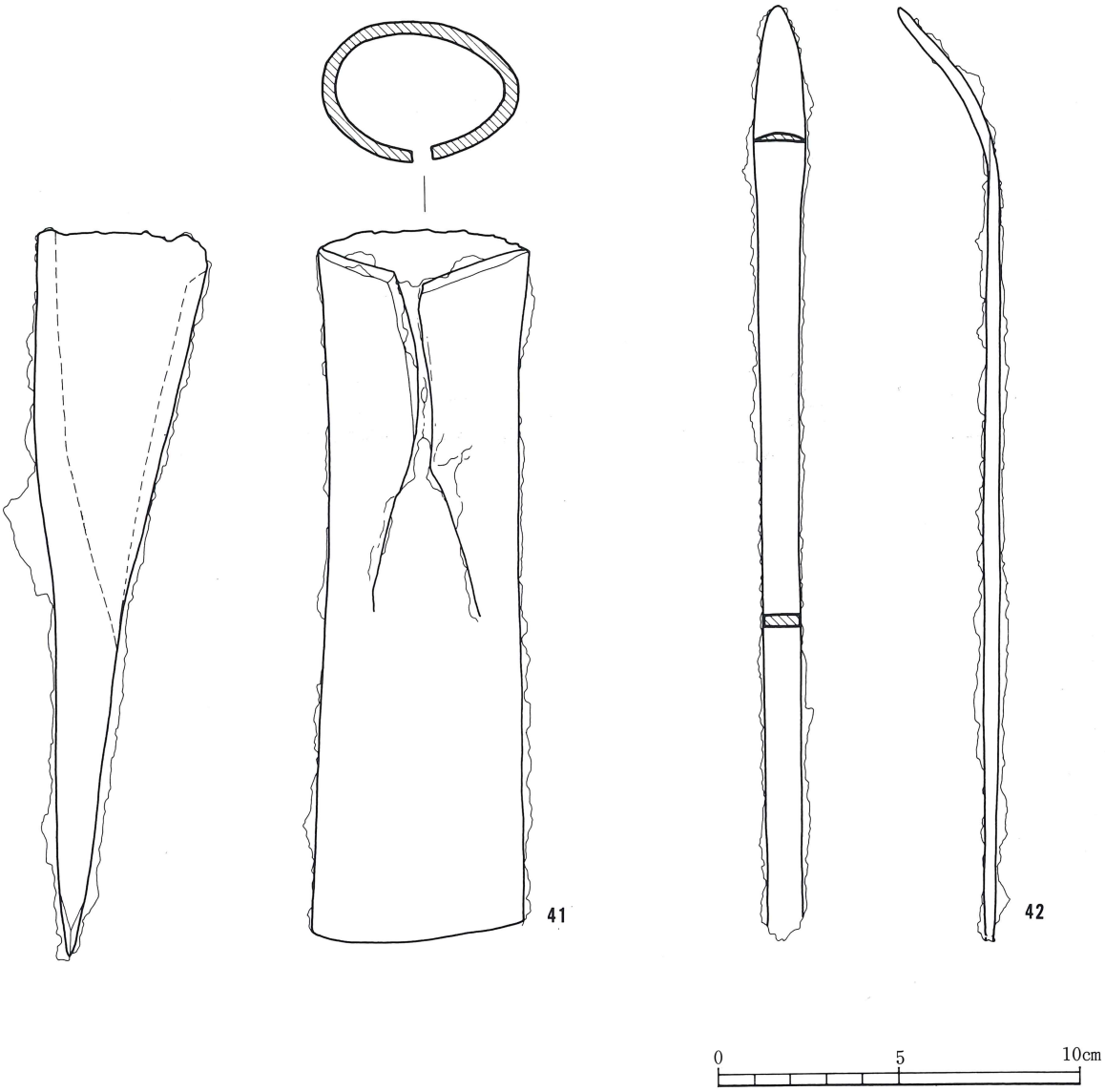
（土肥直美）



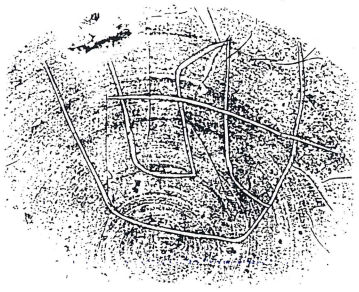
第150図　25号横穴墓出土遺物実測図(1)



第151図　25号横穴墓出土遺物実測図(2)



第152図　25号横穴墓出土遺物実測図(3)



150図－８Ｂ

第153図　25号横穴墓出土土器ヘラ記号

第54表　25号横穴墓出土土器観察表

（単位：cm）

番号	器種	法量 ・口径 ・器高 ・胴部最大径	形態の特色	技法の特色 内面	外面	色調	胎土	焼成	備考	ヘラ記号の有無
1	坏蓋	・12.8 ・4.3 ・－	口縁部はほぼ直下にのび、端部は内傾する面をなし鋭い。外面にはやや丸みをおびた稜がみとめられる。天井部はやや低く平らである。	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	青灰色	石英粒を多量に含む	良好		
2	坏身	・11.3 ・15.2 ・受部径13	たちあがりはわずかに内傾しながらのび、端部は丸く内傾する段を有す。受部はわずかに肥厚し平ら。底部は深く丸みをおびる。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	明茶褐色	石英粒を多量に含む	良好		
3	坏蓋	・13 ・4.6 ・－	口縁部はほぼ直下にのび、端部は丸みをおびた内傾する面を有す。外面には丸みをおびた稜がみとめられる。天井部は高く丸みをおびる。	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	淡灰色	石英粒を多量に含む	良好		
4	坏身	・10.2 ・5.1 ・受部径12.2	たちあがりはわずかに内傾しながらのび、端部は内傾する面をなす。受部は肥厚するが水平で丸みをおびる。底部は深く丸い。	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	青灰色	石英粒を多量に含む	良好		
5	有蓋高坏	・10.6 ・9 ・受部径13.1	たちあがりは内傾しながらのび、端部は丸く内傾する面をなす。受部は上外方にのび、端部は丸い。底部は深く丸みをおびる。脚部は下外方にのび長方形スカシあり。端部近くに段をなす。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	灰褐色	1㎜前後の砂粒を微量細砂粒をやや多量に含む	良好 やや軟質		
6	高坏	・(脚底部) 8 ・(残存高) 11.9 ・－	脚部は基部は細く下外方にのび、下部外面に2本の沈線を施す。端部はわずかに肥厚するが丸い。長脚二段四方スカシあり。	回転ナデ	回転ナデ	灰色	石英粒を微量に含む	良好		
7	甕	・19 ・32.6 ・28.8	口頸部は外反しながらのび、端部は丸い。脚部はだ円形を呈し、最大径は中央部にある。底部は丸みをおびる。	回転ナデ？ ヘラケズリ？	回転ナデ 部分的に細かいハケ目	黄褐色 胴部下半はススのため黒色	石英粒を多量に含む	良好	土師器 焼成後穿孔	
8－A	坏蓋	・13 ・4.5 ・－	口縁部はわずかに外反しながらのび、端部は内傾する段を有し丸い。外面にははっきりした稜がみられる。	回転ナデ ヘラ状工具で天井部調整	回転ナデ 回転ヘラケズリ	灰色	精緻 1㎜大の砂粒を含む	良好		
8－B	坏身	・10.8 ・5.2 ・受部径13.1	たちあがりは内傾しながらのび、端部は内傾するうすい凹面をなす。受部は水平にのび端部はとがる。底部は深く丸みをおびる。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	青灰色	1～5㎜大の砂粒を多量に含む	良好		外面底部「𝍏」
9－A	坏蓋	・12.6 ・4.8 ・－	口縁部はほぼ直下にのび、端部は内傾する段を有す。外面には鋭い稜がみられる。天井部は高く平らである。	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	青灰色 淡青灰色	1～3㎜の石英粒を含む 精緻	良好	重ね焼き痕	

番号	器種	法量 ・口径 ・器高 ・胴部最大径	形態の特色	技法の特色 内面	外面	色調	胎土	焼成	備考	ヘラ記号の有無
9—B	坏身	・10 ・5 ・受部径12.3	たちあがりは内傾しながらのび、端部は内傾する段を有し、鋭い。受部は水平にのび、端部は鋭い。受部は水平にのび、端部は鋭い。底部は深く丸みをおびる。	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	灰色	精緻 2～3㎜の石英粒を含む	良好 堅緻		
10	埦	・14 ・6.1 ・14.9	口縁部は内湾しながらのび、端部はわずかに肥厚し丸い。底部は深くやや丸みをおびる。	ナデ	ナデ ヘラケズリ	赤褐色	精緻	不良	土師器	

第55表　25号横穴墓出土鉄器観察表

（単位：cm）

番号	器種	全長	頭部長（刀部）	刃幅	頸幅	刃部厚	頸厚	備考
11	鉄鏃	16.5	3.0	0.6	0.35	1.5	0.2	
12	同上	13.1以上	3.2	0.8	0.4	0.2	0.3	
13	同上	13.1以上	2.3	0.6	0.4	0.2	0.25	
14	同上	13.8	2.7	0.7	0.4	0.25	0.3	
15	同上	11.6以上	3.1	0.7	0.4	0.2	0.2	
16	同上	12.4	5.4	2.0	0.6	0.1	0.2	木質残存
17	同上	13.5以上	5.5	1.6	0.5	0.2	0.2	同上
18	鉄剣	57.8	46.0	3.8	1.6	0.6	0.3	
19	鉄鏃	12.8	5.9	1.7	0.7	0.15	0.2	
20	同上	14.8	7.3	1.4	0.3	0.15	0.2	
21	同上	13.2	5.9	1.8	0.7	0.3	0.4	
22	同上	6.8以上	6.0	2.2	1.0	0.2	不明	
23	同上	10.1	2.0	1.0	0.5	不明	0.4	
24	同上	8.3以上	3.1	0.8	0.4	0.2	0.3	
25	同上	4.2以上	3.2	0.7	0.4	0.2	不明	
26	同上	13.1以上	2.6	0.6	0.4	0.2	0.2	
27	同上	8.2以上	2.8	0.6	0.4	0.2	0.25	
28	同上	12.2以上	3.5	0.7	0.4	0.2	0.2	
29	同上	12.7以上	2.9	0.7	0.4	0.2	0.3	
30	同上	12.2以上	2.9	0.7	0.4	0.2	0.25	桜樹皮巻き残存
31	同上	14.9	3.0	0.7	0.4	0.2	0.15	
32	同上	13.0以上	2.5	0.7	0.4	0.1	0.25	
33	同上	9.6以上	3.0	0.6	0.3	0.2	0.25	
34	同上	10.0	2.6	0.7	0.4	0.15	0.3	

番　号	器　　種	全　長	頭部長 (刀部)	刃　幅	頸　幅	刃部厚	頸　厚	備　　考
35	鉄鏃	14.2	2.9	0.55	0.4	0.2	0.2	
36	同上	14.1	3.3	0.6	0.4	0.2	0.3	
37	同上	17.1	4.0	0.7	0.4	0.2	0.15	木質残存
38	同上	18.3	4.1	0.5	0.5	0.1	0.3	
39	同上	19.6	3.5	0.7	0.4	0.2	0.25	
40	直刀	103.6	83.0	3.6	2.8	0.8	0.6	木質鞘一部残存
41	鉄斧	19.7	5.8					
42	鉈	25.7	4.7	1.4	1.0	0.2	0.35	

26号横穴墓

1．立地、調査前の状況

26号横穴墓は北支群のほぼ中央24号横穴墓の南側約８ｍの所に位置し、南西方向に開口する横穴墓である。斜面の中位、標高32ｍ付近に設けられている。全長は8.8ｍを測り、主軸をＮ－56.5°－Ｅにとる。保存状態は良好で、墓道は完全に埋没しており地表での確認はできなかった。調査は墓道プランの確認、同埋土の検討、閉塞施設、玄室内の調査等を行った。なお、本横穴墓は２年次にわたって調査が行われた為、遺物の取上げに若干の問題点を残した。

2．規模、構造

1）墓道、羨門部

a）規模、構造　墓道は全長5.35ｍ、幅は入口で上部幅0.76ｍ、底面幅0.65ｍを測る。側壁高は羨門部で約1.9ｍを測る。墓道床面は凹凸を持ちながらもほぼ平坦に羨門に向う。墓道入口から約3.7ｍ羨門方向へ寄った位置までは墓道幅が狭く、その後羨門まで若干広がる逆台形状を呈し、いわゆる前庭部をつくる。この部分の中央には玄室からの排水溝が約0.5ｍ掘られている。排水溝上面は閉塞石に覆われている。墓道の羨門壁は70°前後の傾斜を持つ壁となり、側壁とほぼ直角に接している。側壁の傾斜は75°前後である。

羨門部分は崩壊が激しく旧状を失っている。断片的に残っている部分から復元すると、幅0.58ｍ、推定高0.97ｍを測る。

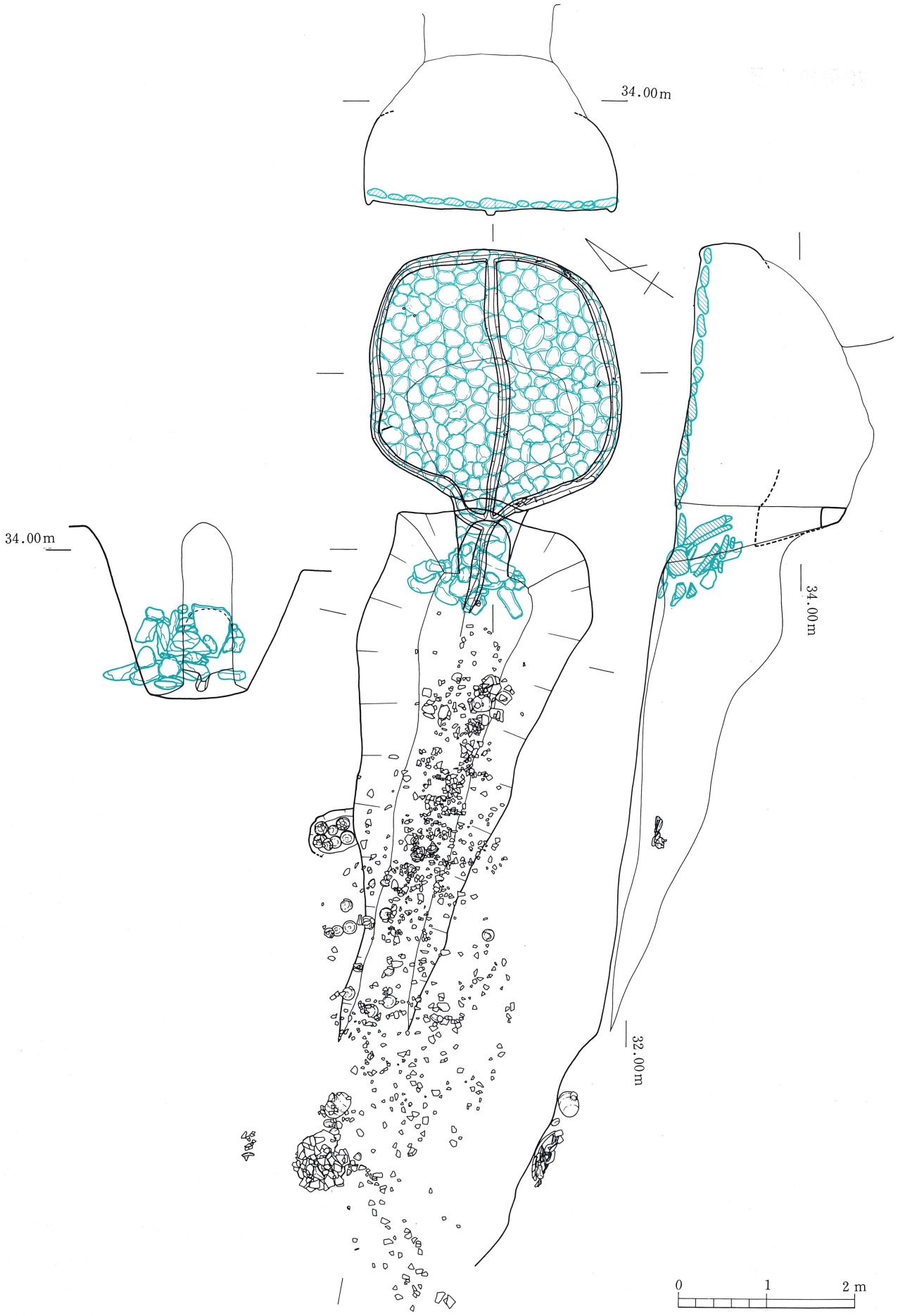
閉塞施設は羨門を覆うように構築されている。なお、後述する墓道内埋土の観察から、この施設は追葬の過程で上部を一度取り除き、再構築していることが明らかになった。まず、排水溝の上に人頭大の河原円礫を５～６個置いているが、これは初葬時の閉塞の残存部である。次にこの円礫の上に２枚の安山岩の板石を立てかけて羨門を塞いでいる。さらに30～50㎝大の河原および地山円礫15個前後で板石を支え隙間を覆う。羨門を覆う板石は羨門側に赤色顔料が塗布されている。

b）墓道内埋土　墓道内の堆積土壌はその性状から比較的明瞭な層区分が可能であり、全体で４層群14層に分層した。なお、墓道確認が確実でなかった点および調査が２年次にわたった為、土層観察で墓道入口付近を観察できていない。以下、堆積順に説明する。

第１層群（Ⅸ・Ⅹ層）は閉塞石最下面から入口方向へ約５ｍ程ほぼ水平に堆積し、最も厚い所で30㎝を測る。３ｍ程の所で上層より掘り込みが認められる。本層はさらに上下２層に区分される。(1)下層（Ⅹ層）は基盤層の二次堆積層で上層とは漸移的に変化する。(2)上層（Ⅸ層）は下層と性状はほぼ同じであるが若干風化しており軟質である。本層群中に須恵器坏蓋（第157図24～29・37・38）、坏身（第157図30～34）などが破片で出土している。特に31は上層の遺物と接合しており、追葬時の攪乱が認められる。本層群は初葬埋土と考えられる。

第２層群（Ⅶ・Ⅷ層）は、閉塞石下面から入口方向約８ｍ程基盤層に平行してほぼ水平に堆積し、最も厚い所で20㎝を測る。上層とは明瞭に区分でき、羨門付近は上層によってカットされ、３ｍ程の所でピット状の掘り込みが認められる。本層は上下２層に区分される。(1)下層（Ⅷ層）は基盤層の二次堆積層で閉塞部から2.3ｍ程認められる。上層とは漸移的に変化する。(2)上層（Ⅶ層）は性状等は下層とほぼ同じであるが風化が進んでおり、軟質である。本層群中には墓道肩部に小型横穴を掘り込み、この中に遺物Ｃ群須恵器坏蓋、身３個、蓋付短頸壺１個、坏身４個（第156図１～６）を配列埋置している。また、閉塞付近で焼土層が認められ埋葬時に挽火が行われている。本層は第１次追葬埋土と考えられる。

第３層群（Ⅴ・Ⅵ層）は、閉塞石上・中面から入口方向へ８ｍ程レンズ状に堆積し、最も厚い所で40㎝を測る。上層とは明瞭に区分できない。６～７ｍ程の所で上層からピット状の掘り込みをして遺物Ｂ群甕（第160図65）、横瓶（第158図60）を正置している。本層は上下２層に区分される。(1)下層（Ⅵ層）は閉塞部全体を覆う層で1.6ｍ程堆積している。風化が著しいが硬く締っている。(2)上層（Ⅴ層）は基盤層の二次堆積土であるが上層になるに



第154図　26号横穴墓平・断面図

したがって軟質である。本層を切り込んで甕、横瓶を正置するピットが認められる。本層群が第２次追葬（最終埋葬）の埋土と考えられる。

第４層群（Ⅲ・Ⅳ層）は、羨門壁上部から入口方向へ６ｍ以上レンズ状に堆積しているが、６ｍより入口側は土層観察がなされてない。最も厚い所で30㎝を測る。上層とは明瞭に区分できる。本層はさらに上下２層に区分される。(1)下層（Ⅳ層）は羨門壁上部から墓道入口付近まで堆積したクロボク質土層で風化が著しく進んでいる。第３層群で検出された甕、横瓶は本層群より切り込んで埋置している。(2)上層（Ⅲ層）は性状等Ⅳ層と同質であるが若干赤味を帯びている。本層群中に大甕、提瓶、長頸壺、高坏等の破砕散布が認められる。甕は20号横穴墓墓道９層群出土甕とも接合するが、大部分は27号テラス状遺構の遺物と接合する。高坏は29号横穴墓第５層群遺物と接合する。これらのことから本層群の遺物は27号テラス遺構で祭祀が行われた後、破砕し各横穴墓へ投棄されたものと考えられる。本層は最終埋葬後の旧表土と考えられる。

第５層群（Ⅰ・Ⅱ層）は、近年の造成による流入土と考えられる。

以上の結果から本横穴墓は最低３回の埋葬と埋葬に関わらない墓前祭祀が行われたと推定される。

２）羨道、玄室

羨道は長さ0.67ｍ、玄門幅0.9ｍと短かくて、幅広となる。玄室は長さ2.85ｍ、裾部幅2.5ｍ、中央幅2.77ｍ、奥壁幅1.9ｍの略隅丸方形状を呈し、床面には幅10㎝前後、深さ５㎝前後の排水溝が周壁および中央に設けられている。中央の溝は羨道中央を経て前庭部まで延びている。床面はほぼ平坦であり、玄室、羨道全体に人頭大の河原石を敷きつめている。この敷石の構築は中央の排水溝の上から左右に広げるように行っている。なお、左側壁と奥壁とのコーナー付近に人頭大の河原石を４個、左裾壁と左側壁とのコーナー付近に１個、右裾壁と右側壁とのコーナー付近に１個、それぞれ積み重ね石枕としている。天井は崩落が激しく高さは不明であるが奥壁の形状からドーム状を呈すると推定される。

３．遺物の出土状態

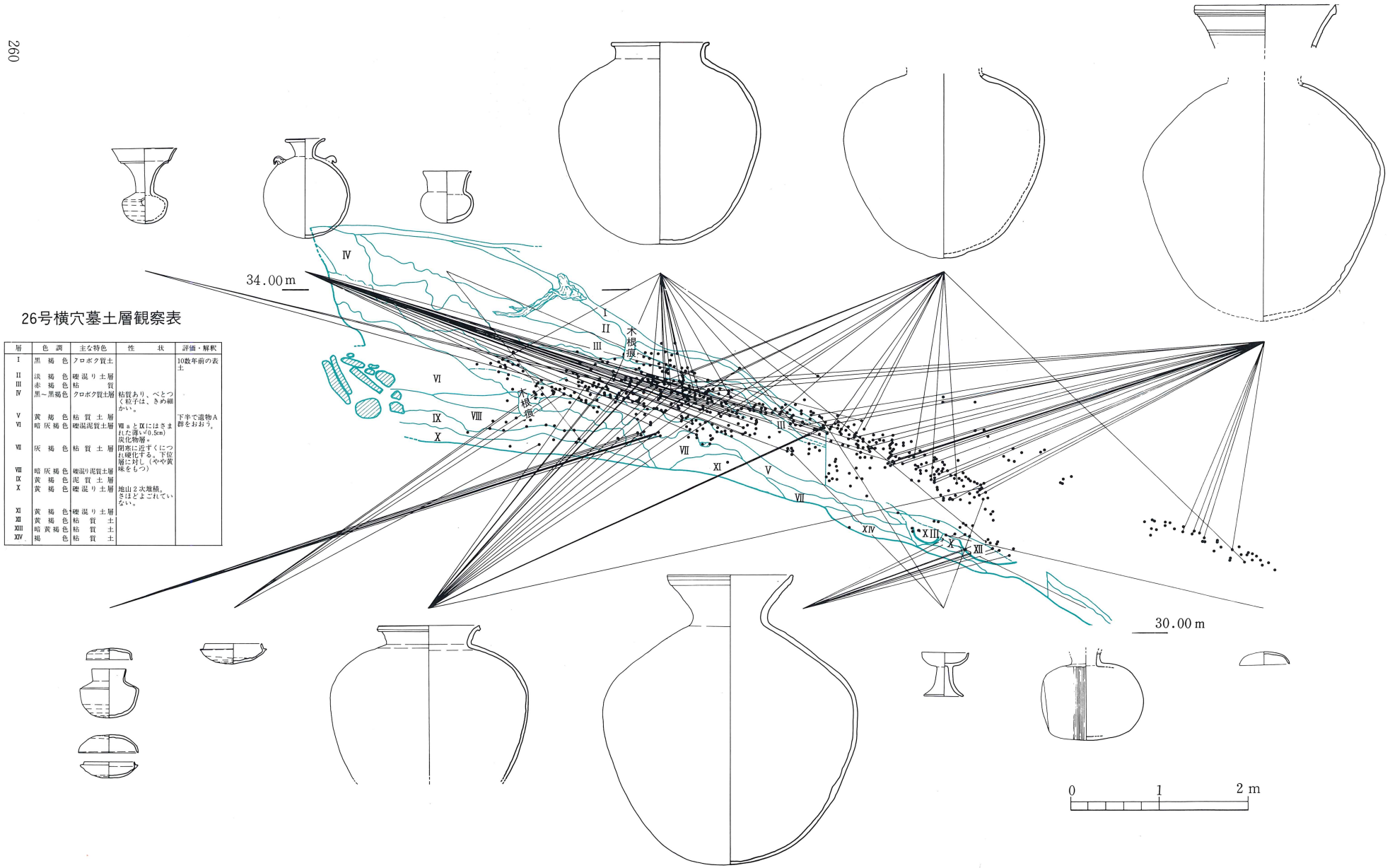
１）　玄室内

玄室内には天井部崩落による土砂が堆積していたが清掃後に土器、鉄器、装身具類が検出された。まず、玄室右裾壁ぎわに刀先を側壁方向に向けた直刀一振（第162図85）、その基部に直刀に並行して刀先を異方向に向けた鉄鏃４本（第162図69～72）、刀の中央付近に土師器ミニチュア土器（第162図68）、右側壁ぎわ中央に壁に刀先を刺し込んだ状態で鉄鏃一本（第162図80）、右側壁と奥壁のコーナー付近で鉄鏃６本以上（第162図73～79）が、左側壁奥壁寄の石枕間に耳環２個（第162図82・83）、左裾壁と左側壁コーナー付近で刃先を壁に向けた刀子１個（第162図81）、中央玄門寄の溝内に耳環１個（第162図84）がそれぞれ検出された。鉄鏃の刃先が同一でないのは奥に立てかけていた可能性を示すものであろう。

２）　墓道内

墓道内の遺物の出土層位については墓道内埋土の項で示した。ここでは遺物の出土状況の特徴について述べる。墓道最下面の入口付近で砥石（第162図78）坏蓋（第157図24～29・37・38）、坏身（第157図30～34）類を中心に完形品に近い状態でまばらに分布しており接合関係から追葬時に攪乱を受け原位置を保ってないと考えられる。次に墓道左壁の中央よりやや入口近くの壁上端に長さ50㎝、幅60㎝の小ピットを掘り込み須恵器坏蓋・身、短頸壺（第156図１～８）の配列埋置が認められた。上層では、羨門寄り右側で横瓶（整理中紛失）と甕底部の一括埋置が、入口より１～1.5ｍ西側の斜面上に横瓶（第158図60）、甕（第160図65）の埋置が認められた。それ以外は甕を中心とした破砕散布が認められるが、その散布の状況は墓道外にもあり右側に集中する傾向が見られ、右方向からの投棄が想定される。また、遺物中に土師器ミニチュア土器（第157図48・49）が出土している。

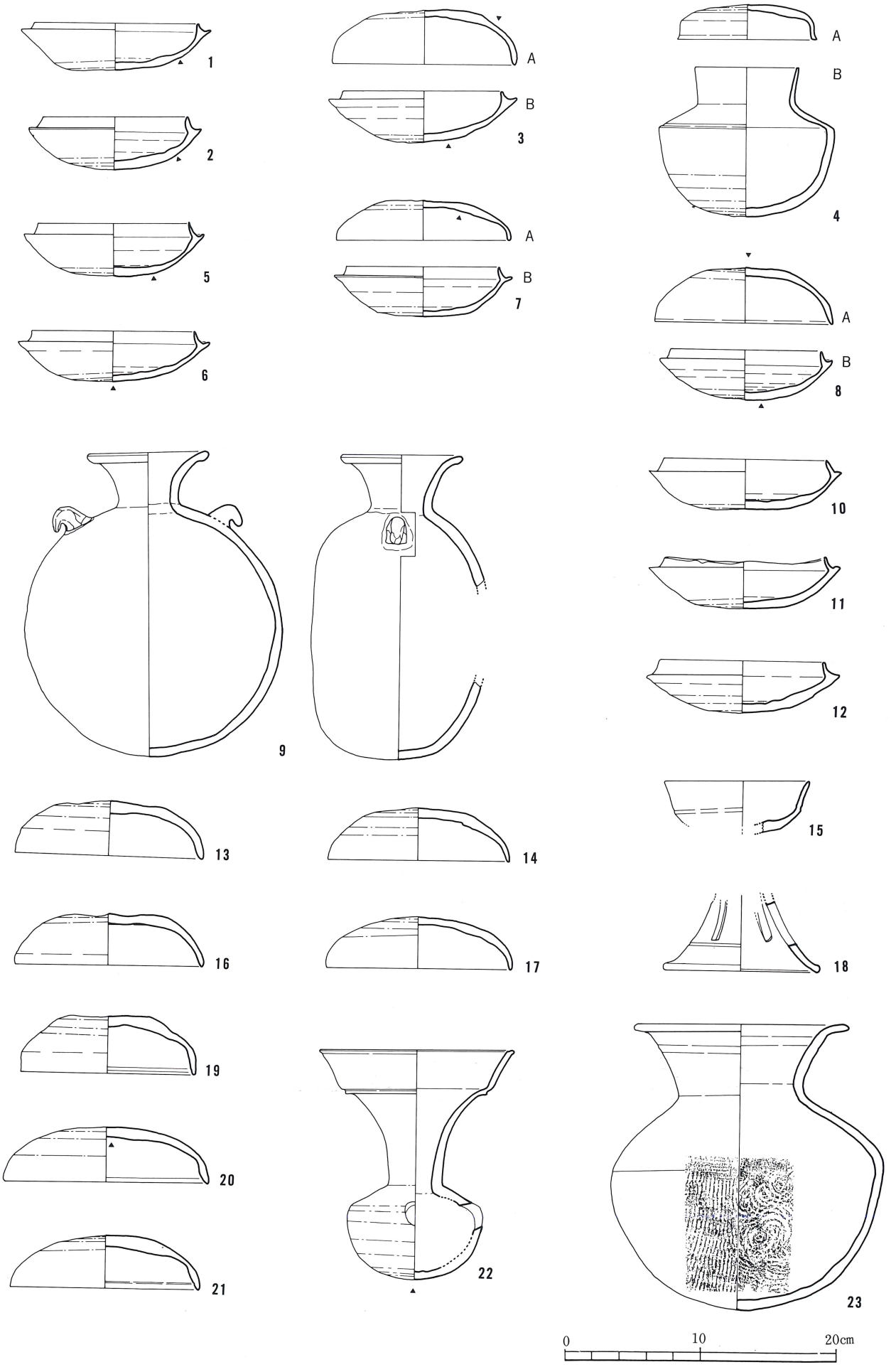
（村上久和）



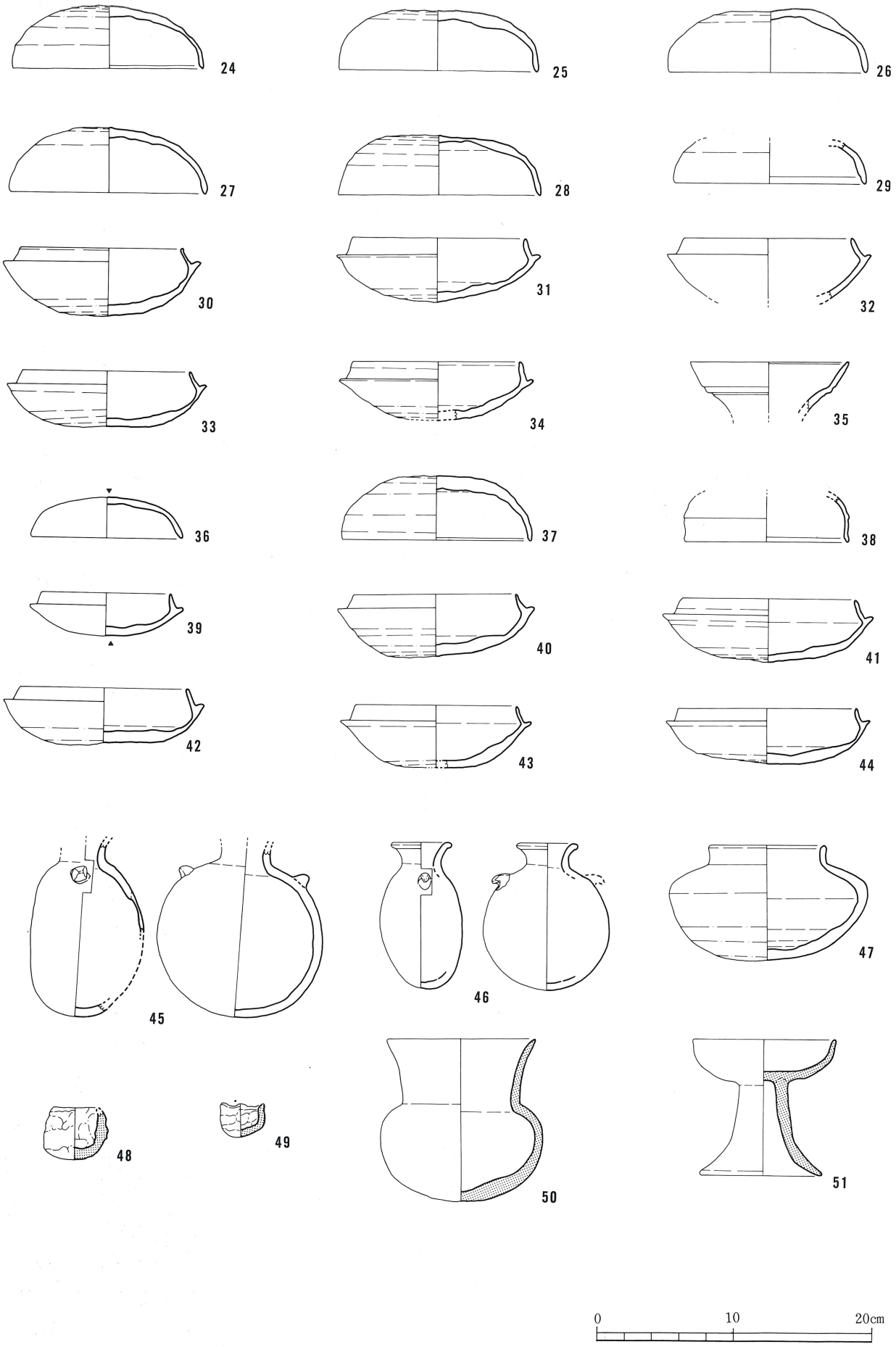
26号横穴墓土層観察表

層	色調	主な特色	性状	評価・解釈
I	黒褐色	フロボク質土		10数年前の表土
II	淡褐色	礫混り土層		
III	赤褐色	粘質		
IV	黒～黒褐色	クロボク質土層	粘質あり、べとつく粒子は、きめ細かい。	
V	黄褐色	粘質土層		
VI	暗灰褐色	礫混泥質土層	VIa とIXにはさまれた薄い0.5cm)炭化物層。	下半で遺物A群をおおう。
VII	灰褐色	粘質土層	閉塞に近すくにつれ硬化する。下位層に対し（やや黄味をもつ）	
VIII	暗灰褐色	礫混り泥質土層		
IX	黄褐色	泥質土層		
X	黄褐色	礫混り土層	地山２次堆積。さほどよごれていない。	
XI	黄褐色	礫混り土層		
XII	黄褐色	粘質土		
XIII	暗黄褐色	粘質土		
XIV	褐色	粘質土		

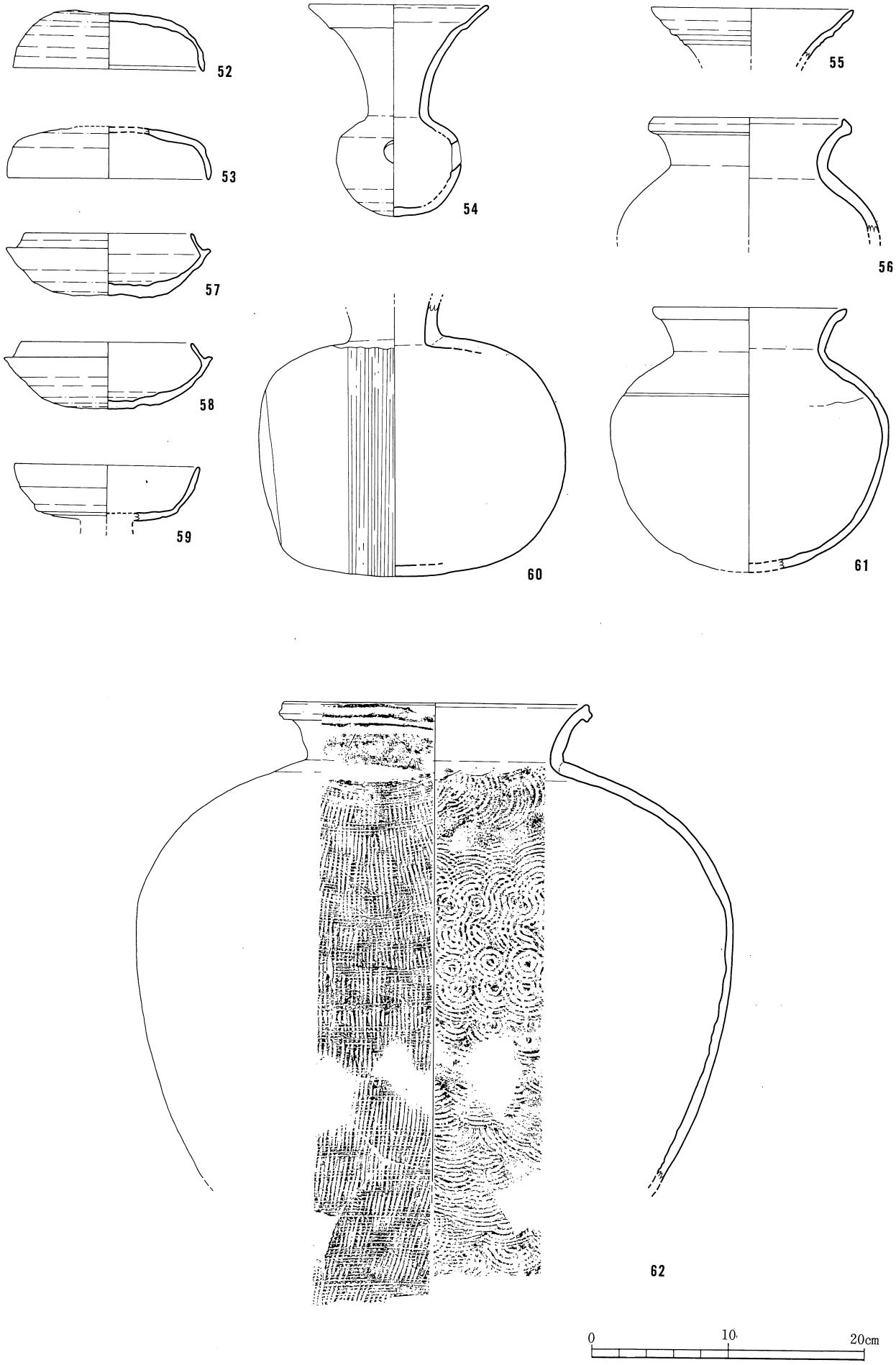
第155図　26号横穴墓縦断土層及び遺物垂直分布図



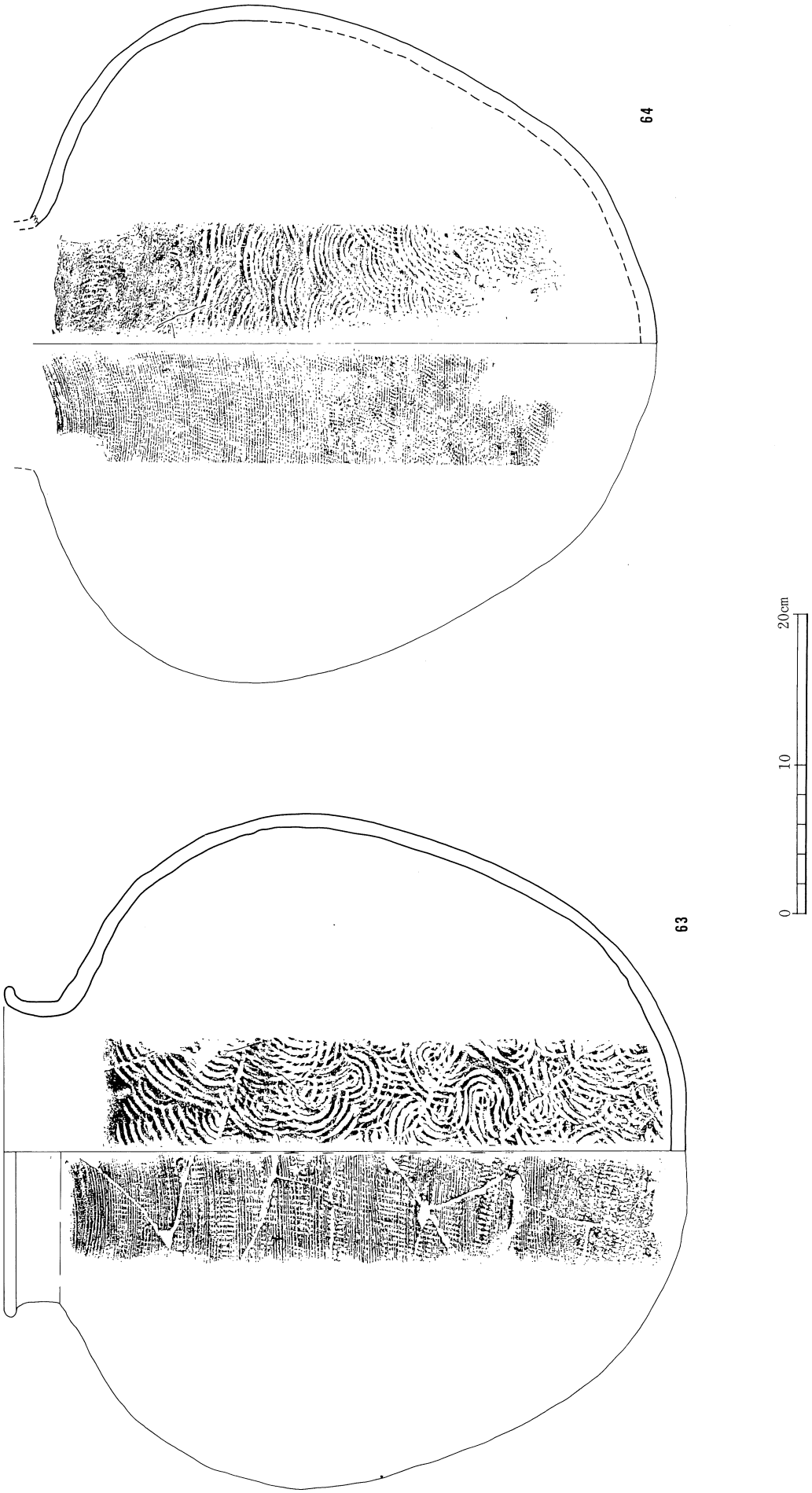
第156図　26号横穴墓出土遺物実測図(1)



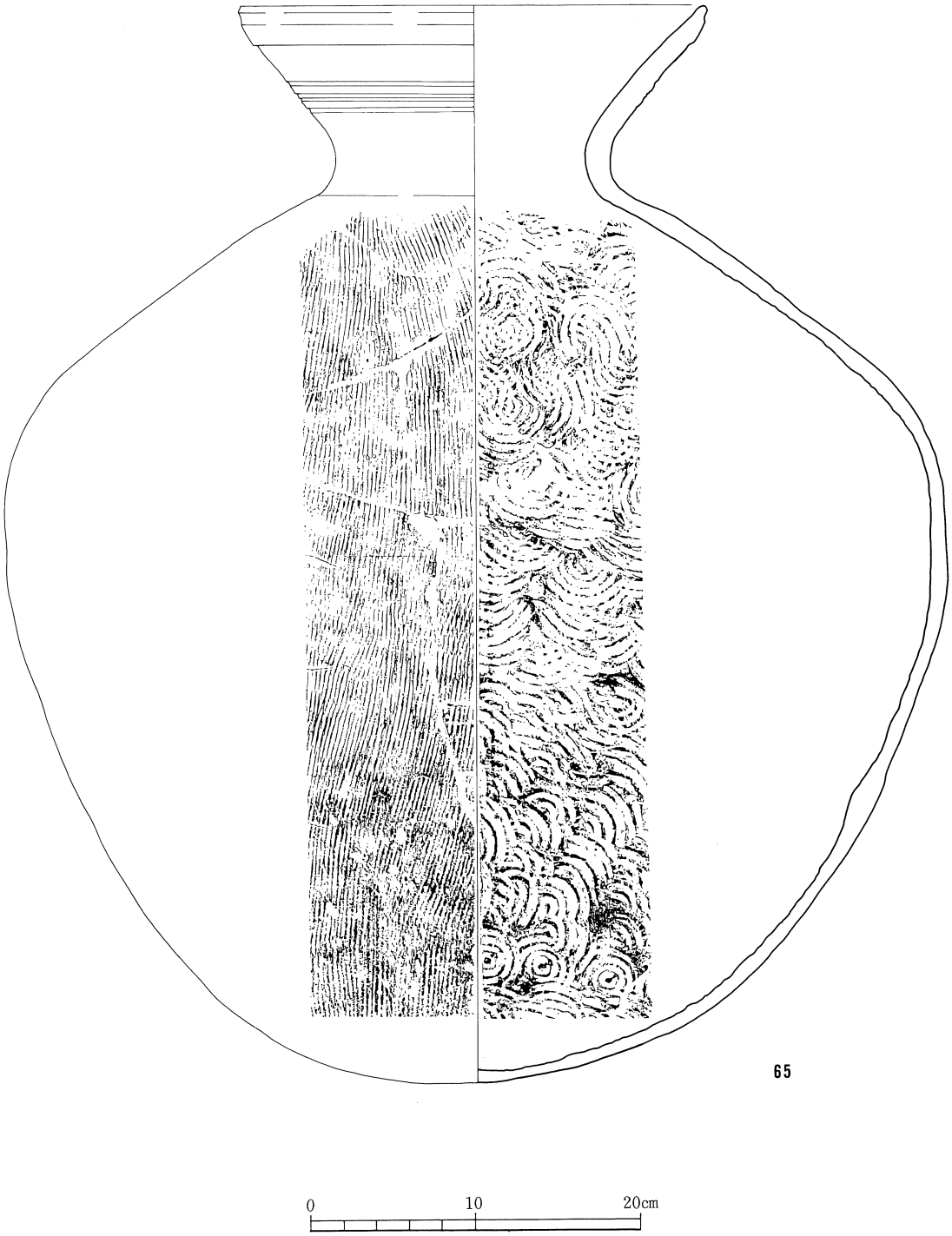
第157図　26号横穴墓出土遺物実測図(2)



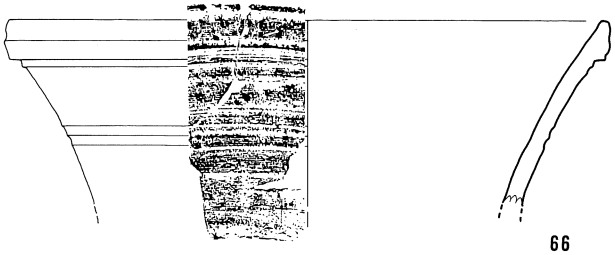
第158図　26号横穴墓出土遺物実測図(3)

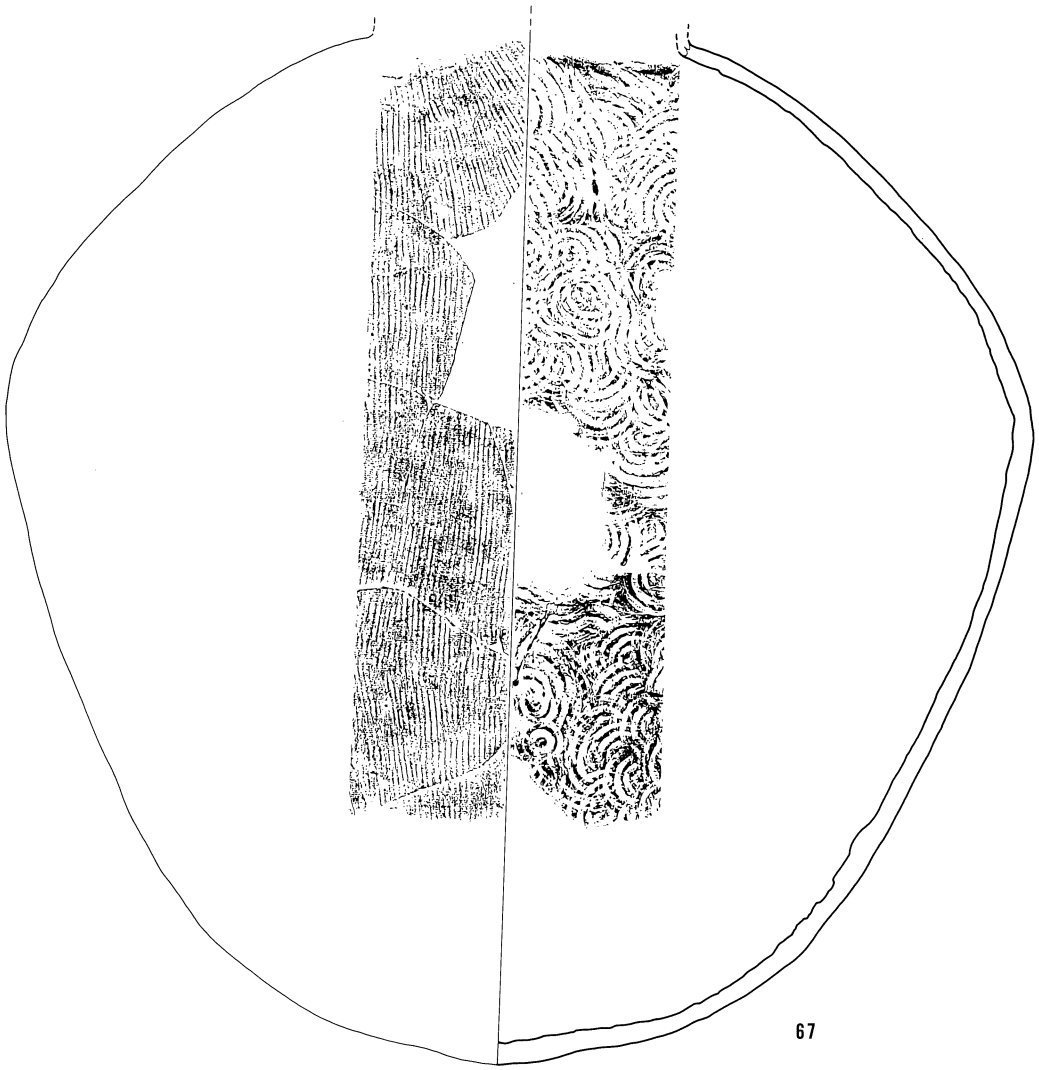


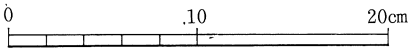
第159図　26号横穴墓出土遺物実測図(4)



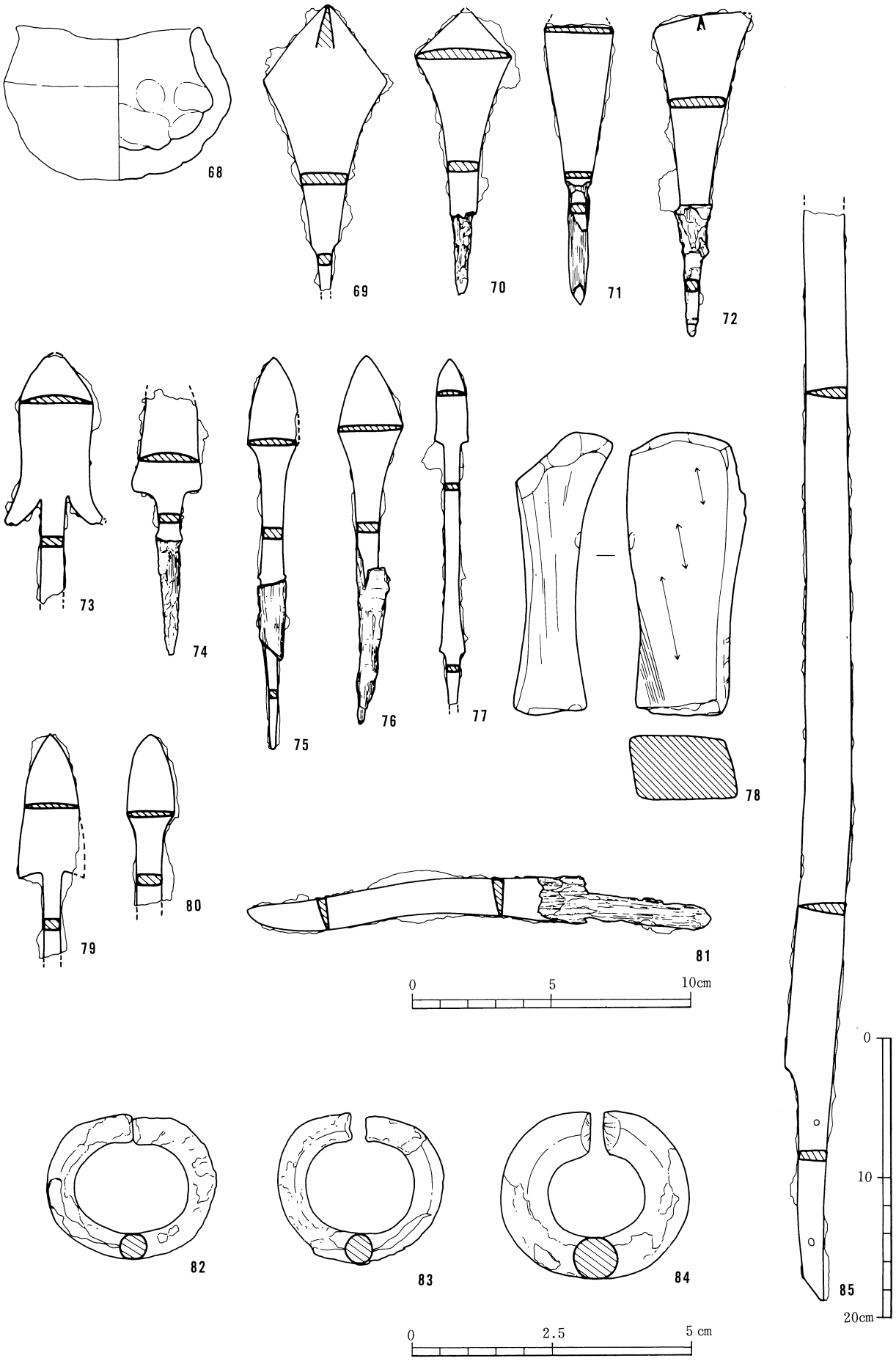
第160図　26号横穴墓出土遺物実測図(5)



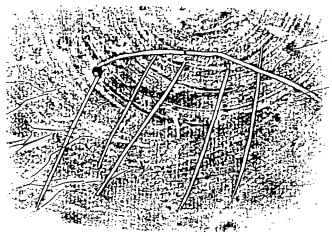




第161図　26号横穴墓出土遺物実測図(6)

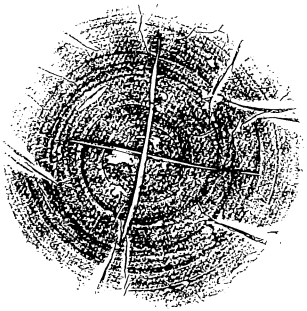


第162図　26号横穴墓出土遺物実測図(7)

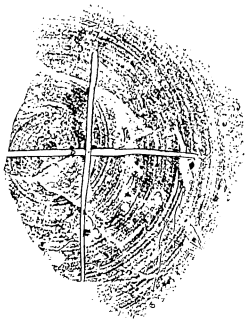


156図－3 A

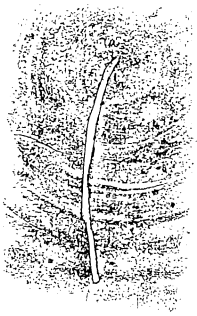
157図－39



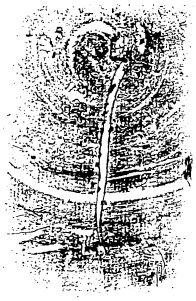
156図－22



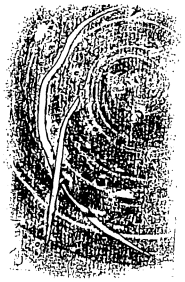
156図－6



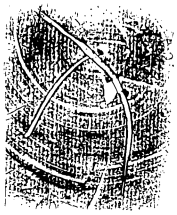
156図－3 B



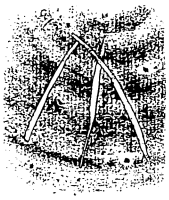
156図－8 A



156図－1

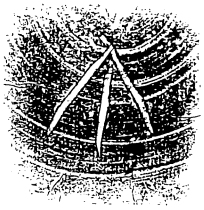


156図－8 B



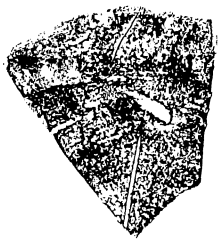
156図－7 A

156図－2



156図－5

157図－36



坏身外面

156図－20

第163図　26号横穴墓出土土器ヘラ記号

第56表　26号横穴墓出土土器観察表

（単位：cm）

番号	器種	法量 ・口径 ・器高 ・胴部最大径	形態の特色	技法の特色 内面	外面	色調	胎土	焼成	備考	ヘラ記号の有無
1	坏身	・12.2 ・3.5 ・—	たちあがりは短く直立してのび、端部は丸い。受部は細く上外方にのび、端部は丸い。底部は浅く平らである。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	青灰色 灰黒色	精緻	良好	1～8一括	外面底部 「ξ」
2	坏身	・11.8 ・3.9 ・—	たちあがりは内傾してのび、端部は丸い。受部は上外方にのび、端部は丸い。底部はやや深く丸みをおびる。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	青灰色	精緻	良好		外面底部 「∨」
3—A	坏蓋	・13.8 ・4 ・—	口縁部はほぼ垂直にのび、端部は丸い。天井部はやや高く平らである。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	青灰色 黒色	石英粒を含むが精緻	良好 堅緻		外面底部 「m」
3—B	坏身	・12 ・3.9 ・—	たちあがりはほぼ直立してのび、端部は丸い。受部は上外方にのび、端部は丸い。底部は深く、やや丸みをおびる。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	灰色 青灰色	精緻	良好 堅緻		外面底部 「ｌ」
4—A	坩蓋	・10.6 ・2.6 ・—	口縁部はほぼ直下にのび、端部はわずかに外反し面をなす。天井部は、低く平らである。	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	灰色	精緻	良好 堅緻		
4—B	坩	・8 ・11 ・13.3	口頸部は細長くわずかに外反しながらのび、端部は丸い。胴部は横長く、最大径は、上部にある。	回転ナデ後ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	青灰色 灰色	石英粒を含むが精緻	良好 堅緻		
5	坏身	・11.3 ・3.9 ・—	たちあがりは内傾してのび、端部は丸い。受部は上外方にのび、端部は丸い。底部は深く丸い。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	灰色	精緻	良好 堅緻		外面底部 「个」
6	坏身	・12 ・3.7 ・—	たちあがりは内傾してのび、端部は丸い。受部は上外方にのび、端部は丸い。底部は浅く、丸みをおびる。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	青灰色	精緻	良好 堅緻		外面底部 「×」
7—A	坏蓋	・12.8 ・2.8 ・—	口縁部は外反しながらのび、端部はやや肥厚し丸い。天井部はやや低く平らである。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	灰色	石英粒を若干含む	良好 堅緻		内面天井部 「个」
7—B	坏身	・11.6 ・3.7 ・—	たちあがりは内傾してのび、端部は丸い。受部は上外方にのび、端部は丸い。底部はやや深く平らである。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	灰色 褐色	精緻	良好 堅緻		
8—A	坏蓋	・13.5 ・4.1 ・—	口縁部は外反しながらのび、端部はわずかに面をなし丸い。	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	灰色 黒色	石英粒を多量に含む	良好 堅緻		外面天井部 「ｌ」
8—B	坏身	・11.4 ・3.6 ・—	たちあがりは内傾してのび、端部は丸い。受部は上外方にのび、端部は丸い。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	淡青灰色	精緻	良好 堅緻		外面底部 「λ」

番号	器種	法量 ・口径 ・器高 ・胴部最大径	形態の特色	技法の特色 内面	外面	色調	胎土	焼成	備考	ヘラ記号の有無
9	提瓶	・9 ・22.8 ・19	口頸部は外反しながらのび、端部は肥厚し段をなす。胴部は円形を呈し、外面両肩に角状の把手がつく。	回転ナデ	回転ナデ 回転カキ目	灰褐色 淡褐色	細砂粒をやや多量に含む	良好		
10	坏身	・12.2 ・3.7 ・—	たちあがりは内傾してのび、端部は丸い。受部は水平にのび、端部はややとがる。底部は浅く平らである。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	青灰色	精緻	良好 堅緻		
11	坏身	・12＋α ・3.5＋α ・—	たちあがりは内傾してのびる。受け部は肥厚しながら上外方にのび、端部は丸い。底部は浅くやや平らである。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	青灰色 青紫色	精緻	良好 堅緻		
12	坏身	・12.3 ・3.9 ・—	たちあがりは内傾してのび、端部は丸い。受部は水平にのび、端部は丸い。底部は浅く平らである。	回転ナデ	回転ナデ	灰色	石英粒を含むが精緻	良好 堅緻		
13	坏蓋	・14.1 ・4 ・—	口縁部は外反しながらのび、端部は丸い。天井部はやや高く、丸みをおびる。	回転ナデ 調整ナデ	ヨコナデ 回転ヘラケズリ	青紫色 ～青灰色 青灰色 ～青黒色	石英粒を含むが精緻	良好 堅緻		
14	坏蓋	・13.6 ・3.9 ・—	口縁部は外反しながらのび、端部は丸い。天井部は高く丸みをおびる。	回転ナデ 同心円タタキ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	灰色	1～2㎜大の石英粒を含む	良好 堅緻		
15	高坏	・10.8 ・3.8＋α ・—	口縁部は外反しながらのび、端部は丸い。外面には稜がみられる。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色	精緻	良好		
16	坏蓋	・14 ・3.8 ・—	口縁部は外反しながらのび、端部は丸い。天井部はやや高く平らである。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	灰色 青灰色	角閃石粒を含むが精緻	不良 軟質		
17	坏蓋	・13.9 ・3.8 ・—	口縁部は外反しながら、ほぼ直下にのび、端部は丸い。天井部は高く丸みをおびる。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	青灰色 灰黒色	1㎜大の石英粒3～4㎜大の軟質の白色砂粒を含む	良好 軟質		
18	高坏	・11.4（底径） ・5.2＋α ・—	口縁部は外反しながらのび、端部は丸く、内面に沈線をなす。外面には1本の沈線をなす。スカシ窓あり。	回転ナデ	回転ナデ	灰褐色	砂粒をやや多量に含む	やや不良		
19	坏蓋	・13.2 ・4.2 ・—	口縁部はほぼ垂直にのび、端部は丸く内面に内傾する段を有す。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	青灰色	石英粒を含むが精緻	良好 堅緻		
20	坏蓋	・15.4 ・4.1 ・—	口縁部は外反しながらのび、端部はわずかに内傾する段を有す。天井部は低く平らである。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	青灰色	精緻	良好 堅緻	内面に同心円状の当て具痕	
21	坏蓋	・14.1 ・3.9 ・—	口縁部は外反しながらのび、端部は丸く内面にうすく沈線を有す。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	青灰色	1～2㎜の石英粒を多量に含む	良好		

番号	器種	法量 ・口径 ・器高 ・胴部最大径	形態の特色	技法の特色 内面	外面	色調	胎土	焼成	備考	ヘラ記号の有無
22	瓏	・14.4 ・17.2 ・—	口頸部は外反しながらのび、一度屈曲し外面に突帯がつく。端部は内傾する段を有す。体部は楕円形を呈し、中央に穿孔がある。	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	明灰褐色	細砂粒をやや多量に含む	良好		外面底部「×」
23	壷	・16 ・21.1 ・—	口頸部は外反しながらのび、端部は丸い。基部はよくしまっている。胴部は全体的に丸みをおび、最大径はほぼ中央部にある。底部はやや丸みをおびる。	回転ナデ 同心円叩き	回転ナデ カキ目状のナデ調整 タテ方向の平行叩き	明灰褐色	細砂粒を微量含む	良好	27号テラス出土遺物と接合	
24	坏蓋	・14.1 ・4.5 ・—	口縁部は外反しながらのび、端部は内傾する面を有す。天井部は高く丸みをおびる。外面には、稜がわずかにみられる。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	青灰色	2～3㎜大の石英粒を若干含む	良好 堅緻		
25	坏蓋	・14.6 ・4.3 ・—	口縁部はわずかに外反しながら直下にのび、端部は丸い。天井部は、やや高く丸みをおびる。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	青灰色	3～4㎜の石英粒を多量に含む	良好 堅緻		
26	坏蓋	・14.6 ・4.4 ・—	口縁部は外反しながらのび、端部は丸い。天井部は高く丸みをおびる。	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	青灰色	2～3㎜大の石英粒を含む	良好 堅緻		
27	坏蓋	・14.6 ・4.7 ・—	口縁部は外反しながらのび、端部は丸い。天井部は高く丸い。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	青灰色	1㎜大の石英粒を少量含む	良好 堅緻		
28	坏蓋	・14.9 ・4.2 ・—	口縁部は外反しながらのび、端部は丸い。天井部は高く丸みをおびる。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	青灰色	2～3㎜大の石英粒を多量に含む	良好 堅緻		
29	坏蓋	・14 ・3＋α ・—	口縁部は外反しながらのび、端部は丸く、内面にゆるい段を有す。	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	青灰色 灰色	精緻	良好 堅緻	反転復元	
30	坏身	・11.7 ・4.9 ・—	たちあがりは内傾してのび、端部は丸く肥厚する。受部は上外方にのび、端部は丸く底部は深く丸みをおびる。	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	青灰色	精緻	良好 堅緻		
31	坏身	・12.6 ・4.7 ・—	たちあがりはやや厚めで内傾しながらのび、端部は丸い。受部は肥厚しながら、水平にのび、端部は丸い。底部は深くやや丸みをおびる。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	青灰色	1～4㎜大の石英粒を含む	良好 堅緻		
32	坏身	・12 ・4.2＋α ・—	たちあがりは内傾してのび、端部は丸い。受部は上外方にのび、端部は丸い。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色	精緻	良好 堅緻	反転復元	
33	坏身	・12.4 ・4 ・—	たちあがりは内傾してのび、端部は丸い。受部はほぼ上外方にのび、端部は丸い。底部は浅く平らである。	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	青灰色	精緻	良好 堅緻		

番号	器種	法量 ・口径 ・器高 ・胴部最大径	形態の特色	技法の特色 内面	外面	色調	胎土	焼成	備考	ヘラ記号の有無
34	坏身	・12.4 ・4＋α ・－	たちあがりは内傾してのび、端部はわずかに、内傾する面をなす。受部は上外方にのび端部は丸い。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ	灰色	石英粒を含むが精緻	良好 堅緻		
35	瓶	・11.4 ・3.6＋α ・－	口頸部は外反しながらのび、端部付近で、さらに屈曲し、その外面に2本の沈線を有す。端部は内傾する段を有す。	回転ナデ	回転ナデ 回転カキ目	青灰色	精緻	良好		
36	坏蓋	・11 ・2.9 ・－	口縁部は外反しながらのび、端部は丸い。天井部は低く平らである。	磨滅しているため、調整不明	調整不明	黄灰色	精緻	不良		外面天井部「×」
37	坏蓋	・13.8 ・4.6 ・－	口縁部は外反しながらのび、端部は丸く内傾する段を有す。天井部は高く丸みをおびる。	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	青灰色	精緻	良好 堅緻		
38	坏蓋	・12 ・3.2＋α ・－	口縁部は直下にのび、端部は内傾する面を有す。外面にはうすい稜がみとめられる。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 青灰色 淡青灰色	精緻	良好 堅緻		
39	坏身	・9.2 ・3 ・11	たちあがりは内傾してのび、端部は丸い。受部はわずかに上外方にのび、端部は丸い。底部は浅く丸みをおびる。	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	黄灰色	精緻	不良		外面底部「卅」
40	坏身	・12.6 ・4.9 ・－	たちあがりは内傾してのび、端部は丸い。受部は肥厚しながらほぼ水平にのび、端部は丸い。底部は深く丸みをおびる。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	青灰色	石英粒を含むが精緻	良好 堅緻		
41	坏身	・12.6 ・4.6 ・－	たちあがりは内傾してのび、端部は丸い。受部は上外方にのび、端部は丸い。底部は浅くやや丸みをおびる。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	青灰色	1～4㎜大の石英粒を多量に含む	良好 堅緻		
42	坏身	・12.2 ・4 ・－	たちあがりは内傾してのび、端部は丸い。受部は上外方にのび、端部は丸い。底部はやや深く、やや平らである。	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	灰色	精緻	良好 堅緻		
43	坏身	・11.8 ・4.5 ・－	たちあがりは内傾してのび、端部は丸い。受部は上外方にのび、端部は丸い。底部は深く、やや平らである。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	青灰色	石英粒を若干含むが精緻	良好 堅緻		
44	坏身	・12.6 ・4.7 ・－	たちあがりは内傾してのび、端部は丸い。受部はやや上外方にのび、端部は丸い。底部は浅くやや平らである。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	青灰色	1～7㎜大の石英粒を多量に含む	良好 堅緻		
45	提瓶	・－ ・12.5＋α ・－	胴部は丸みを呈し、両肩に把手がつく。	回転ナデ	回転ナデ	暗灰褐色	細砂粒微量含む	良好		
46	提瓶	・4.5 ・10.6 ・－	口頸部は外反しながらのび、端部は丸く、やや面をなす。胴部は円形を呈す。外面両肩に把手がつくが一方は欠損してない。	磨滅	磨滅 カキ目痕が部分的に見られる	淡褐色	細砂粒を若干含む	不良		

番号	器種	法量 ・口径 ・器高 ・胴部最大径	形態の特色	技法の特色 内面	外面	色調	胎土	焼成	備考	ヘラ記号の有無
47	坩	・8.7 ・8.7 ・14.6	口頸部は短く直立してのび、端部は丸い。胴部はよくはり最大径は全体の上方にある。底部は浅くやや丸みをおびる。	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	灰白色	1㎜前後の砂粒を若干含む	良好		
48	手捏ね土器	・3.2＋α ・3.8 ・—	口縁部は直立し、端部は丸い。底部は丸底を呈する。	ナデ	ていねいなナデ	暗赤褐色	細砂粒を多量に含む 角閃石粒を含む	良好	土師器	
49	手捏ね土器	・3.2 ・2.4 ・—	口縁部は直立し、端部は丸い。底部は丸底を呈する。	ナデ	ナデ	暗赤褐色	角閃石粒を微量含む	良好	土師器	
50	直口壷	・10.7 ・11.8 ・11.9	口頸部は外反しながらのび、端部は丸い。胴部は楕円形を呈す。	磨滅	回転ナデ ヘラミガキ 黒斑赤色顔料がみられる	赤褐色	石英粒を含む	良好	土師器	
51	高坏	・10.6 ・9.9 ・—	坏部の口縁部は外反しながらのび、端部は丸い。底部は浅く平ら。脚部は下外方にのび、端部は丸い。	ナデ 磨滅	ナデ 磨滅	赤褐色	石英、金雲母粒を含む	良好	土師器	
52	坏蓋	・14.2 ・4.1 ・—	口縁部はわずかに外反しながらのび、端部は丸く内面に沈線がある。天井部はやや高く丸みをおびる。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	青灰色	石英粒を含むが精緻	良好 堅緻		
53	坏蓋	・14.8 ・3.8 ・—	口縁部はほぼ直下にのび、端部は丸い。外面には稜がわずかにみとめられる。天井部は低く平らである。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	青灰色	精緻	良好 堅緻	反転復元	
54	甕	・13.2 ・15.6 ・—	口頸部は外反しながらのび、端部付近で一度外側に屈曲し、端部は丸い。体部は丸く中央部に穿孔が施されている。	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	灰白色	細砂粒をやや多量に含む	良好		
55	甕	・14.8 ・3.8＋α ・—	口頸部は外反しながらのび、端部は丸い。外面には3本の丸い突帯あり。	回転ナデ	回転ナデ 櫛描波状文	灰色	精緻 角閃石、石英粒を少量含む	やや不良		
56	壷	・14 ・8.7＋α ・—	口頸部は外反しながらのび、端部は丸みをおび、内側にゆるい突帯をつけたような形態をなす。	回転ナデ	回転ナデ カキ目を施したあとナデ	淡灰褐色	細砂粒を若干含む	不良		
57	坏身	・12.2 ・4.4 ・15	たちあがりは内傾してのび、端部は丸い。受部は上外方にのび、端部は丸い。底部はやや深く平らである。	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	青灰色	1～6㎜大の石英粒を多量に含む	良好 堅緻		
58	坏身	・12.6 ・4.9 ・—	たちあがりは内傾してのび、端部は丸い。受部はほぼ上外方にのび、端部は丸い。底部は深く丸みをおびる。	回転ナデ 中央部に平行タタキ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	青灰色	石英粒を多量に含む	良好 堅緻		

番号	器種	法量 ・口径 ・器高 ・胴部最大径	形態の特色	技法の特色 内面	外面	色調	胎土	焼成	備考	ヘラ記号の有無
59	高坏	・13.6 ・4.2＋α ・—	口縁部は外反しながらのび、端部は丸い。外面には、稜が2ヶ所うすくみとめられる。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色	石英、角閃石粒を含む	良好 堅緻		
60	横瓶	・22.2 ・20.4＋α ・—	胴部は楕円形を呈し、底部は平らである。	回転ナデ	回転ナデ 回転カキ目	淡灰褐色	細砂粒を少量含む	不良		
61	壷	・14.4 ・19＋α ・—	口頸部は外反しながらのび、端部は肥厚し丸い。胴部は楕円形で丸みをおび、外面上方に1本沈線がある。底部はやや平らである。	器面が磨滅しているため調整不明	器面が磨滅しているため調整不明	淡黄褐色	角閃石粒を微量含む	不良		
62	甕	・22.2 ・35.9 ・43.6	口頸部は外反しながらのび、端部は段をなし、外面に凸帯がつく。胴部は、ほぼ円形を呈す。	回転ナデ 同心円タタキ	回転ナデ 平行タタキ	灰褐色	細砂粒を多量に含む	良好	27号横穴墓テラス出土遺物と接合	
63	甕	・22 ・45.6 ・45	口頸部はほぼ直立しながらのび、端部は丸い。胴部の最大径は中央部にある。	回転ナデ 同心円タタキ	回転ナデ タタキを施したあと回転カキ目	灰色	石英粒をやや多量に含む	不良		
64	甕	・— ・43.6＋α ・45	胴部の最大径は上方にあり、底部はとがりぎみである。	回転ナデ 同心円タタキ	タタキを施したあと回転カキ目	青灰色 明青灰色	1mm～1.5mmの白色砂粒少量含む 精緻	良好 堅緻	27号横穴墓テラス出土遺物と接合	
65	甕	・28 ・65.6 ・56.8	口頸部は外反しながらのび、端部は段をなし丸い。外面には、4条の沈線あり。胴部の最大径はやや上方にある。	回転ナデ	回転ナデ 平行タタキ	青灰色	精緻	胴部中央より上半分良好堅緻 下半分不良		
66	甕	・31.2 ・9.6 ・—	口頸部は外反しながらのび、端部は段をなし丸い。外面には2条の沈線が2ヶ所ある。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 明青灰色	0.5～1.5mmの石英粒を含むが精緻	良好	27号横穴墓テラス遺物と接合	
67	甕	・— ・54 ・53.6	胴部の最大径はやや上方にある。底部は、ややとがりぎみである。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 明青灰色	0.5～1.5mmの石英粒を含むが精緻	良好	27号横穴墓テラス遺物と接合	
68	手捏ね土器	・6.7 ・		指オサエ	ナデ	明褐色		良好		

第57表　26号横穴墓出土鉄器観察表

（単位：cm）

番号	器種	全長	頭部長（刀部）	刃幅	頸幅	刃部厚	頸厚	備考
69	鉄鏃	10.1以上	8.5	4.5	0.4	0.3	0.35	
70	同上	10.1	7.2	3.4	不明	0.3	不明	桜樹皮巻残存
71	同上	9.8	5.5	2.3	不明	0.3	不明	木質残存
72	同上	11.3	5.6	3.0	0.4	0.25	0.3	同上
73	同上	8.4以上	6.1	2.6	6.5	0.3	0.25	
74	同上	9.0以上	3.3以上	2.2	0.7	0.3	0.2	桜樹皮巻残存
75	同上	13.8	3.2	1.7	0.7	0.2	0.3	木質残存
76	同上	12.8	4.6	2.2	0.65	0.25	0.25	桜樹皮巻残存
77	同上	12.3以上	3.0	1.2	0.5	0.2	0.2	
79	同上	7.7以上	5.0	1.8	0.6	0.2	0.3	
80	同上	5.9以上	3.9	1.7	0.7	0.2	0.3	
81	刀子	16.3	10.2	1.4	不明	0.3	不明	木質残存
85	直刀			3.2	2.0	0.8	0.8	目釘穴２個

第58表　26号横穴墓出土耳環・石器計測表

（単位：mm，g）

番号	種類	外径		断面径		重量	備考
82	銅地銀張	33.5×30.5		8.5×80		29.4	
83	同上	30×26		5.5×5.0		10.4	緑青
84	同上	29.5×26		5.0×5.0		9.2	緑青
番号	器種	全長	幅	厚さ	材質	備考	
78	砥石	10.0	3.6	2.2	頁岩質砂岩	四面とも使用痕が認められる	